



TITLE:

米穀需給の研究：『雍正史』の一章 としてみた

AUTHOR(S):

安部, 健夫

CITATION:

安部, 健夫. 米穀需給の研究：『雍正史』の一章としてみた. 東洋史研究
1957, 15(4): 484-577

ISSUE DATE:

1957-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145894>

RIGHT:

米穀需給の研究

——『雍正史』の一章としてみた——

安 部 健 夫

目 次 (附注のS印は補注の意)

- 一、産食稻米區域——その外と内と
- 二、産食米區域内での米穀の需給關係(上)
- 三、産食米區域内での米穀の需給關係(中)
- 四、産食米區域内での米穀の需給關係(下)
- 五、中・南シナ諸省の米穀事情(上)
- 六、中・南シナ諸省の米穀事情(下)
- 七、各省間における米穀の流通

一 産食稻米區域——その外と内と

民國初期(一九一五―七)の中國人が何を主食にしていたかについて、次のような事がいわれている。「北支那乃至滿洲方面の住民は、米の代用として麥粉で作つた麵を食う

ことが盛んである。下つて中部支那すなわち揚子江沿岸の地方は、到るところ米の産があるので、極下等社會を除くほか主食は米である。……北方の如く麵を多く食わない。南支那地方は揚子江沿岸ほど米が多く出来ないが、北方よりも餘計に産出し、且つ汕頭の如きは……中流以上のものは大抵米を食うている。米の外に支那人の主食物となるものは麵類で、下等社會に至つては麥・粟・高粱等を使用する⁽¹⁾。「揚子江沿岸に在りては上下皆米食を爲し……三度の食に皆米を使用す。なお米の生産地にあらざる地方にては、一般に米の相場低きときは多く之を使用し、高きときは他のものを使用す⁽²⁾」。「米は支那人の常食中最も重要な糧食たるのみならず、酒の醸造に用いらる。(安部注、以下の本

研究では、酒造用米のことには論及しない。但し下級者は米の外に粟・黍・玉蜀黍・麵を食するもの多し。殊に北支那において古來米を食するものは、中支那及南支那に比すれば甚だ少なく、偶々之を食するものありても其米を中支那における米産地に仰げり⁽³⁾。

要するに民國初めの中國人の主食は、土産の穀物の種類が違うにつれて北部と中部と南部とで少しく差があり、そのうち米、とくに大米、すなわち稻米を主食とするのは量的にみて中シナを最とし、南シナがこれに次ぎ、おそらくは北京などの大都會地をその例外として、北シナが最も少なかつたというのである。それからほぼ二百年前の雍正時代（一七二三―三五）にあつても、中國における産米（稻米）區域の分布と中國人の米食の傾向とは大體このとおりであつた。ただこの場合の非産米區域としての北シナは、ほぼ江蘇・安徽兩省の北部から河南省をつくして湖北省の北部に引かれる線で、中シナから區別されていたかに見える。なるほど、地氣甚だ寒いといわれる陝西省の寧夏府においてさえ、稻穀が種えられ稻田に灌^{そく}そくこうとしてゐる。⁽⁴⁾北シナにも大米が産しないわけではなかつたけれども、しかしその地

に産する主穀はやはり小米や高粱、とくに小米であり、またそれらがその地の人民たちの主食でもあつた。

雍正五年のことである。直隸省のいわゆる營田系の水田では稻穀が豊作であつた。ところが大學士の朱軾は奏して、民間では稻米を食うのに慣れていないから、それを政府で買上げてやり、その代價の銀で小米と高粱を買わせたらと言つてゐる。⁽⁵⁾また雍正二年のこと、江浙地方の潮害に際して、河南・山東の二省に對し、各々米六萬石を江蘇巡撫に運交して平糶せしめよとの命令がでた。山東巡撫の陳世倌は、東省では大米が甚だ少なく値段も南方に倍する。ただ小米が採買できるだけだと奏上して、朕が買えと命じたのは原より小米のことだ、大米がどうして得られようとの殊批を受けてゐる。⁽⁶⁾またその前年のことである。山東省では、江西省から通州倉に運ぶべき漕運米のうちから、二十萬石だけを途中で截留して、各府州縣に分貯せしめられることになつた。そのとき巡撫の黃炳は、東省の民間の食用はともに小米である。かつて南方の大米を買つたことがない。紅朽しやすい大米の形で貯備するよりは、東省から漕糧として解^おくべき小米をその代りにしてはいかがと意見を申し

立てている。⁽⁷⁾ 饑饉の餘には草根・樹皮をもつてしてすら口に飼する、大米・小米の分別など贅澤千萬と、雍正帝からきびしい叱責をうけてはいるが、ともかくこれによつても山東省民の最も普通に食う穀物の少なくとも一つが小米であつたことは判るであろう。

山東省からの漕運米が小米で支辨されていたことは、前述の黄炳の言葉の端から察せられるばかりではなく、法敏が雍正二年に、各省の漕米は事一體に屬してはいるはずなのに、今、山東の小米（粟米）^{つみかえ}の起剥には現在税銀を収めず、南省の粳米・稜米^{うもち}の起剥には獨り税を収めしめているとぼやいていることから判るが、⁽⁸⁾これと同じように河南省からのそれも小米であつた。⁽⁹⁾ 耕種の方法が拙劣で、たとえば山西省の井、四川省の堰、湖廣省の龍骨車に類するような灌田の法を講ぜず、全く自然の雨澤に頼りきつていたといわれる河南人に對し、稻米、とくに水稻の生産を望むことは初めから無理だつたのであろう。⁽¹⁰⁾ 當然小米がその地の主食の一つになつていたはずであり、またじつ文獻的にも、豫省（河南省）の民人は麥・麵・小米等を食う者が多く、大米を食う者は少ないといわれているが、⁽¹¹⁾この點、東は江蘇省

の北部から、西は湖北省の北部にかけても同様であつたと見られる。雍正帝が、北地には稻米が稀少だから、倉穀を買補するに足りないという場合の、その「北地」とみられてもよい地域は、より一般的には、ひろくそれら以北の範圍を含むものであつたと見られる。雍正三年八月、巡撫として北京から浙江省に赴任した福敏は、途中で知りえた米價を、下つて江蘇省の鎮江・常州・蘇州までくると、單に「米」價は每石一兩三四錢不等とするに對し、直隸省涿州以南の水害地については、秋禾の「小米」每斗小錢四百二十から七八十文不等、山東省德州以南・泰安州等の處については每斗小錢一百六七十文と記し、恐らくは江南省淮安府までの米價を小米の建値で示そうとしており、⁽¹²⁾四年十月、署理總督として北京から湖廣省に赴任した同じ福敏は、直隸省では「小米」每斗二百四五十文から三百二十文不等、河南省開封等の府から湖廣省德安等の府に及ぶまでは、每斗二百二十三十文、或は一百一二十文不等とやはり小米の建値を示している。⁽¹³⁾ 雍正八年末、江蘇巡撫の尹繼善が、淮揚の米糧每石九錢・一兩不等に對し、徐州・邳州一帶については特に「小米」一兩上下といつている事とともに極めて印

象的である⁽¹⁰⁾。なお、大小米の建値は、おそらくその商品としての流通規模を反映したものであろう。小米が多く斗單位に制錢で表わされていたのに對し、大米は石單位に銀兩をもつて表わされるのが普通であつた。もつとも小賣の場合は大米でも、もちろん制錢だてであつた。このことは、たとえば京師の五城につくられる米廠での糶賣のさいは概して錢文を用いたとか、蘇州の四門に米廠を設けて平糶したときには、毎升錢十文を収めて一升から三升までの米で小戸貧民を接濟したなどと言われていることから察知することができよう。

小米は一つに粟米ともいわれる。貴州巡撫の張廣泗が、ある報告中では、稻穀(稻禾)・黍などに對して「粟米は則ち穗長一尺四五寸より二尺不等に至る」といい、他のそれの中では、稻穀・高粱などに對して「小米、穗長二尺、並びに二十四穗なる者あり」といつているようなのがその例證である。安徽巡撫の魏廷珍が、同省西北部の蒙城縣についてのみ「粟米」で米の建値を記し、一石價ただ四錢八分といつているのは、前述「小米」建値の類例の一つとして注意さるべきであらう。山西巡撫の石麟が、平地の「粟

禾」は長さ二尺八九寸から二尺五六寸不等、高地の粟禾は……といつているのも、もちろん小米である⁽¹¹⁾。粟米はまた小米ともいわれた⁽¹²⁾。粟はしばしばモミゴメの義にも使われる。しかし例えば河南省城の米價が、某年六月内には粟米で每石價錢が一兩七錢であつたといわれる場合、その粟米は、決してモミゴメではない。それはただ稻穀にあらざる小米、要するにアワなのである。アワといえば、少なくともわれわれには、直ぐ小鳥の餌が連想されて甚だ味氣ない思いにかられるが、品種によつては相當美味なものもあつたらしい。清朝では八旗兵を初めとする兵士たちは、主穀に關するかぎり一體に口がおこつていた。毎年新米を支給されていたせいもあつて、カビくさい倉出し米などには見向きもしない⁽¹³⁾。ところが、雍正十一年のことである。當時、西征軍の軍需基地になつていた陝西省に、湖廣省から米を送つてきた。あいにくそれらはみな稂子・糙米で、色味がもともとそう佳くはないところに、輸送の途中で水氣をかぶつてゐる。大營の官兵のためには、顆粒の圓淨で煮食して甘美なものでなければならぬ。そこで署陝西巡撫の史貽直は、今歲陝省は豐作で、收穫した「粟穀」は顆粒が分

外に乾圓で、色味も甚だ甘美だから、問題の湖廣米のかわりにその「粟米」を改撥したいといつてゐる。⁸⁰北方の小米が質的にみて、主食として優に南方の大米に對抗するに足るものであつたことが判るであらう。

小米の生産が河南・山東兩省から山西・陝西兩省に及んでいたことは、ほぼ前述のとおりである。年の豊凶によるのかも知れぬが、中でも山西省については今年（三年）は豐作で、近來平定一帯から直隸に販往するものが多いとか、⁸¹今年（九年）は直隸・河南兩省の民人で山西省にきて販賣搬運するものが絡繹相繼ぐので、米價が日に増してきたなどと傳えられている。いずれにせよ、いわゆる北シナ一帯は、多く粟禾を栽培し、小米を主食にしていたのであるが、しかもこの地帯はまた同時に、中國における最も主要な産麥・食麥の地帯でもあつた。文獻の上でも、山東省及び江蘇省北部の淮安所屬の各州縣では麥を産することが最も多く、その價もいやしく、⁸²淮・徐一帯では民食が全く二麥に資つていたとさえ言われている。⁸³乾隆元年所修『江南通志』卷八十六食貨志、物産、徐州府の條にも、

稻は乃ち他郡の常産。惟だ徐地は舊ただ黍・稷・麥・

菽を種う。⁸⁴近ごろ間々稻を種うる者あるも止だ水旱二種のみに。故に特産となす。

とある。あたかも雍正期の實相にはかならない。湖廣省、とくに湖北省にあつては、少なくとも邁柱のいう所を信用するかぎり、雍正初期にはただ鄖陽と襄陽との二府、すなわち北部地方にのみ麥が栽培されるにすぎなかつたが、その後政府の勸奨もあり、かたがた雍正五年の大水害の後は、いわゆる「麥熟」が夏の出水期（伏況）の前にあるのを利としてこれを種えるものが多くなり、ことに湖北省の民衆は、これまで廢棄されていた「湖地」を利用して一層さかんに麥を作るようになったのだという。⁸⁵

ともあれこのようにして、東は江蘇省の淮安あたりから、西は湖北省の鄖・襄ないしは德安にいたるまでの「線」の北方一帯が、穀産の上では問題なく北シナ的であつたし、穀食の點でも、南方からする大量のいわゆる漕糧米に依存していた、北京を中心とする畿輔一圓の地——當時の常套語に従うなら、およそ在京の王大臣および文武官員の俸祿と八旗披甲よりもつて各營兵丁に及ぶまでの糧餉とは、みなこの漕糧のうちから取給された——を例外として北シナ

的であつたのである。「線」とはいえ、それが著しく不規則な出入りを示していたであらうことは、現在の多少とも信用できる調査に基づく、穀物類の生産圏を圖示した産業地圖の圖面からもすぐ想像できることだが。

産米・食米區域としての中シナや南シナにおける、稻米や穀、つまりモミゴメの在り方については、また後に詳しく述べる機會があるであらう。ここでは、米の代用食ないしは對抗物としての大小二麥——といつても大麥は、現狀から推測する限り、飯米代用としてそれほど需要されたとおもう思えぬが（二五三頁）——その他のものが、これらの地方ではどのように取扱われていたかを簡単に述べておこう。

麥の栽培は大體においてこれら中・南シナの全域に普及していたが、ただ、第一、全般的にみてそれは北シナにおいてのように重要さを持ちえず、第二、地方によつてはむしろ著しく麥の栽培に不熱心であつたように思われる。第一の點については問題はない。第二の點に關しては不熱心の地方からみていくことにしたい。

まず湖廣省である。この地方が麥作の點で非常におくれていたことは前述のとおりで、邁柱によると、百姓は二麥

の利が稻穀と二無きを知らなかつたため、楚省では従前多く麥を種えなかつたのである。³⁰ 雍正五年以後、徐々に二麥の栽培が普及してきたことは事實であらう。しかし邁柱が再三誇らしげに吹聴したほど順調でもなかつたことは、雍正十三年七月——雍正帝の治世の極末期に、たまたま邁柱が、本年楚省の二麥は豐收の旨を奏上したのに對し、帝が言葉はげしく「湖北の民食の重んずる所は米にあつて二麥をもつて事とせず」といひ、あまつさえ、この奏は不實だから朕は不覽に付すると怒つてゐるのでも明らかである。湖北大水害のあとを受けた六年五月に、二麥収割ののち、民間では「麵食」して接濟するものがあるというもの、これなどはもちろん非常中の非常の事態というべきであらう。同じ湖廣省でも、湖南省の方が麥作に對しては一層不熱心であつた。元年に巡撫の魏廷珍は、湖南地方は稻に宜しく麥に宜しくないのので、州縣で麥を種えたと報到するものは甚だ少ないと言つてゐるし、その二三代目の後任者の布蘭泰も、四年四月に、湖南所屬では禾稻を栽えるものが多く、二麥を佈種するものは少ないと斷じてゐる。³¹ さらに八年五月の總督邁柱の報告には、「山郷は素より麥を産せず、岳

州・常德・澧州の三府に間々、麥を種うる處あり」といつて
 いるが、これがおそらく湖南における麥作のギリギリの所
 であつたのであろう。湖南省とは東隣りの江西省も、麥作
 に對する不熱心さではその西隣りにひけを取るものでなかつた。雍正前期にこの省で巡撫や署理巡撫事の任にあつた
 裴率度がたびたびそのことを言つてゐる。たとえば江西各
 屬に至つては、麥を種えることが稀少で、竟に全く麥を種
 えないう處もあるとか、江西省で麥を種えている地は僅かに
 十の二三だと言ふようなのがそれである。また「南昌等の
 八府所屬の素より麥を産しない州縣を除くほか、その餘の
 各州縣から、大麥はともに已に登場し、小麥は現に收穫し
 つつあるとの報告をうけた」——巡撫布蘭泰のこの廻りく
 どい表現のうちからも、同じような情報をくみとることが
 できよう。湖南省の西南に接する廣西省も、その麥作の點
 あまり熱心であつたとは言えない。巡撫汪灝の報告に、「粵
 西に至つては麥すでに成熟せるも、但だ麥を種うるの處甚
 だ少なし」とあるのがこれを物語つてゐる。

湖廣・江西および廣西の三省と、文献的にはまだ明證を
 得なかつたけれども、おそらくは四川省も——これらの諸

省を除く中・南シナの諸省では、どこでもかなり廣汎に麥
 が栽培され、官民ともにその栽培に熱心であつたように見
 える。例えば雍正九年前後に安徽巡撫であつた程元章は、
 安徽所屬の地方は去年の麥秋には收成が豊稔で物は阜かに
 民は安かつた。秋收の後には麥を種えることが最も急務で
 あるといつており、また江蘇省については、巡撫の喬世臣
 が、二麥は民食に關わりあり、江蘇所屬の各府州では佈種
 すること素より廣く、閭閻はみな接濟に頼つてゐると言つ
 ている。江蘇とはいへ、單にその北部地區——北シナの
 淮徐一帯に限つてゐるのでなかつたことについては多くの
 例證がある。また、恐らくは麥作奨勵の結果でもあろう、
 この地の二麥の畝當り收穫量も年とともに高まつていつた
 ものと見え、雍正末年の總督・趙弘恩の奏摺には、上田一畝
 ごとに竟に二石四五斗不等、中田は毎畝一石六七斗、下田で
 もまた畝ごとに石餘の収量をうるまでになつたといつてゐ
 る。もつともかの喬世臣は別に、二麥は民食の關わるにと
 ろ、江蘇の農佃の家は尤も春熟に頼つて接濟するとも言う。
 二麥がついに貧しい直接生産者たちの食いつなぎの資にし
 か過ぎなかつたことは注意さるべきであらう。麥は現地で

作られたほか、淮關を通つて山東・河南など北方の省分からも續々と送られていた。江南總督・趙弘恩によつて、江省民食の資するところといわれた豆貨は、山東省から海運・河運によつて盛んに同地方に輸入されるとともに、長江によつて湖廣省方面からも送られてきた。豆貨は官兵の馬糧となり、民間の醬油釀造用となつたほか、その一部は恐らく、やはり二麥と同じくそうした場合の接濟の用に當てられていたのであろう。

江蘇の南に隣接する浙江省についても、例えば、二麥や蠶絲が豐収をえたので米價がだんだん下つてきたという風に、二麥に關する記事が習見する。江蘇省と同じように廣く栽培もされ、また栽培が勸奨されていたのでもあろうが、そこから峻嶺を越えて西南に接する福建省、そのまた西方に連なる廣東省ともなると、南シナのたとでもいふのであろうか、少しばかり事情が違つてくる。二麥が佈種されなかつたわけではない。福建省屬の臺灣府その他數府を例外として、概して麥の作付は盛んであつたが、ただそのほかにも、地瓜とか番薯とかいわれたサツマイモの栽植が目立つてくるのである。

福建省では、泉・漳二府が麥を種えることが最も廣く、福州・興化の二府と福寧の二州でも麥を種えるものが多かつたらしい。少なくとも雍正十年にはそうであつた。いやその六年前にあつても、浙閩總督・高其倬は、かつて福建省で仕事をしていた屬員たちの口から、一様に「福・興・泉漳の人もまた麥を食う」という情報を与えている。十年だけの特異現象でなかつたことは明らかである。これに對し、麥を種えるものの少なかつたのは、延平・建寧・邵武・汀州の四府であり、とくに臺灣については、臺灣は海外、二麥を種えずとか、臺灣さきには麥を種えずなどといわれている。廣東省については、雍正七年三月、當時署布政使事であつた王士俊が、目今、大麥・小麥が田畑中に青々としており、なかでも惠州・潮州の二府は麥を種えること最も多いといつてゐるのが注意される。一般的には、沿海の各府では地土が滋潤であるために、民間で麥を種えるものが十の六七に達したが、山に近い各府では間々沙磧があるために、麥を種えるものがだんだん少なくなつていたのである。均らしてみても、よほど麥作が普及していたのであろう。しかも、この南シナ二省を通じて、麥作の盛んな

ところは、申し合わせたようにまた番薯作の盛んなところでもあつた。すなわち、福建省の福・興・泉・漳の四府と廣東省東境の潮州とでは、番薯をもつて米糧に代える風が盛んであつたのである。⁶⁵

南シナ人も麥を食つた。しかし第一、福建(等)人で麥を食うものは多くはなかつたし、第二、決して好きで食つてゐるわけでもなかつた。⁶⁰ 食わざるを得なかつただけのことである。この點、中シナ人にとつても同然であつたであらう。番薯ともなると、主食としての適性は恐らく麥以下である。⁶⁰ 粵東ではこれをもつて「飯と作し^な」ていたともいわれるが、要するにそれは、僻地の民か窮民のための食料にしかすぎなかつた。事實、福建省各府の郷僻の處の民人は多く薯蕷を食つて竟にこれを以つて數月の糧に充てたともいわれ、⁶³ また、同省の窮民はこれを種えて餬口の計をなし、稻を種えるものが少なかつたとさえ言われている。番薯はふつう毎觔錢一文。場所によつては毎十觔七文のこともあり、一人一日の食費がわずか一二文にすぎなかつたという。⁶⁵ どん底の民衆たちが甘じてこれに生命を托したゆえに外ならない。

二 產_{II}食米區域内の米穀の需給關係(上)

ある所では二麥が、またある所では番薯までが作りかつ食われていたとは言え、ともかく中・南シナの各省分が、全體としてみて產米_{II}食米の區域であつたことに問題はない。ただしそれらの各省分は、各省單位の米穀の生産と消費・供給と需要との關係についていかきり、けつして一樣の状態にあるものではなかつた。麥または番薯の產・食がそれを暗示してゐるように、すべてが各自にその所要の米穀を自足できるような状態にはなかつた。より嚴密に言えば、なかつたように思われるのである。

第一、純粹に經濟的な見地からみても、というのは、あらゆる政治的な影響を、假りに排除して考えてみても、各省内部における、少なくとも、抽象的な理窟の上からそうあるべきであつた米穀の供給量(S)と需要量(D)との關係、むしろその場合のS/Dの比率が、自然地理的・人文地理的な諸條件に左右されて、各省ごとに相當かけ隔たつていたように思われてならない。もちろん、はつきりした統計計數によつて、それが立證できるわけではない。中國とく

に清代およびそれ以前の舊中國に、統計的な數字が少なく、たとえ絶對的に少ないわけではないにしても、安心して信頼できる數字が極めて少ないことは學界の常識である。理論的には、 D は一人一年當り米穀平均消費量 \times 食米人數、 S は稻米作付延べ面積（二毛作地を含む） \times 畝當り平均収量で割り出されるはずではあるが、常識的にも大體の見當のつく平均消費量はともかく、その他の諸項については、どれ一つについても、信用できる數字は與えられていない。 S/D の少なくともは、つぎの數値を捕えることは不可能である。ない物ねだりは止めるに若くはない。

ただ幸い、清代の政書のうちには各省の提出にかかる奏銷冊、すなわち年次財政決算報告書にみえた、田土總數に關する統計數が何年分かのこつてゐる。すでに小竹文夫氏も指摘してゐるとおり、この統計は、主として各地方政府が田賦収入を測定して、中央送金あるいは送糧の標準としたいわゆる定額の合計であつて、定額外の調査不行屆あるいは隱蔽された耕地等は含まれていないのだから、一畝の大いさの地方的差異を別としても、奏銷冊の數額とその時の實際の耕地面積とは全く別物なのである。⁽¹⁾氏自身は、康

熙二十四年（一六八五年）の奏銷實數、天下民田總計六百七萬八千四百三十一頃一畝餘、雍正二年（一七二四年）のその六百八十三萬七千九百十四頃二十七畝餘に對して、康熙時代の實際耕地面積は約千二百萬ないしは千三百萬頃ぐらひではなかつたかと推定してゐる。⁽²⁾ほゞ四割の調査不行屆あるいは隱蔽があつたと見てゐるのである。一方、雍正時代に久しく四川省の巡撫をしてゐた憲德は、その五年十一月には、川省の隱田は別省に比べると同じでない、別省の欺隱は十の一二に過ぎないのに、川省の欺隱となると所在に皆あるといひ、⁽³⁾大がかりな丈量檢地の濟んだ八年八月には、川省の従前の田地の欺隱は委に十の五六に係ると斷じてゐる。⁽⁴⁾小竹氏のいう四割は多すぎるとしても、全國平均して二・三割程度は隱蔽されてゐたのであらう。こうして甚だ中途半端なものではあるけれども、ともかく田土の面積が各省別にも記録されてゐる。われわれはこれを手がかりにする事によつても、ある程度までは S/D の數値に近づき得るのではないかと思う。

まず、主要な産米・食米地帯としての中シナのうちでも、比較的重要でない雲南・貴州の二省をのぞいた自餘の七省

と、必ずしも主要産米¹⁾食米地帯とはいえぬかも知れぬが、しかしかなりの程度まで米を産し、また食米習慣の相當普及していた南シナの三省との、雍正二年度奏銷冊における田土面積を廣いものから順に表示すると次のとおりである。⁽⁵⁾簡明を期するため、千位以下の數字は四捨五入した。單位は頃(百畝)。

省 分	田 土 面 積
江 蘇	680,000
湖 北	540,000
江 西	480,000
浙 江	460,000
安 徽	330,000
湖 南	310,000
廣 東	310,000
四 川	210,000
福 建	(130,000) ⁽⁶⁾
廣 西	80,000

これらの數字は前述のように、その當時の耕地面積の全數ではない。もしあの憲德の推定が正しかつたとするなら、四川省關係の數字についてはこれを○・四もしくは○・五で割り、その他の省分關係の數字についてはこれを○・八もしくは○・九で割れば、當時の耕地面積の全數により近いものが出て來ねばならぬはずである。しかも全耕地面積は決して直ちに全稻作地面積ではない。民國初期の産米省

分²⁾中シナ七省における稻作面積の全耕地面積に對する比率については、大體これを四割見當とみる調査——というよりは推定もあるが、⁽⁷⁾しかしこの數字が直ちに雍正時代にも當てはまるかどうかは大きな疑問である。雍正時代に關して確實にいえることはただ、田土面積³⁾耕地面積から稻の作付面積を大概的にあれ推斷するためには、後にも觸れるように、各省ごとに種々特殊な農作事情を考えあわせねばならぬという事ばかりである。地味の良否・田の位置の高低などによつて區々まちまちな稻米の畝當り收穫量——それらを思うとき、田土面積⁴⁾耕地面積から稻米の年收量までにはいよいよもつて道遠しの感じなきを得ない。にも拘わらず、全耕地面積はある程度まで、稻作地面積および稻米の年收量と並行的な關係を保っている。後二者を確實な文獻によつて捕捉し、もしくは精密な推理によつて算出しえない以上、しばらく奏銷冊のいわゆる田土面積をもつて、S—D關係の今の問題の立論の根據にすることは許容されてもよいであらう。

とすると、少なくとも稻米の年收量の絶対額に關するかぎり、江蘇・安徽を含むいわゆる江南省と浙江省とは、そ

れそれに一應、雍正時代における第一級の大米ところであつたと見なければなるまい。なるほど江南省の北部一帯は前述のように、農作事情からみてむしろ麥作區域に屬した。また浙江省についても、浙西（杭州・嘉興・湖州⁽⁸⁾）の民は税賦を出すのも生計を立てるのも、主として蠶絲に頼つていたとか、その杭・嘉・湖三府屬の地方は地が窄いのに人が稠く、民間では多く育蠶をもつて業としていたので、田地の大半では桑を植えていたと言われている。麻を植えることも盛んだつたらしい。⁽¹⁰⁾ 田土面積ないしは全耕地面積の相當大きい部分がそれらの方面の用途に食われ、稻の作付面積、したがつて米の年収量も、相當ひかえ目に見積られねばならぬことは確かである。だがそれにしても、江南省もしくは江蘇省と浙江省とを一つに合わせたものは、依然として雍正時代における第一級——むしろ最大の米ところであつたと見なければならぬ。よく知られている通り、これらの地方は、宋元以來「蘇・常熟すれば天下足る」とか「江・浙稔れば天下足る」とかいわれて、天下の臺所を賄う最大の米どころであり、下つて民國初期になつても、湖南・江西二省の公稱米産額それぞれ平作五六千萬擔に對し、

江蘇省のそれは九千萬擔、安徽省のそれは七千萬擔、浙江省のそれは二三千萬擔であつたといわれるが、清代の中期にあつても少なくとも絶對量的にはやはり昔ながらの面影を残していたわけである。

この天下最大の米どころも、しかし、稻米に對する需要ないしはその消費の面から見直されると、足許が充分怪しくなつて来る。なつて来るようにみえる。もつとも、この場合の立論に必要な米穀の消費人口についても、信頼できるような計數はない。とくに各省別の人口統計はない。わずかにその各省別の人口統計に代用できそうな資料としては、『雍正大清會典』『皇朝文献通考⁽¹²⁾』などに記載された、

省 分	人 丁 數
浙 江	2,760,000 ^丁
江 蘇	2,670,000
江 西	2,170,000
福 建	1,430,000
安 徽	1,360,000
廣 東	1,140,000
湖 北	450,000
湖 南	340,000
廣 西	200,000
四 川	150,000

雍正二年の直省人丁數の統計を擧げることができる。問題の十省の人丁數を、前の田土面積の場合の例にならつて、

多いものから順に表示すると前のとおりである。千位以下の数字は四捨五入。ここに人丁とは十六歳以上六十歳以下の成年男子をいう。清朝では賦役黃冊すなわち徵稅臺帳を編纂するために、はじめは三年に一度、後には五年に一度、課稅對象としての人丁數の調査を行い、これを編審といつたが、前に掲げた統計數もそのような編審によつて得られたものに外ならない。人丁數は必ずしも直ちに戸數でもなければ、ましてや大小口をふくむいわゆる口數ではない。ただ當時は、一戸五六人(丁)の場合でもただ一人(丁)、九丁・十丁の場合も亦一・二人(丁)が錢糧を交納するといふ實狀であつたし、また例えば乾隆元年修『四川通志』のよ
うに「戸」すなわち「丁」としているものも無いではない。⁽⁴³⁾
中國の人口學者陳長蘅氏とともに、人丁數は大體戸數に相當したものとみて大過はあるまい。⁽⁴⁴⁾一戸の平均人數を五口とすると、一應その人丁數から人口數も割り出されるわけであつて、兩者の間には曲りなりにも了解の通路が付いていたのである。そこで更に問題になるのはその數字の精確度だが、この場合も田土の場合と同じく税金のがれのための隱匿が多く、三割ちかくも隱匿・未報のものがあつたの

ではないかとの推測も行われている。⁽⁴⁵⁾

直省人丁數から當時の人口を推定するためにも、こうして種々の計數的な修正を経ねばならぬが、しかしこの人丁數が、先の田土面積數の稻米の年收量に對する場合以上に、食米人口數——とくに理論的な食米人口數、すなわち、できたら稻米を食つたであろう人口數に對する、より親近な、より精確な系數になりうるものであつた事は、多言を待たずして明らかであろう。今この人丁數値(A)をもつて田土面積數値(F)を除してみよう。その商 F/A は、もちろん、それ自身としては我々の知りたいと思う S/D ではない。しかし、各省について得られる $F_1/A_1 \cdot F_2/A_2 \cdot F_3/A_3 \dots$ の系列が、 $S_1/D_1 \cdot S_2/D_2 \cdot S_3/D_3 \dots$ の系列と、ほぼ並行的な關係にあらねばならなかつたことは極めて見易い道理であるであろう。例によつて數値の大きなものから順に表示すると次のとおりである。

ここに見える數字は、全體的にみてかなり頼りない基礎に立つてゐるばかりではなく、各省それぞれについても、それぞれ特殊な事情によつて修正さるべき餘地が少なくない。江蘇・安徽および浙江の諸省については前にすでに述

省 分	F÷Aの商
四 川	1.400
湖 北	1.200
湖 南	0.912
廣 西	0.400
廣 東	0.272
江 蘇	0.258
安 徽	0.243
江 西	0.221
浙 江	0.167
福 建	0.092

べた。比較的に田(F)廣人(A)稀の北部一帯が、麥作[≠]非米作區域として計算から扣除されねばならなかつた前二者の場合はもちろんのこと、人稀なとまではいかずとも、ともかく田土の少なからぬ部分が高度商品性作物——いわゆる換金作物的なものの栽培のいわば犠牲に供せられていた後者の場合にも、それぞれの條件がF-Aの數値に對して負^{マイナ}の力となつて働く。F-A第二位の湖北省についても麥作[≠]非米作區域が差し引かれねばならなかつたことは、これまた前述のとおりである。

廣東省については、正・負^{プラス・マイナス}兩様の力が働いていたように思われる。マイナスのそれは浙江省（また恐らくは江蘇省の南部）と同じで、有利な換金作物のための土地利用が盛んであつたことである。換金作物の栽培は、當時、多かれ

少なかれ、全國的な規模で行われはしたものの、やはり民度の進んだ江・浙・廣東などの諸省ではことのほか盛んであり、問題の廣東省に關しては、本處の人がただ貪利重財を知り、地土をもつて多く龍眼・甘蔗・烟葉・青靛^{あい}の屬を種え、もつて民富んで米の貴なるを致したことが非難の意をこめて指摘されている。⁰⁷これに對するプラスの力とは、

稻米の二毛作が行われたことである。雍正期中國における稻米の二毛作適地としては、一おう江南・江西・湖廣・粵東（廣東）等の諸省の名が擧げられている。ただそれは、雍正帝のいわば噂の聞き書きとして、それらの數省では一歳再熟の稻があると聞いている。風土がそのようなのであるのに食乏しきに至るとは、地土の力には餘りがあつて、播植の功が足りないのだ云云、⁰⁸と言うものの中に見えているにすぎない。廣東省以外については、檢索不足のためかも知れぬが、『浙江通志』卷一百一、物産一、温州の條を例外として、他にはほとんど言及する者を認めない。

ひとり廣東省については、王士俊は雍正六年に、粵東の田畝は一歳に兩収する、本年は春から夏まで照り降りが順調だつたので、早稻は豊かに稔り、晩禾は茂盛していると

いい、鄂彌達は九年に、粵東地方では一年に兩次耕穫があり、民は多く力穡すると報じている。⁽¹⁹⁾とくに孔毓珣が、廣東は素より魚米の郷だと稱^いわれていた。しかし生齒が繁庶で家には積蓄が鮮^{すく}ない。一歲兩次の收成でやつと口に餉するに足つていると傳えているのは、二毛作という土地利用の、同省食糧經濟に對する寄與を端的につくものとして興味がふかい。米の収量を標準にしている限り、田土(F)が、たとえ二倍とまではいかずとも、一點何倍かには利用されていたわけである。なお、民國初期における中國の稻作回數については、廣東地方は三月中頃植附を了^{s2}し、二毛作又は三毛作なり、南支那地方一般に二毛作多く、湖南省及江西省の南部にも二毛作の所^なしとせず、揚子江沿岸地方は一毛作なりと傳えられている。多毛作は廣東省で、とくに顯著^さだつたわけで、二百年以前にあつても大體同じようなものであつたのであろう。

廣東省のF—Aに對するプラス・マイナスの力は、むしろプラスに分があり、惡くいつて相殺におわつた程度ではなかつたであらうか。ここでもかく「口に餉するに足る」といわれていることや、後述の、二年連續豐作後の同省食

糧事情の實際などから推想すると、どうしてもそのように樂觀的に考えざるを得ない。

F—A計數を修正すべき諸條件中の最後のものとして、われわれは、帳簿上の隱匿の場合における、田土(F)の隱匿率と人丁(A)のそれとの違い⁽²⁰⁾を開きを擧げることができる。ここでは双方の隱匿率そのものが最も大きく、しかも、史料的に最も實相をつかみ易い四川省の場合を例證として説明しておくことにしよう。雍正五年、巡撫の馬會伯によつて口火を切られ、後任者の憲德らによつて遂行された同省内における田地の丈量(後に再説)は、同八年にいたつて一おう成功した。その結果として、雍正二年度現在の田土二十一萬頃・人丁十五萬という數字には、當然重大な改訂が加えられねばならなくなつた。もちろん單純な二年度以前における隱匿の摘發ばかりに依るものではない。二年度以前からあり、そしてそれ以後にも引きつづいた、盛んな開墾(いわゆる隱墾⁽²¹⁾であつてその結實も隱匿された)と大規模な移民の流入——雍正五年だけでも四川に遷移するものが數萬を下らなかつたといわれる⁽²²⁾——とにも依るものであつたが、ともかくそれらの數字の大改訂が必要になつた。また事實

それらには大幅に改訂された。乾隆十八年の記録に、四川省の田土を四十六萬頃（略數）・丁數を七十五萬（略數）とするものがそれである。丈量田地冊籍の完成した雍正八年に、その當事者である巡撫憲德が、田地錢糧の數目が先に比べて倍增しているからには、從前の欺隱は委に十の五六に係ろうと斷定し、その四年後にその後任の鄂昌が、先年は地土が豪強に隱占されていたが、丈量より以來は田畝が日に開け糧賦が倍增したという場合の立論に、具體的な根據を提供した計數にほかなるまい。少なくともその計數に近いものにはかなるまい。ところが、雍正二年度から八年度への増加率、したがつて雍正二年度現在における隱匿率は、田土の場合と人丁の場合とで甚だしく違ふ。結局、雍正八年度というか、乾隆十八年度というかの四川省におけるF/Aの數値は、雍正二年度に對するその一・四とは似もつかぬ〇・六一三となつてしまふ。

四川省の場合は少し極端であるが、しかしこの種の計數的偏差にもとづくF/A數値の修正は、多かれ少なかれ他のどの省分の場合にも必要ではないかと思う。可動的でごまかし易い人丁の方により隱匿率が大きく、その意味で前表

のF/A計數が、嚴密な調査をもにすると、軒なみに下つて來そうなことは想像できるとして、さてそれ以上、どのようにして、その嚴密な調査結果に近い數字を求めめるかということになると、かなり面倒な問題だけれども。

このようにして、前掲中・南シナ十省分におけるF/Aの數値は、いろいろな角度から修正ないしは調整を加えることのできる餘地を含み、また加えねばならぬ必要をもつてゐるのではあるが、ただ極く大體の相對的な順序としてはそれほど大きな狂いはないように思う。後にも述べるように、江西省については、どこかにかなり大きな計數上の誤差があつて、同省は本來ならばもつと上位に、おそらくは湖南省の直ぐ次ぎぐらいにあつたはずだと考えられ、そのほか、湖北省と湖南省との間のように、むしろ逆轉させた方が適當ではないかと思われるようなものも無いではないけれども、しかし大體の順序としては、それらの數値の系列が案外たしかなところを傳えているのではないかと思う。しかもこの系列はまた、中國における產食米區域内での米穀の需給關係を、純粹に經濟的な見地から眺めた場合の、各省分ごとのS/Dの數値の系列の、おぼろではあるが、

必ずしも間違ひではない反映であつたのである。

三 産米食米區域内での米穀の需給關係(中)

雍正期中・南シナの各省内部における米穀の供給量と需要量との間の比率、すなわち S—D の數値のより現實的な姿に近づくためには、上節で述べてきたような純粹に經濟的な素因の働きかけ以外に、より政治的な素因の介入とその影響とに考慮を拂わねばならない。一二考えうる政治的な素因のうちでも、とくにその影響が明白でもあり、顯著でもあつたものは、山東・河南という二つの北シナ省分のほか、主としては中シナの六省(後出)から徴収されたいわゆる漕糧の問題である。

よく知られているように清朝は、明代の舊制をそのまま受けついで、田賦・丁税の大部分を銀の形で出させるほか、一部を糧すなわち米・麥・豆など、とくに大米(主として中シナ各省)および小米(主として山東・河南二省)の形でも納めさせた。糧のそのまた一部は、存留糧と名づけてこれを各地方にとどめる。地方に存留された糧については、これを常平倉その他の官倉に貯藏させるといふ説

もないではない。⁽¹⁾その他の官倉はともかく、端境期における米價の調節を主要な任務とする、常平倉に貯藏されたかどうかはすこぶる疑わしい。雍正九年の日附をもつ福建巡撫趙國麟の奏摺をみると、そこには、同省の糧儲道が通省の兵糧十二萬八千一百餘石を管理していた事實を傳えている。⁽²⁾この兵糧の石數は、あとで表示する雍正二年の本省の存留糧數と符合する。また、廣東巡撫・郝玉麟によると、同省の糧道衙門の毎年現収する米は二十四萬七千八百三十三石零であつたという。⁽³⁾これまでが、おなじ雍正二年の本省の存留糧數とほぼ一致しているのは果して偶然なのであろうか。どこでも糧道が管理したかどうかは別問題として、存留糧はいつでも、年ごとに兵米——嚴密には兵米の一部——を支辨するためのものであつたのである。(兵米の一部というのは、各營の兵丁には月支の糧米があつたとはいふものの、人口衆多の家では必ず市舗から買湊して日用に資せねばならなかつたし、⁽⁴⁾そうではなくとも土地土地の事情によつては、糧米の全部もしくは一部を、初めから銀の形で折支され、米舗について買食させ、時には州縣から米價を米舗に交付し、兵丁は米舗から米を

受けとるといふことさえあつたからである⁽⁵⁾。例えば、州縣から本色米を徴収するのは原^{もと}もと兵糧を支放するためだと⁽⁶⁾か、鎮江府京口の旗營の兵米の、歳に八萬石いるものは、向來^{まへより}、附近の州縣に派撥^{わいぱつ}けて米を運んで放給^{はうきつ}していたなどといわれる場合、それらの兵糧もしくは兵米こそ、いわゆる存留糧の成れのはてに外ならない。しかも兵丁の月米を運貯する米倉は、性質上、積貯を豫備して借したり^{うりよめ}糶したりする穀倉からは區別さるべきであつた⁽⁸⁾。地方によつて名稱の違ふこともあるが、例えば山西省の大同府では大有倉、朔平府では常豐倉というのが糧石を存貯して軍需の用に備うべき官倉であつた⁽⁹⁾。存留糧が常平倉、もしくは、名は違つてもそれと同種の官倉に貯藏されることは、よほど異常な特例としてでもなければほとんど有り得なかつたことであらう。

存留糧を除いた大部分の糧は、漕糧、すなわち漕運米・漕米として中央に送られる。漕糧のうちでも、京倉に送つて八旗三營の兵食に供するものを正兌漕糧といい、通州倉に送つて王公百官俸廩の用に供するものを改兌漕糧といつた。正改二兌の漕糧が、中央向けと地方向けとの差こそあ

れ、いわゆる存留糧と同じ性質をもつものであつたことは見やすい道理であらうが、事實、湖北巡撫の任にあつた王士俊もこう言つてゐる。「楚省で經徵する民米は、例として漕・南の二項に分ける。その漕糧は旗丁が領運する。各水次において冬に兌^{ひきわた}して冬に開^{ひら}き、運んで通州倉にいたつて交卸^{にやうし}する。その南糧は各州縣が荊州倉(湖北)に運送して滿洲標營の兵食に供する⁽¹⁰⁾」と。同じ民米が二つに分かれるのであつて、それらの中の南糧は、その南米の一項は本省の兵糧に給するに係^かるといわれる浙江省についての南米と同じように、すなわち存留糧である。正改兌漕糧・存留糧のほかに、もう一つ白糧というものがあつた。江蘇省の蘇州・松江・常州の三府と太倉州、浙江省の嘉興・湖州の二府などから徴収して京通二倉に送り、内務府・光祿寺に供して王公百官各國貢使の廩餼の用に當てたものであつたが、ただその數量はもつとも少ない。

清朝は、そこは異民族統治のかなしさ、漢民族に對して「善政」ぶりをひけらかす必要もあり、旱害・水害・潮害・風害・蝗害・飢饉あらゆる機會をとらえて、氣前よく錢糧すなわち税賦の免除を行つてきた。その清朝にしてから、

漕糧などに當つべき本色徴収税だけは、原則としてその免除の範圍から外していた。⁽¹²⁾ 免除した事例が皆無だというのではない。しかし稀に免除する場合にはよくよくの特例・特恩だともつたいづけ、ふつうは緩徴措置を講じて翌年ばらい、もしくは翌年以後の分割ばらいにしてやり、そうでなければ、定額の全部もしくは一部を銀で折納させてやるに過ぎなかつた。⁽¹³⁾ 清朝の武力・政治力をその根基において培かうものであつたから、當然といえば當然至極ではあつたけれども、ともかく漕糧などは、それほどまでに清朝からは重要視されていたものであつたのである。

その重要な漕糧などの雍正二年の定額は、『雍正會典』(卷四十漕運)と『皇朝通考』(卷三、田賦)によると次表のとおりであつた。この表のうち、浙江省の存留糧百三十六萬九千石は他と比較して餘りに多すぎる。原缺の河南省の存留糧とともに、今かりに乾隆十八年の數字で補つておいた。漕糧についてはそのうちの一部分を經常的に銀での折納に切り換えたことは確かにある。永折米というのがそれだ。⁽¹⁴⁾ また災害時の非常措置として、その地方の納むべき漕糧を折納しつ放しにさせたことも少くない。例えば雍正某

省 分	存留糧(A)	正兌米(B)	改兌米(C)	白 糧(D)	累 計
江 蘇	277,000	1,328,000	256,100	151,000	2,012,100
安 徽	180,000	172,000	38,300	—	390,300
浙 江	(1,369,000) 274,000	600,000	30,000	66,000	970,000
江 西	127,000	400,000	170,000	—	697,000
湖 北	157,000	133,000	—	—	290,000
湖 南	150,000	117,000	—	—	267,000
山 東	474,000(米) 35,000(麥)	280,000	95,600	—	
河 南	(29,000)	270,000	110,000	—	
四 川	57,000	—	—	—	57,000
廣 東	248,000	—	—	—	248,000
廣 西	121,000	—	—	—	121,000
福 建	128,000	—	—	—	128,000
累 計 山東河南 をのぞく	1,719,000	2,750,000	494,400	217,000	5,180,400

年、浙江省嘉興府屬の七縣と杭屬の海寧の一縣が蟲害を受けた。そこで完^{おき}むべき漕米の價を減じて折収したところ、

民人は踴躍歡呼し、折漕された米穀が、民間に留存したの
で、それが流通して接濟ができたと言われているようなの
がそれである。^(四)しかしそうした場合以外、漕米は原則とし
て本色で徴収された。用途が用途であるのだから、けだし
當然のことであろう。たとえ折色、すなわち銀で納めさせ
ることがあつても、その場合には必ずその銀で他の場所か
ら米を採買してこれ運んだ。雍正元年——當時、河南省
の毎年徴収する漕糧の定額はまだ二十五萬石餘であつたら
しいが、そのうち十萬石餘だけが、水次に附近する交通便
利な州縣から、本色米として徴収され、のこる十五萬石餘
は、その餘の各屬から折収した銀兩で巡撫が採買して起運
することになつていたという。^(五)山東省の濟寧・兗州・東平
三府屬の州縣の漕米についても同じようなことが傳えられ
ている。前表にその定額のあげられてゐる漕糧などは、そ
のほとんど全部が、過程的にはともあれ結果としては米、
それも搗き米の形で起運されたものであつたのである。

前表の數字はまた、輸送のために必要とする船員・運丁
らの食い扶持米、途中の鼠害・濕氣害その他による目減り
のための補充米など、一切のいわゆる耗米の分を含まない

數字である。それらの耗米の正米、すなわち正規の漕米に
對する割合は起運地から京・通二倉までの距離のいかに
よつて違いがあり、あるいは加一（一割）あるいは加二・加三
であつたが、中にはといおうか、時にはといおうか、正米
の八九割に達することもあつたと言われる。平均しても相
當の割合であつたのであろう。雍正期における江蘇・浙江
二省の正改二兌米および白糧の正額は、前表でも明らか
なとあり、前者が約百七十四萬石、後者が約七十萬石、^ハめ
て約二百四十四萬石である。これに安徽省の正改二兌米の
正額約二十一萬石を加算してもまだ三百萬石には達しない。
徴収された總額、という意味で存留糧を加えてもなお三省
計三百三四十萬石そこそこである。ところが雍正帝は、江
浙二省は戸口が繁多なのに、毎年納めねばならぬ漕糧は四
百萬石に及ぼうとすると言つてゐる。^(六)積りあつてサバを讀
んだのではなく、あらゆる附加米を加算したその實數を舉
げたものに外なるまい。正耗漕米はもちろん公的な性質の
ものであつたが、清代の漕運にはそれらのほかにまだ、私
的な、ないしは半公半私的な南方米の北方持ち出しが伴な
つていた。役得として大目に見られていた漕船乗組員たち

の「土宜^{どみぎ}」としての順帶米である。從來は毎船六十石が限度であつたが、雍正七年五月にいたつて雍正帝は、旗丁の運駕は辛苦なものだ。糧艘の便について貨物を順帶し、京にいたつて貿易して利益を獲るのは、情としても、理としても、行つてよいことだというわけで、その限度を百石に引きあげた。⁽¹⁹⁾翌年さらに二十石を増している。各省漕船約五六千隻。⁽²⁰⁾年にすれば表向き六七十萬石、實際は百萬石にも百五十萬石にも達していたであらう。

正耗の漕・白糧米にさらに存留糧・順帶米を加えると、中・南シナの各省の負擔していた現物税賦とその附加物は、前表A・B・C・D欄の合計五百十八萬石^{プラス}十約百萬石に、正米(A・B・C)の何割かに當る耗米分を加えた數字に達していたわけである。あらゆる法外の收奪分をも加えると、江南は、歲征四百萬石の漕米のために、實は千四百萬石もの米を負擔せねばならなかつたのだとさえ言われている。⁽²¹⁾

しかもその負擔は省分のいかんによつて著しく均衡を缺く。もつとも重い負擔を強いられていたものは、江南省(江蘇・安徽)もしくは江蘇省と浙江省とである。四川省の負擔がもつとも軽く、廣西省および福建省がこれに次ぐ。

前の二三省に重かつたことについては、明代以來の色々理由があるであらう。⁽²²⁾距離的にもつとも近く、大運河が利用できて、運送に至便であつた事もその一つであつたに違いない。江南省などの米の品質がすぐれていた事もその一つであつたと見られる。今もつて「米の品質は吳平野の産米中、上海米即ち江蘇米最も良質にして我日本米に譲らざるものあり、蕪湖米(安徽)と稱するは上海米に比し遜色なし」といわれているが、雍正時代にあつても同様であつたのであらう。一般に漕糧米については適否の検査がやかましく、例えば向來江浙で漕糧を收兌するには、みな本地の粳米^{うるち}を用い、その乾圓潔淨なものを擇んで方めて交納^{はじ}を准^{ゆる}したとか、不作時の米の青白一ならず、粒の細小なものは、何とか食用にはできても漕糧として出すのはむずかしいなどと言われているとおりであるが、清朝(また明朝も)としては恐らく、江南・浙江兩省を、主たる漕白糧米の割りあて地とすることによつて、最も甘い米を、もつとも保存のよい状態において確保しようとしたものであらう。何にしても、ねらいを付けられた方は災難である。人間一日の食米は大口五合・小口二合五勺だといわれる。⁽²³⁾一日の食米はぼ

四合（一六〇匁・一斤）といわれる場合は、あるいは大小口の平均でもあろうか。今かりにそれを四合だとしてみると、江蘇の一番のごときは實に、年間、百數十萬人の人口を養うる米（存留糧を含む）の負擔を強いられていたのである。福建省城を擁する福州府が、毎日米三千石、一月計米九萬石を需用するという高其俾の計算を借用すると、福州一府の全人口の二十カ月分の食米が江蘇の一番から収奪されていたわけである。

人口密度の高さ——只さえそれによつて米の需給關係の失調を餘儀なくされていた江蘇省や浙江省では、この政治的な収奪の加壓によつて、いつそその米穀不足に拍車をかけられたものと見なければならぬ。たとえば浙江省の杭・嘉・湖の三府は、所屬の十四縣で額徵せねばならぬ漕米が三十二萬石であつた。しかも桑麻に耕地をとられていたため、その地に産する米穀では、その漕米を支辨するものが精一ぱい、豊収の年でさえ民食が敷らなかつたので、向には外江の商販の接濟に藉つていたといわれる。逆に四川省や廣西省では、それだけ需給關係にゆとりを得たことになる。少なくとも相對的な意味では。こうして存留糧米

をも含めての漕白糧米の徵收は、 $\frac{S}{D}$ の反映として、の、各省ごとのあの $\frac{F}{A}$ の數値に、ある部分においては著しい變更調整を加えることになつた。傾向的には、大體 $\frac{F_1}{A_1} \cdot \frac{F_2}{A_2} \cdot \frac{F_3}{A_3} \cdots$ の系列を肯定し、（もしくは否定せず）、小さいものをより小さくするという方向においてはあつたが。いずれにしても米穀に關する清代經濟の動きは、そこに織りこまれた漕糧等の在り方を無視しては考へることができない。雍正九年のこと、ことによつて漕糧の運送を停止しようとする議がおこつた。そのとき江西巡撫の任にあつた謝旻は、ことの重大性を指摘して、

臣査するに、運漕の各省（のうち）ただ江西・湖廣のみ米を産すること尤も多し。向來、隣省は毎に江（江西）楚（湖廣）において糴買せり。江楚の民もまた、米石を糴賣するに頼つて價を得て用に資したり。もし運を停めしむれば、各省（江蘇・浙江等省）に米すでに多くして、外省（江西・湖廣等省）に向かつて糴買するもの少なく、江西・湖廣の米、糴賣多からざらん。糧（錢糧）を完め用に資するの處において、稍しく便ならざるものあるを恐る。

と言っている。最後の一句の意味するところは、廣西巡撫・韓良輔のいわゆる「出産は止だ米穀ありて、賦を納むるには銀に非れば不可。かつ差徭は田に従つて起る」の嘆きと軌を一にする。ともあれこの一文は、よくその漕糧などの、米穀を中心としてみた清代經濟の動きに對する重大な影響力を物語るものといえよう。

四 產食米區域内での米穀の需給關係(下)

S/D ないしは F/A の數値に影響を與えたかも知れぬ政治的(『社會的』)な素因の一つとして、たとえその結果はどうであろうと、われわれが引きつづき検討しておかねばならぬ問題に、倉穀の貯積ということがある。本來この問題は、別に一章を設けて考究さるべき重要課題の一つである。實はまだそこまで手が廻つておらず、中には肝腎の所で判りかねているような事がないではないけれども、ともかく判つた範圍で簡單にこの問題にも觸れておきたいと思う。

清代でも他の各代、とくに明代と同じように、一方では地方ごとに、社倉・義倉・鹽義倉のような民間貯糧機關の設置が勸奨されて、穀類の借貸(社倉)や非常時の救濟(義

倉系)に當つていたが、他方、常平倉をはじめ、永豐倉・儲豐倉・安豐倉・豐裕倉・豐備倉・預備倉・裕備倉・永濟倉等々——じつに雑多な名稱をもつた官倉が各府州縣に設けられ、それぞれ一定額もしくは不定額の米糧雜穀を貯藏して、米でいうなら米價の變動、とくにいわゆる青黃不接の端境期のそれを平糶平價糶賣によつて調節するとともに、蟲害・旱害・風害・水害等による不作の歲の饑民と、風水害等による直接の難民との賑濟・接濟の用に備えた。私倉系の諸設備のうち、社倉は雍正の初め、この事業に極めて熱心であつた總督楊宗仁の在任した湖廣省にあつてすら、四年末の實狀では、かつて各州縣が通じて共に貯穀八十萬石だと稱していたものが、いまは僅かに實際の貯穀十七萬六千石零(米ならその半分)と報ぜられるに過ぎなかつたという。⁽¹⁾ 他省のことは推して知られる。雍正帝も社倉のことは至つて慎重、というよりは消極的であつた。⁽²⁾ 義倉・鹽義倉ともなると、社倉に比べてすら規模が小さい。當面の問題に關しては、これら私倉系のものは、一應これを除外して考えても結果に大した狂いはあるまい。

官倉系の諸倉のうちでは、たとえば永豐倉や儲豐倉や豐

裕倉や豐備倉やは常平倉の一名もしくは原名だといわれており、また裕備倉は明の豫備倉のことだといわれておる。⁽³⁾

結局、いわゆる官倉——前出(一三七頁)山西省の大有倉や常豐倉、およびこれに類する諸省の軍需倉・兵米倉をのぞいた官倉は大別してこれを二種に分類することができる。第一種の常平倉系の貯穀は、平糶用を主として兼ねて貸借・賑濟の用に供し、第二種の預備倉系のそれは、ほとんどつばら賑濟の用に供する。ところで『硃批諭旨』のうちにしばしば、常平倉穀に相對するものとして捐穀の名が出てくる。最もはつきりしているのは、廣西布政使劉廷琛が、廣西の倉穀の原額は常平・捐穀の「二項」で共に一百六十二萬八千七百餘石あつて數たる甚だ多いといつてゐるもの⁽⁵⁾だが、それから三カ月後、同じ廣西の巡撫であつた李紱が、常平倉穀は止だ四十餘萬なのに糶と借と兼用だ、捐穀は一百十餘萬なのに糶借ふたつながら用いる所がなく不公平なようだというもの⁽⁶⁾も、もちろんそれらを判然二つの項だと考へての上の言ひ分にちがひない。また山東學政の王世琛が、常平倉穀は毎年陳^{ちん}きを出して新らしきに易え、七を存して三を糶している……結構な制度だ。ところが山東省で昔

年収めた捐納備賑の穀は、各道府州縣の倉に分貯したきりで、獨りまだ出陳易新の制度に議及されてない、といつてゐるのも同じことである。『清國行政法』の記載などを通してよく知られてゐるとおり、常平倉も特にその創設元本を工面するためには——正項の經費を動支するなど他にいくらか方法はあつたが——もつとも普通にはやはり捐納を開くという手段に頼つた。監生その他の資格を與える代償として穀類もしくはその代價を供出させたのである(その實例の一つは後文一四七頁にみえる)。さればこそ諸文獻のうちにも、閩省の捐積せる常平等の倉の各穀は通計して共に一百三十餘萬石で總て藩司(布政司)に匯^あまるとか、川省の常平の捐例は久しく已に奉行してゐるとか、各省府州縣で常平倉捐穀の例を遍開して以つて積儲に備え、以つて轉運に資するより善いことはないなどという言葉が習見して來るわけでもあろう。しかもこうなると甚だ紛らわしいが、ただ前に挙げたいわゆる「捐穀」もしくは「捐納備賑の穀」は、その性質上、一おうはいわゆる常平倉穀から區別されるべきものであつたと思う。そうして私自身は、その備賑の穀、本來それをもつて備荒の計となさるべきであつた捐穀⁽⁷⁾

こそ、清代官倉の第二種、預備倉系の貯穀であつたものと判断する。湖北省潛江縣の預備倉が舊の常平倉の左にあり、天門縣の捐監倉も常平倉の旁にあつて、のち（乾隆十年）常平倉に併入されたと伝えられていることなども、たまたまこうした見方の正しさを立證してくれるものではなかつたであらうか。

『雍正大清會典』をみると、卷四十五、戸部二十三、倉廩二、直省府州縣衛倉の項には、各地各様の官倉名を丹念に列擧している。残念ながら、それらに貯備さるべきであつた米穀の額數を擧げない。しかし幸い『皇朝文獻通考』卷

三十六、市糴考五には、雲南・西安・甘肅・福建・廣東・貴州をのぞく自餘の諸省の「常平諸倉」について、いわゆる「雍正年間の舊額」を擧げている。舊額を擧げていない六省のうち前三者については、雍正年間にはまだその地の倉貯の多寡が定まつていなかったという理由で「乾隆十三年以前」の現額をあげ、後三者については、福建は山を環らし海を帯びて商販通ぜず、廣東は嶺海いりみだれて産穀がどれほどもなく、貴州はどこも山だらけで舟楫を通ぜず、倉貯は均しく充裕せねばならぬとの理由で、本書編纂當時（乾隆十三年）の「現存の穀」を定額にしている。それらを表

示すると上のとおりである。

年次	省 分	常平諸倉穀定額
雍 正 年 間 (a)	直隸	2,150,000
	奉天	1,200,000
	山東	2,960,000
	山西	1,320,000
	河南	2,310,000
	*江蘇	1,530,000
	*安徽	1,880,000
	*江西	1,370,000
	*浙江	2,800,000
	*湖北	520,000
(a)	*湖南	700,000
	*四川	1,030,000
	*廣西	1,270,000
乾隆十三年以前 (b)	*雲南	700,000
	西安	3,730,000
	甘肅	3,280,000
乾隆十三年 (c)	*福建	2,570,000
	*廣東	2,950,000
	*貴州	510,000
	計	33,790,000

*印は主として大米を大部分は穀（少しは米）の形で積貯していたと思われる省分。 44

ここにいわゆる常平諸倉が單に狹義の常平倉系の諸倉をただけではなく、さらにあの捐穀を積貯する預備倉系のそれらをも含めての言いであつたらしいことは、前に出た、雍正前期における廣西省の倉穀百六十數萬石の内譯——すなわち、固有の常平倉穀は内わずかに四十數萬石しかなか

つたという事實が、よくこれを物語つてゐるのではないかと思う。表中の百二十七萬とその百六十數萬石との間には相當の開きがあるとはいへ、四十數萬が急に百二十七萬にはね上つたとは考えられないからである。ただこの表中にみえる數字のうち、aグループのものがどの程度まで信用できるか、雍正年間といつてもそれは何年度の定額であつたのか。b・cグループ、とくにcグループのものは、雍正時代の定額とどの程度の出入りがあつたのか。これらの諸點、どうもはつきりとは捕えにくい。

aグループ——雍正初期の廣西省に關する數字が、少し小さすぎるように思ふことは前述のとおりである。しかしこれは、その後雍正七年、巡撫の金鉷が「實は過多なり」としてそれを一百六七萬石有零程度に引き下げようとし、雍正帝から雲貴廣西總督・鄂爾泰と相談して決定せよとの硃批を受けたその數字をさらに少々上まわつてゐる。相談の結果百二十七萬程度に落ちついたということは十分ありうることであろう。山東省の場合、雍正七年の布政使費金吾の詳文には、東省まさに貯うべき倉穀は、通じて共に三百三十一萬七千七百八十一石零だといひ、この詳文を引用した

河東總督・田文鏡の奏摺に對する雍正帝の硃批には、卿はかつて貯を減ぜんとするの議のあることを朕に奏した、何ぞ尙お三百餘萬の多きを存するを得んや、といつてその多さをいぶかつてゐる。また同じ田文鏡は、その少し前の七年一月十九日附の奏摺のうちで、山東省のあらゆる倉穀は、現存するものは共に一百九十三萬二千二百二十六石零。價を存して買うべき穀は共に一百二十二萬四千八百二十四石零。各屬の虧缺してまだ完わらない穀は共に九十五萬三千三百九十六石零だと報告してゐる。それらの數字を集計すると四百十一萬餘石となるが、しかしこの場合の虧缺は康熙以來の焦げつきで、自餘の約三百十五萬七千石見當が當時のいわゆる額數だつたのではないであらうか。どちらにしても『皇朝通考』の數字は、これまたやや小さすぎるが、ただケタ外れた小ささと言うわけでもない。江西省については、日付の古いものから順次に配列してみると、まず裴率度は、従前は半多が折價で兼ねて借欠ならびに虧價の處があつたが、ともかく江西通省の額貯は一百十五萬石であつたと傳え、常德壽も應存の穀は一百十五萬餘石、米は三千石だとし、邁柱は江西倉穀の原數は一百一十四萬八千五百六十一石零

だと克明に記している。⁽²⁰⁾張坦麟の、江西原貯の倉穀は共に一百萬三千石零だというものとはほぼ見合うものは、謝旻の、各屬の倉穀を計るに共に一百一萬九千五百四十石零という數字である。⁽²¹⁾時の前後で十數萬石の減額になつてゐるわけだが、『皇朝通考』の數字はこれらに比べてやや大きめである。湖廣省はもとも貯穀設備に乏しいところで、雍正三年末には、通省の存倉の穀はただ數十萬石で數たる多からずといわれていたが、その後積貯に努めた結果であろう。同八年には湖南一省だけでも現貯共に六十餘萬石の多きを計るにいたり、さらに十二年には、楚省の常平倉は、北南（湖北・湖南）穀を貯えること一百一十四萬三千餘石と稱されるまでに漕ぎつけた。⁽²²⁾ここに常平倉とは、社倉に對比されるべき官倉全部のことを言つたのであろう。⁽²³⁾前表の北南合計百二十二萬という數字は、湖南省の六十餘萬石が七十萬石になることだけによつても容易に達成できるもので、十二年度分の數字との間に大した開きはない。最後に四川省については、總督・黃廷桂が雍正九年、全川百數十州縣でその倉廩に存貯してゐる米穀・雜糧は通省を合算してもただ四十二萬石有零だと報告して、雍正帝から少な過ぎるとい

う注意を受けた。⁽²⁴⁾（五年九月の管承澤の奏摺に、雲南に改歸された東川府をのぞく四川全省の、實に應に存貯すべき米穀・青稞等は共に四十一萬三千九百四十石零だとあるものが、あるいはその確數かも知れない）。よつて政府では大學士らが、六十萬石を増貯するため、每石の定價を三錢として三年に分けて買足すべき旨を議覆し、帝の嘉納するところとなつた。⁽²⁵⁾いよいよ三年たつてみても、穀を買うこと僅かに四十四萬餘石に過ぎなかつたとはいへ、前後合わせて百二萬石という應貯の額數は、ほとんどびたりと『皇朝通考』の傳えと合う。

『皇朝通考』aのグループの數字は、部分的に多少の出入りこそあれ、これを常平倉系ならびに預備倉系の官倉の貯穀定額、とくに雍正末年ごろのそれとみる限りほぼ信用できるのではないかと思う。

b・cグループの場合は、事情が少しちがつてくる。たとえば福建省については、雍正四年の帳簿面では、各項の倉穀が一百五十餘萬石ないしは一百六十餘萬石であつたといわれ、五年の額貯穀もしくは應に存すべき穀は、一百六十六萬九千餘石もしくは一百六十八萬四千六十三石零だつ

たとされている。一説には、同年の閩省官民の捐積せる監穀が通じて共に一百八十二萬四千二百二十二石零であつたといひ、雍正帝自身も、同省の應に貯うべき米穀は共に一百七八十萬石だといふ事によつてこれを裏書している。小さい数字は内地の八府一州關係のそれで、大きい数字は恐らくそれに、外地臺灣一府の計數を加算した数字だと思われる。別に雍正九年、閩省の捐積せる常平等の倉の各穀を通計して一百三十餘萬石とする文献のあつたことは前述のとおり(二四三頁)。しかしこの最後の計數は、もし一百六十餘萬石の誤りでなければ、應存穀ではなくて現存穀の數字だつたのではないであらうか。ともかく雍正年間における福建省の應貯の倉穀額數は、大體百六十萬石から百八十八萬石見當だつたのであつて、『皇朝通考』乾隆十三年の額數に比べるとかなり顯著な開きがある。廣東省についても、五年二月現在で、廣東各屬の報告した存倉の穀は一百六十餘萬石であつたし、同じころ官達は、通省額貯の穀を一百六十二萬四千六百三十七石零だとしている。三割だけ糶賣した常平倉穀が四十八萬有零(石)だつた事實からも、それらの數字は逆算せられる。翌六年十月ごろの通省府州縣衛所

の原の額貯の倉穀は、一百六十四萬三千六百餘石だつたといふ。十年には通省の常平倉貯が「一百九十二萬石の多き」に達しているが、(なおこのとき社倉穀は一十五萬有零)、これは恐らく、雍正五年に初まり、その後はなだ不成續に經過した、海陽等の六縣の應に増すべき貯穀三十四萬石のための捐監事例が、曲りなりにも達成するになんなんとしていた結果なのであらう。結局、雍正年間における廣東省の倉穀額數は、これまた百六十萬石から百九十萬石見當だつたと考えられ、乾隆十三年の數字よりは遙かに少ない。陝西省ともなると、西安・延安等の十州所屬の倉貯各案の糧石は七年十月現在、統計して一百三十餘萬石有奇であつた。いわゆる乾隆十三年以前の額數の約三分の一にすぎない。甘肅省については明證を得なかつたが、やはり陝西省と事情を同じくするものであつたのであらう。

陝西(西安)・甘肅(寧夏)・福建および廣東の諸省は、いずれも將軍指揮下における八旗兵の大駐防地であつた。たとえば甘肅省については、甘・涼・西・肅一帯は沿邊の重地だから一提三鎮が星羅棋布して、設けるところの額兵が最も多へなどと言われている。乾隆時代にそれらの地方の

倉貯額數が著して増えてきたのは、おそらく、そうした土地柄に對する軍事的な配慮からであつたと見られる。雍正期にも例えば田文鏡は、山東省の青州府に關して、ここには現に滿洲官兵の駐防が設けられていて、實に他郡と同じでない。積貯は充裕に過ぎさせるのはまだしも、稍^{すこ}しでも不足あらしめてはいけない、という意見を個人的には抱いていた。⁽⁴⁰⁾ 上述の四省については、乾隆朝廷自體が何らかの事情に刺戟され、そうした意見に基づいて行動せざるを得なくなつたのであろう。

いわゆる官倉(常平倉系・預備倉系)の積貯内容は、必ずしも常に大米や稻穀であつたとは限らない。北シナ諸省ではむしろ小米や麥その他の雜穀を貯えるのが最もふつうであつた。陝西省に十萬石もの湖廣米を漕運したような例もあるから、⁽⁴¹⁾ 全然貯えることが無かつたわけではないけれども、あれば珍らしい例に屬した。それでここでは、前表のうちからそれら北シナ諸省に關する計數を省き、*印を附した中・南シナの十二省、とくにこれまで主たる對象としてきた、雲・貴二省をのぞく自餘の十省の計數を基として議論を進めていきたいと思う。

さて前表aグループ中の八省の倉穀額數の集計一千百十萬石に、福建・廣東二省のそれぞれ百六十萬石ほどを加算すると、計一千四百三十萬石。それに雲南・貴州二省の分を、b・c欄の數字のまま約百二十萬石として追加すると、總計一千五百五十萬石となる。このようにして、稻穀で約千五百萬石を額貯すべきものとされていた各種官倉の存在は、問題のS—DないしはF—Aの數値に對して、もしどんな意味でもせよ影響があつたとするなら、どのようにして、またどんな影響をもつていたのであろうか。

どのようにといい設問に對しては、年々の放出額を年々に補充せんとすることに依つてというより以外、他に適切な答案もなさそうである。常平倉穀の貯積され、貯積されねばならなかつた理由は、前述のように端境期における穀價の調節と、しがつて民間食糧事情の緩和とのためである。たとえば北方の陝西省では毎年二三月の間に、⁽⁴²⁾ 南方の福建省では三四月の間に、⁽⁴³⁾ 倉穀・倉米の平糶、すなわち平價もしくは減價して糶賣することが行われていたゆえんに外ならない。ただそれらの場合の平糶倉穀・倉米の分量には限度があつた。存貯の高に應じて、たとえば五六萬石の州

縣では七割を存して三割を糶し、一萬石以内となれば五を糶して五を留める。もつと少ない所では全部を糶賣するとうような事もあり、またそれとは逆に、康熙四十三年頃の四川省のように、人民が稀少だから三割の糶賣を容れない——おそらく必要としないという意味であろう——處さえ無いではなかつたけれども、ただ規則上では、もつとも普通にはその存七糶三の例が行われていたのである。まれには借し出すこともあつたが、この場合も原則としては存七借三の例によつた。⁵⁰ただし、少なくとも米(大米・小米)での積貯に關するかぎり、これらの原則の通用したのは空氣の濕潤でない北シナ以北でだけのことである。中南シナでは、倉米は一二年で霉爛してしまう有様であり、⁵¹そこではどうしても糶五留五以上の放出を行わねばならなかつた。雍正五年以後、江南地方では努めて穀に易えて貯えるよう勸奨された模様であるが、⁵²ここでは、穀での積貯で存七糶三がやつとの事であつたのであろう。その上この糶三なり糶五なりの限度は、その時々が必要に應じて踏み越えられないではなかつた。たとえば雍正四年の春夏の交(端境期)米價の騰貴を理由として廣東巡撫の楊文乾が、糶三の外に

おいて復た一二分を多糶することを決意し、結局、存七穀内にあつて十五萬石有零を融糶しようなのがそれだ。⁵³

平糶はもともと常平倉穀・倉米についてのみ行われ、捐穀すなわち預備倉穀・倉米については行われなかつた。雍正三年ごろにはまだ、捐穀は・糶借兩ながら用うる所なしとか、捐穀は獨り出陳易新の例に議及せずなどと言われていたゆえんである(一四三頁参照)。ようやく四年にいたり出陳易新は收貯に便で原より良法に屬すという雍正帝の意向によつたものであろう、この點に變革が加えられた。このとし三月以後、廣西省の沿河の府州縣では米價が次第に高くなり、梧州においては特に甚しかつた。巡撫の汪澐はその時の對策に關して、捐穀の存七糶三は現に諭旨を奉じた、私はすでに各屬に令して平糶し以つて民食を裕かにさせたといひ、⁵⁴また、桂林・梧州・南寧・柳州四府の捐穀のすでに糶過したものは十六萬五千石零だ云ともいつている。⁵⁵この時以來、全國的に、預備倉系の貯穀貯米の存七糶三が認められたのだと見て誤りないであろう。もちろんこの場合の糶三とは、預備倉本來の用途である被災民の賑濟に使われた數量をも含めての、原額に對する三割の糶賣

ではあつただろうけれども。結局このようにして、中・南シナの各省に積貯され、もしくはさるべきであつた總計千五百萬石ほどの倉穀（米であればその半数）は、毎年その三四割方までが、（賑濟すみの預備倉穀は論外とし）主として平糶まれには借し出しという形で民間に放出される事になつていたのである。⁶⁰（時には糶三穀のうちから兵米を碾支するような例もないではなかつたけれども、これはむしろ變則的な措置であつた。また、倉穀の放出については極めてしばしば不正が行われ、いたすらに官吏・地方有力者と胥吏との懷を肥らせていたが、ただこの問題については、いすれ章を改めて考察さるべきであらう）。

いわゆる官倉の貯穀は、必ずしも常に定額どおりに實貯されてゐたわけではない。平糶・賑濟など正規の放出による減少高は別だが、そうでなくとも當時——ことに雍正前期の倉穀は、定額を割る方がむしろ常態のようであつた。たとえば福建省である。ここでは定額約百七十萬石のところ、雍正五年の布政司冊では、原報の存穀が七十五萬九千一百八十一石零。その後の買補は一十五萬九千二百二十四石零。併わせて九十一萬八千四百五石零にすぎず、加えて

その買補の額は必ずしも信用できないという。⁶¹一部は官吏の虧缺のためであつたが、一部は、實穀を貯えずに穀價だけを殘して帳尻を合わせていた結果である。浙閩總督高其倬をして、福建通省の倉穀は大半は價を存し、實貯するものはただ三四分（三四割）あるのみと言わしめたゆえんである。江西省も御多聞にもれない。二年九月には、通省の額貯は一百十五萬石だが、従前その半多は折價であり、かねて借欠や虧價のところもあつた。買補に努めて一年餘り、すでに實貯の穀は八十餘萬石となり、陸續報到するものも二十萬石にならうとしていたと伝えられる。⁶²四年十二月にはそれがまた、倉穀原數は一百一十四萬八千五百六十一石零で存穀は七十五萬六千九十六石零と逆轉している。⁶³定額の約六割の實貯である。その他の諸省分でも事情はほぼ同様だつたと見え、雲南省では、通省の倉儲となると銀を存して未だ買わないものが頗る多い、⁶⁴陝西省では、米・麥・豆など通省合計して約十の六七だといわれている。⁶⁵この六七割をさえ雍正帝はこまかしの數字だとい見たらしい。

雍正四・五年を期として、全國的に倉穀の充實が企てられることになつた。雍正帝が五年六月、江蘇巡撫・陳時夏

に批論して、米價は但だに汝の江蘇一省のみならず、直省はみな高い。湖廣省のごときも亦長じて一兩を越えるに至つた。乙巳・丙午(雍正三・四年)の二年は歉歲といえる程のものではない。意うに各省が倉儲を買補しようとしてそうなたのだ。自分はこの事につき、一方では(米貴を)心配しつつも、一方では(貯穀を)歡喜しているといい、また同じころ、署理湖廣總督の福敏⁶⁷や廣西巡撫の韓良輔⁶⁸に對しても同趣旨の硃批を下している。よくその倉穀充實への努力を物語るものといえよう。

雍正期の官倉々貯の實態は、このようにして、時の前後によつて必ずしも同じではない。しかしその百パーセントの充實時(そんな時がそうザラにあつたというのではないが)にあつてはもろろの事、前記の數十パーセントから六七十パーセント止りの實貯のときにあつても、いわゆる糶三はその應貯の額面に對してなさるべきであつた。とくに常平倉穀の場合は、年間の平糶のために必要とする平均數値を基準にして逆にその應貯の額面が割り出されていたはずだから、これは至極當然なことで、預備倉穀も結局これに準じられることになつたのであろうが、事實、官達・常賚ら

が廣東省で應に糶三すべき常平倉穀は四十八萬石だという場合には、實貯高に對してではなく額貯高に對してそう言つていたのである(注⑥に同じ)。とすると、中・南シナの十二省では毎年、約千五百萬石の額貯高の三割ないし四割ぐらいの倉穀(麥その他をも含む)、つまり四百五十萬から六百萬石ぐらいのそれが民間その他に放出され、次いでまた買補されていたことになるわけである。かの漕米を穀に改めた場合(一米二穀)のものにやや近い數字である。蘇州布政使の高斌は、雍正八年三月に、存七糶三のごときは定例には違ひないけれども、向來實は實行されていなかったのだと言ひのけている⁶⁹。これがもし全國的な事實だつたとすると話はまた別だが、しかし糶三穀の買補、ないしは倉穀買補の記録が少なくないところから考えると、必ずしもそうだつたとは思えない。買補の困難を豫期して、規模を控え目にすることとはあつたであらうが、しかし全然やらなかつたとは思えない。結局、各省別(十省)に整理すると、規則上では次表のような數字——多くはそれの何割かかけかの數字の倉穀が、毎年糶賚・賑散されてはまた買補されることになつていたのである。

省 分	毎年糶資賑散倉穀高
浙 江	1,120,000~840,000
安 徽	752,000~564,000
江 蘇	612,000~459,000
福 建	640,000~480,000
廣 東	640,000~480,000
江 西	548,000~411,000
廣 西	508,000~381,000
四 川	412,000~309,000
湖 南	280,000~210,000
湖 北	208,000~156,000
合 計	5720,000~4290,000

この數字の系列をみて直ぐ感じとられることは、それがあつての $\frac{F_1}{A_1} \cdot \frac{F_2}{A_2} \cdot \frac{F_3}{A_3} \cdots$ の系列とほとんど逆の順序になつてゐる事である。四川の一省のごとき、増額前の四十一萬石から計算すると、ここでの數字は約十數萬石となつて最下位におちねばならない。 $F-A$ あるいは $S-D$ の數値の高いほど、平糶・賑散の必要をより少なく感じるわけであるから、その順序の錯倒はまことに理の當然ではあるが、しかもこの場合のとくに買補の必要が、 $F-A$ 數値のより低かつた省分に對して、一層これを低める結果になつてゐたとは十分いえるのではないであらうか。

五 中・南シナ諸省の米穀事情(上)

中・南シナの産米諸省における $F-A$ 、したがつて、 $S-D$ の諸數値が、現物税とくに漕白糧米の徴收運送と常平倉系・豫備倉系諸官倉のいわゆる糶三倉穀の主として買補など、種々の政治的操作の影響によつて、大小の諸數値を平均化する方向においてではなく、かえつてその大小の差を擴大する方向において變更せしめられていたと思われ

ることは、これまでの三節に詳説してきたところである。變更せしめられた $S'-D'$ の諸數値の系列は、省別・大小順にいつて恐らく、四川・湖南・湖北・江西・廣西・廣東・安徽・江蘇・浙江・福建の順序か、違つてはいてもそれに近いものであつたであらう。

前述のように中・南シナの諸省分のうちには、麥作に對してあまりに熱意がなく、事實その生産額もきわめて少ない省分もあつた。湖南・江西・廣西の諸省および福建省屬の臺灣府のごときがそれである。四川省も同様であつたのであらう。これに反して麥作に熱心であり、熱心とはいへぬまでも、生産額の相當多い省分もあつた。 $S'-D'$ の系列

での廣東省以下の諸省がそれである。その意味するところが何であつたかは多言を費すまでもない。結局、貧乏人は麥を食え——麥といつても、主として麵粉に挽ける小麥である。大麥は中國では醬油の醸造用以外に餘り需要がなかつたといわれる⁽¹⁾——金のないものは麵を食え、という形においてではあるが、ともかくあらゆる政治的な條件を織りこんだ上での、各省自給經濟への懸命な努力の跡を示すものに外ならない。福建省で麥作地が同時に番薯栽培地であつたことなどが(二二八頁)、よくその間の消息を物語る。つねに過糴、すなわち穀類輸出禁止への衝動を秘めていた各省關係のうちにあつては、これも人間の知慧の働くべき場の一つではある。人々はいや應なしにそうした努力を傾けざるを得なかつたのであろう。

ある省分ではほとんど稻米一本立ての、またある省分では米・麥その他の雜穀・番薯をとりまぜた、雍正期中・南シナにおける諸省の食糧對策は、果たして所期の効果を擧げえたであらうか。主食穀についての各省自給經濟への努力は成功していたのであろうか。

結論的というなら、ある程度まで効果を収めていたので

はないかと思う。というよりは、すべての省分が農作上の諸條件に恵まれ、また定額以上の政治的収奪もないといった言わば理想的な状態においては、あるいはそうした主食穀についての各省自給ということもあり得たのではないかと思う。少なくとも極端な一二省分を除いては、あり得たのではなかつたであらうか。第一、のちに述べるように(一九一頁)、稻米についての輸入省分・輸出省分は必ずしも嚴密には一定していなかつた。第二、これまた後述のように(一六三頁)、二年連續豐作のあとを受けた雍正七年の廣東省のごときは、一舉に米穀不足省分の通り相場をくつがえして數十年ぶりで米の新安値を現出し、あふりを食つた廣西省に米價の下落でいわゆる熟荒の嘆きを味わせている。こうした事から考えると、各省ともに理想的な状態におかれたときには、各省自給ということも必ずしも紙上の空論ではなかつたように思われるのである。

ただし、現實は決して理想どおりにはいかなかつた。人災はともかく、各種の天災の來襲はほとんど避くべくもなかつた。「産米の郷に係り、歳に荒歉なしと雖も、しかも積貯の計は預じめ籌畫せざるべからず⁽²⁾」。そんなのん氣な

ことを言つておられる四川省の場合はまだよかつた。しかしその外はそうはいかない。旱害にせよ、水害にせよ、蝗害にせよ、被害の規模は時あつてか極めて大きい。こうして例えば

米の産額の年によりて甚だしき變化を示すことは我國の如き地方において見ざる所とす。何となれば米産地は……卑濕の地にありて水災の被害を受くること甚だ多し。……一大湖水に變じ數旬間減水を見ざることも少なからざるを以て其農作物に與うる被害たる想像の外にあり。故に僅に自省の産米を以て其糧食を自給する地方においては多少の災害に遭遇すれば直ちに之を他省に仰がざるを得ず。⁽³⁾

これは民國初期についての立論である。漕白糧米などのあつた雍正期とは、それだけでもすでに、米穀の需給關係についての數値に違いがあつたはずだが、しかし、天災などによつて、需給關係が狂いやすかつたこと自體には今も昔も變りはない。

こうして雍正時代にも、中・南シナの諸省間における米穀の流通關係は、少なくとも一部ではほとんど常態化し、

當然のことながら、通例はF-Aの數値の高いところから低いところへと流れていたのであつたが、このことを具體的に論述するに先だつて、まず中・南シナ各省における米穀事情を——できれば各省内部における米穀の流通狀態を含めて、F-A數値の高そうなものから順序に検討しておきたいと思う。史料の制約上、各省について同じ重點についての、同じ密度をもつた報告をえることは、初めから期待しがたいけれども。

(a) 四川省の米穀事情

四川省は明末清初、農民叛亂の指導者張獻忠（一六〇六—四六）の占據するところとなり、初めは明軍、ついで清軍の討伐をうけて連年戦火が絶えなかつたため、田野は荒れ放題に荒れて、住民は寥々たる有様となつた。自來この地に地方官たるものはただ民人の寡ないことを思いとし、升合の輕微な錢糧を納めるだけで、田地數畝を占めさせてきたが、それでもその界限は遼闊で田地は荒蕪するものが多かつた。そこで前後に旨を奉じ、民人を招徠して地方を填實することになつたが、その結果として四川省は、大半はみな陝西省（秦）人や湖廣省（楚）人の雜處するところとな

り 日甚とて其隣たとか侵奪たとかいって訥訟ことが絶え間なかつたという⁽⁴⁾。別の傳えでも、雍正五年、夔州・順慶二府から成都までくる途中でみた居民は、昔からの土著人は十の二三にすぎず、その餘の十の六七までが秦人でなければ楚人で、數年來新附入籍したものもあれば、まだ入籍できず、模様まちして暫らく商賣しているものもあり、その歳になつても、陸續と蜀にくるものが絡繹として絶えなかつたといわれる⁽⁵⁾。外省人としてはそれらのほか、とくに川東一帯には江西省人が多かつたが、さらに雍正五年ごろから廣東・福建兩省人の流入が目立つてきたのが注意される⁽⁷⁾。ことに廣東省からは、數萬を下らぬ大量の人口が流入したが、このことに關して雍正帝は、四川省では米が三錢で一石買え、肉は一錢で七觔買えるといったデマがある⁽⁸⁾ので人心を誘惑するのだという見方をしていた。

雍正帝はその治世の第八年に、四川省では過去數十年のあいだ、徭を軽くし賦を薄くしてきた。近日は荒蕪がようやく闢けて、土著の人と流民とが各々その半ばに居るといつている⁽⁹⁾。その半ばという比率の當否はともあれ、四川省の田土が、主として外省からの流民たちの手で開墾された

ものであつたことは疑問の餘地がない。ただその流汗の成果がいつまでもかれら自身のものとして保證されたかどうかは、すこぶる疑わしい。十二年五月において「四川の一省は素と沃壤と稱せられていたが、先年地土は多く豪強に隱占されていた」と懷顧されており、また廣東省の例でも、下手に開墾すると豪強に占奪されてしまい、それを恐れて有りあまる荒地が、荒れるがままに打ち捨てられていた事⁽¹⁰⁾などから考えると、その保證はほとんど有り得なかつたのであろう。四川省民については、土著が甚だ少なくて輕々しく遷徙し、總じて久遠の計をなさないとか、郷民は貧富に論なく、多くは草棚を搭して居住していたとも傳えられる⁽¹²⁾。強豪に墾地を奪われがちであつた流民たちは、もしそのまま強豪の佃戸化するのでなければ、また他の空地に氣が⁽¹¹⁾るに遷徙しながら、新しい開墾の歩を進めていつたのではなかつたかと思う。

強豪たちに隱占された田地・人丁のほか、入籍もれの流民（とその田地）もはなはだ多かつたせいもある⁽¹³⁾。四川省には田地・人丁の欺隱がひじょうに多く、ことに田地については他省の場合とちがつて「隱匿して年ある」ところ

に特色があり、さらにその欺隱の比率は五六割に達していたとさえ推定され、結局大規模な清丈（丈量）——これにはもちろん農民たち、おそらくは地主たちの強硬な反対があつた——の斷行を不可避ならしめたことは前述のとおりである（二三五頁）。

税率は低し、漕糧は出さず、また「毎田一石を種えれば穀百餘石を収めることができる」という噂がまことしやかに傳えられるほど地味が膏腴でもあつたから、とくに雍正七八年の清丈の完成までは、四川の省は、相對的な意味では天下切つての米どころであつたと思われる。ただこの省分は大體が山國である。米どころとはいへ、到るところ稻米の生産地であつたわけではない。萬山の叢積するうちで、ただ成都附近の十餘の州縣が平洋寬廠、田には渠堰すなわち水利の施設が多く、もともと米穀を産して古くから沃野千里といわれていた。しかしその餘の府廳州縣は、みな山に依り澗に傍し、その田坵地塊は専ら天雨の灌漑にたより、稍（すこ）しても時に及ばないことがあるとすぐ不作になるといつた俱合であつた。松潘の一廳（四川省西北部甘肅省寄り）鹽源（西南部雲南省寄り）等の四州には秋禾を産しないといわ

れるのは、稻米が全然できないと言う事ではなかつたかと思う。全體としてみると、雍正期における四川省の米穀の生産狀況は、成都・重慶・夔州・瀘州・邛州等の府州屬が産穀すでに多く、保寧・順慶・寧遠・叙州・嘉定・眉州・達州・綿州・資州・潼川州等の府州屬は、産穀の多寡が一つではなく、ただ雅州・龍安の二府と直隸茂州等の屬には産穀が多くないという有様であつた。

いわゆる巴蜀盆地の冲積地を中心とする四川一省の米穀生産高は、とくにその土地清丈の完成までは、表向きの人数・田土畝數に比べて著しく高いものであつた。單に生産高が高く、生産率がよかつたばかりでない。年歲による豊凶の差も比較的少なかつたらしく（一五三頁）、米穀事情が安定していた。四川省民の習俗では、かつて米穀を蓋藏するものがなく、たとえ紳士豊裕の家であらうと、皆隔年の蓄わえがなかつたと言われているのは、その安定に對する氣の弛みからであらう。河南省あたりの鄉村には、ややもすれば「糧百餘石の家」があり、食料事情の逼迫に際して、附近の貧民から夜討ちをかけられる事もあつたのとは、大ちがいである。それだけにまた、米穀は一そう市場にだぶつ

く。價格はますますつて壓し下げられざるを得ない。前出（一五五頁）、雍正帝のいわゆる米一石三錢という相場（雍正六年）も、同省では必ずしも有りえなかつたことではない。じじつ李衛のごときは雍正五年ごろ、四川省では米價が甚だ賤しく、ために斗斛ますの大きさが他省の倍もあり、浙江省の斛で十萬餘石のものが、四川省の斛ではただ四萬七千餘石にしか當らなかつたと傳えている。^{四〇}

四川省民としては結局、ありあまる米穀を省外に輸出することに依つて、「熟荒」的な、それ以上の價格の慘落をふせぎ、あわせて、錢糧納付のために必要な現銀を手に入ればならなかつた。多くの場合かれらはそのようにしていたが、その際、四川全省の米穀の最大の集散地となつたのは重慶府であつた（一八四頁参照）。

(b) 湖廣省の米穀事情

湖廣省すなわち湖北・湖南兩省については、雍正四年末、都察院左都御史で同省總督印務を署理していた福敏が、その天下第一出米の區であることを斷言している。^{四一} またかつての「江・浙稔れば天下足る」等に對して（一三一頁）、ほぼ明代の末ごろから「湖廣熟すれば天下足る」という俗諺が

民間に言いはやされて來たことも人のよく知るところであらう。相對的にも絶對的にも、文字どおり天下第一であつたかどうかは少し疑問だとしても、相對的には四川省につき、絶對的には江南省（江蘇・安徽二省）とどちらか、といつた米穀の大生産省分であつたことは明白である。

ただ一口に湖廣省といつても、米穀の主産地は、雍正二年度の奏銷冊上の田土面積では却つて少ない湖南省であつた。湖北省一帯、とくにその政治的・經濟的な中心地として、多くの非農業人口をかかえた武昌および漢口地方が、湖南省地方からする産米の供給を、もつとも大きな命の綱の一つとしていた事實によつても、そのことは諒解できよう。湖北省での米穀の主産地が、漢水・揚子江その他湖水の沿岸に偏在して、湖岸ではいわゆる「湖田」區域を形成し、^{四二} 湖南省でのそれが長沙附近・常德附近・および湘江附近にあつたことは、^{四三} 民國初期にもその二百年前にも大差はなかつたことと察せられる。湖南省、とくに長沙・岳州および常德の三郡の米産については、洞庭湖での土地利用が一大特色として目立っている。同湖は、春夏水發のさいには洪波果て無い状態となる。秋冬に水が涸れると今度は萬

頃の平原と化する。濱湖の居民は（古くから）堤を築いて水を堵いでこれを耕していたが、なにぶんにも地勢の卑下なところ、時として水患をまぬがれず、恃みとするところは、惟だ堤塹ばかりであつた。同じ堤塹とはいへ、形勢は湖北省の場合とはるかに異なる。湖北の堤は揚子江を禦いで田を救うというのであつたが、湖南の堤は水を阻いで田とするものであつた。湖北の堤はあるいは東西に長さ數百里・南北に長さ數百里という式であつたが、湖南の堤は大きいもので周圍百餘里・小さいもので二三里、四角いのもあり丸いのもあつて、星羅棋布し、名は堤であるけれども實はみな垸（枕状のかこい）であつたのである。産米の郷、つまり米どころで、米價が他省よりも賤いことで聞えた同じ湖南省でも西部・南部・西南部の山寄りの地方では大分様子が違つていた。すなわち、辰州・靖州・衡州・永州所屬は多く山場に屬し、百姓たちは松や杉を栽植して伐賣し、あるいは桐樹、茶樹、蠟樹などをうえて生計を營み、また衡屬では烟草をうるものが多かつたという。米穀以上に、その他の高度の換金作物に依存せざるを得なかつたわけなのである。

洞庭湖附近および湘江流域を中心として多量に産出された湖南米は、長沙・衡州・岳州および常德の四府など交通の便よく、とくに舟楫の聚まり易いところに一應集荷され、自省消費分以外の餘剩分はさらに省外に輸出されたものと推想されるが、なかでも最大の集散地として賑わつていたのは——北風をまともに受けやすく、また小港の灣入にも恵まれていなかつた長沙（長沙縣）とは違つて——商船のためには屈竟の棲泊のところとなつていた長沙府屬の湘潭縣である。そこでは千艘もの商船が雲集し、四方の商賈が輻輳する。そして數里の市鎮では貨物を堆積して有無を懸遷し、居民の櫛比しているのが見られた。雍正元年九月、中央から派遣されてきて湖南米・大量十萬石の採買にあたつた兵科掌印給事中の陳世倌は、長沙・湘潭および衡陽の三カ處でそれを買ひ調のえ、民船一百四十五號を雇い入れてこれを選びさつた。長沙・衡陽などもそれぞれ湖南省における大集散地であつたことは疑いないが、中でも外省に對する出口としては、湘潭がもつとも利用され易く、また事實、もつとも盛んに、利用されてもいたのだと思われるのである。

とは言え、湘潭等に集荷された米穀が、そこから直接中國の各地に送られていたかというに、必ずしもそうではなかつたらしい。湖南に産出する鐵についてはこんな事がいわれている。産鐵の地方では、外省から來た利にさとい商販たちが例外なく近くに爐を設けて錘鍊し——（外省の商業資本によつて製鐵手工業が經營されていたことも、別個の問題ではあるが注意を要する）——下船裝運のうえ、湖北省の漢口に赴いて發賣し、あるいは漢口から兩江（江西省・江西省）に轉運してから遞販すると。米穀についても漢口地方は、湖北省の省城武昌とともにその供給を四川省と湖南省とに仰ぎ、ために商販が駢集していたといわれる。湖南米もやはり、一おう漢口に集荷されて始めて、それ以外の諸省分にも轉運されたのだとみて誤りないであろう。

(c) 江西省の米穀事情

江西省に關するF—AしたがつてS—Dの計數は、前掲のように必ずしも高いとはいえない。しかし、他の諸史料の指し示すところを綜合して考えると、同省は明らかに、すぐれて産米^ニ食米的な、諸省分のうちの一つであつた。

F—Aの算出のためにつかつた分母、もしくは分子の計數

のどちらか、悪くするとその双方には、かなりの誤差がひそんでいたのであろう。

まず雍正帝は元年六月に、漕米を負擔している各省のうちでは、惟だ湖廣省と江西省とが米を産すること最もひろく、また近年、盛京が豐收のため米價がやすいお蔭で、この三カ處が（食糧政策上の）何よりの頼みの綱だといひ、また雍正九年の初め、當時行われていた漕糧を停運しようとする議論に、江西省における米價維持の見地から強硬に反對したあの巡撫の謝旻も、口裏を合わせたように、運漕の各省のうちでは唯だ江西省と湖廣省とが、米を産すること尤も多いと言つてゐる。さらに鄂爾泰が雍正五年、程廷偉というものの積穀に關する意見を批判した奏文のうちにも、

臣査するに、この法はこれを江西等の處の米穀の出産もつとも高く、水路四通し客販はなはだ衆く、庫には原^{もと}より餘帑あり、農には原より餘粟あるに行わば、貴なるに糶^{うけよね}し賤なるに糶^{うけよね}して上下こもも濟^{すく}い、用意もとより善にして事得べきに屬す。

とある。ともに江西省が、少なくとも相對的な意味では、有數の産米省分であつたことを物語るものといえよう。事

實この省分では、ときとしていわゆる熟荒の危険に見舞われることがあつた。雍正八年冬のことである。江西省では連歳の豊収に加えて、この年の秋も大豊作であつた。各屬の穀價の平なのは結構であつたが、南昌・瑞州・饒州・南安および贛州の五府ではひどく安くなり、冬には每石三錢四五分から二錢七八分不等になつた。戸ごとに豊盈なため市には収買するものが少なく、そこで秋から冬にかけて、民間で現銀を需めて使用したいものは、反つてその持ち米を糶賣する道がなくて苦しんだという。謝旻が漕糧の停運に反對せざるを得なかつた、具體的な經濟的背景にほかならない。ゆらい中國の流民——大災や凶作でやむなく郷土から遊離した農民たちは、おそらくは口づての情報網をもつていたものであろう。敏感に穀物にゆとりのある所を求めて移動していく。たとえば山東・河南兩省からの流民はしばしば湖廣省、ときには遠く四川省まで流れこんで就食したが、問題の八年冬にも、山東袁州等の處の被水乏食の貧民は妻子を携帶して江西省に入り、南昌・饒州・九江等の府で食を求めている。やはり江西省が、四川・湖廣の兩省とならぶ大きな米どころとして聞えていたためなのであ

ろう。

連年豊作の後をうけた雍正八年にはばかり、いわゆる熟荒の危機があつたのではない。三年前の五年には、江西省では——といつても、一部においてはあろうが、米穀でもつて豚豕を飼養するもののあつたことが指摘されている。

雍正帝は、考えてもみよ、穀食と肉食とではどちらが重くどちらが輕いか、どちらが緩くどちらが急であるか。しかるに上天の賜うところ、小民の終歲勤苦して獲るところをもつて、畜類をやしなう役に立てるとはといつて憤激してはいるが、農民としてはむしろ、有り餘つてはけ口にこまる米穀——とくに恐らくは碎け米（碎け米で豚を飼うことは今でも廣東などでは行われている）の最良の利用法だと考えていたのであろう。いずれにせよ江西省が、F—Aの数値の如何にかかわらず、中國での有數の産米省分であつたことは疑問の餘地のないところである。

江西省での米穀の主産地は、雍正八年に米價がひどく下落したといわれる南昌・瑞州・饒州・南安・贛州などの諸府に、當時山東省からの流民の目標にしていた諸地方の一つである九江府を加えた地域、なかなしく鄱陽湖の附近と

贛江の流域とであつた。省内での飯米分をさしひいた餘剰米の大部分は、民國初期の例でいうと省城の南昌、もしくは、税關が商船の舟泊りのための便を思つて對岸の湖口縣から再びそこに移されていた九江、そのどちらかに集荷されて省外に輸出されていたのではないかと思う。ただ中部以南の贛州・吉安および建昌など廣東・福建兩省に近いところでは、わざわざ北方に集荷するまでもなく、商販たちの手で直接それらの諸省に搬運していたものと見られる。

(d) 廣西省の米穀事情

米穀もしくは小米・高糧をもつて豚豕を飼ひ、江西省とならんで天子の叱責をくらつた仲間に、廣西省と奉天省とがある。奉天省は産食稻米區域内ではないから論外としてよう。廣西の一省は、絶對量的にはともかく、少なくともF/A ないしはS/D の數値の點では相當高い省分の一つであつたのである。

産米の絶對量が少なかつたであろうことは、その田土畝數の統計が端的にそれを物語つており(一三〇頁)、また雍正元年に同省の巡撫であつた孔毓珣もやはり、粵西では地が廣くて人が稀れて、山が多くて田が少なく零星に散處して

いるといつて、その事實を裏書きしている。ただその地味は非常に肥沃で、その意味では將來に向かつて大きな可能性を包んでいたらしい。孔毓珣の後任者(署任)である韓良輔が、二年閏四月に、粵西は土曠うして人稀れに、一望みな深い篁と密箐とである。篁箐が深く密であるからには、その地が礪礪斥鹵でないことは確かだ。もしその篁箐の舊根をとりさつて稻穀の新種を入れたなら、必ずすつかり膏腴の沃土になろうと言つてゐるのがそれである。(ただその開墾を遂行するためには種々の社會的・經濟的な制約があり、必ずしも容易ではなかつた。廣東省などについても指摘されている、豪矜猾吏などの既墾地冒占掠奪のほか、「出産するものは止だ米穀があるきりで、納賦は銀でなければだめだ。かつ差徭が田に随つて起きる」といつたことに對する憂慮が指摘されているのは印象的だが、しかし開墾關係のことは今後また別個の問題として取りあげられねばならない)。急には進まなかつたとは言え、徐々には篁箐も切り開かれていつたことであろう。とくに、雍正五年以前には、廣東省の沿海地方が何度も水患にあひ、寄る邊ない貧民が、頗る多く廣西・四川の二省および臺灣に移住

したといわれるから、開墾のこともかなりに涉つたと考えねばならない。また事實、雍正八年正月に雲貴廣西總督であつた鄂爾泰は、粵西は地土が肥沃で寛平であること、内地の諸省に譲らない。これまでは同地は頗側險隘の所だといふ説があつたが、これは全然虚捏である。自分が柳州府・直隸賓州を経過し、自分の目で親しく見たかぎりでは、耕種できるものが已に數十萬畝を下らないと言つてゐるのである。⁵⁰

廣西省はこのようにして、雍正時代の全時期を通じて、食糧事情にゆとりのある省分であつた。巡撫の金鉉が七年に、粵西は田畝が瘠薄(?)だとは言いながら、一歳に産出される米穀は、一歳の用を敷らわして尙お餘りある方である、倉穀の糶賣に頼りきることもないといつており、⁵¹兩廣總督の鄂彌達が十年に、廣西省は地廣人稀・穀石に餘りがあり、また惟だ廣東省に販運して銷售できるだけだと指摘してゐるとおりである。また事實、雍正十二年のごときはその前年における廣東省の大豐作の後をうけて廣西省も大豐作に恵まれ、稻作地方の十分の八九までが十分の收成、わずかに一二分だけが九分の收成であつたため、穀價は毎

石二錢一二分から三錢七八分止まりという慘落を告げた。⁵²いわゆる熟荒の部類に屬するのであらう。

六 中・南シナ諸省の米穀事情(下)

以上の諸省が概して米穀の生産省分的な特徴をより濃厚に示していたのに對し、むしろ消費省分的なそれをより顯著に現わしているのは、F-Aの數値が比較的低位にある廣東・江南・浙江および福建などの諸省である。

(e) 廣東省の米穀事情

それらのうちでも、省内での米穀の需給關係が、まだしも窮屈でなかつたのは廣東省である。とくに麥その他の雜穀を加えての食糧事情は、大したゆとりはないまでも、自給できない程度ではなかつたと見てよい。なるほど一方には、粵東は幅員が遼闊で生齒も殷繁だが、いかんせん、逐末者が多くて力田者が少ないために、毎年本省で取めるところの米麥が民食に敷らないとか、はなはだしきに至つては、廣東で一歳に産するところの米石は、たとい豐收の年でも僅かに半年有餘の食を支えるに足るにすぎず、通省を合計すると穀で四百餘萬石を積貯せねばならぬとかも、言

われて居なかつたではない。しかし、これらは必ずしも實狀をうがつたものではない。第二の意見に對して雍正帝は、本省で産するところの米が本省の食に供するに足らないということは、不作の年ともなると有りうるかも知れない。

毎年そうだというのなら、豐歲もまた然りとなるが、恐らくそんな理窟はあるまいといつて、廣東省でのいわゆる米不足の諸原因を臆測している。その八年後、鄂彌達も同じ意見に反して、粵省では山が多くて田が少ない方ではあるけれども、もし旱澇さえなければ、産するところの米糧はまた一年の食を敷らわすことができ、さらに廣西省の穀でも藉りてくると十分に裕かになると斷言する。⁽⁸⁾ここらがむしろ、廣東省における食糧事情の真相を傳えるにちかい。

事實、同省における米價の動きをみて、沿海地方に水害の多かつた雍正前期にはなるほど高い。しかし豐作に恵まれた六年には、ふだん米の貴い^{たか}ので知られた惠州・潮州の二府でもついに減じて一兩幾分となり、高州・雷州・廉州などの諸府では一そう賤くなつた。⁽⁴⁾あくる七年も續いて豐年である。米價はさらに壓し下げられ、廣東省ではこれまでもかつて聞いたことのない五錢幾分かの新安値を現出する

にいたつた。⁽⁵⁾雍正帝が向^きには廣東省は人稠地狹、豐年でもまた必ず隣省の資^{たす}けをかりるとの論があつた、自分はいつもこんな理窟はないと言つていた、今や上蒼の慈眷を蒙り、はじめに豐熟二載なるを獲て米價は、すなわち更に他省よりも賤い⁽⁶⁾とて、その先見の明を誇つたのはこの時のことである。この時の米價安は「數十年來いまだ有らざる」現象で、日ごろは多盜で聞こえた南海・番禺二縣でも、この歲に限つて刼案の報告がない有様であつたとも言われる。⁽⁷⁾しかしその後も、九年以後の連年の豐收で、十一年には、實に向日まれに聞くとところの米賤狀態を再現した。⁽⁸⁾廣東省が食糧、とくに米穀の需給關係において、ほとんど自足にちかい能力をもつものであつたことは疑いあるまい。

廣東省は、雍正時代にあつてもすでに、全人口に對する非農業人口の比率の高かつた省分の一つである、粵東では無産無業の民が甚だ多いとか、⁽⁹⁾そこでは墾すべき土地に乏しくないのに、民間では稼穡に勤めない⁽¹⁰⁾ので、米穀價格が雲南・貴州・廣西などの數省のように平易なわけにいかない、とか言われていたゆえんに外ならない。非農業人口のうちには漁民や鑛山勞務者も多かつたであろうが、とくに

廣東省城附近から佛山鎮にかけての地方は、木棉織物・鐵器具等の手工業の中心地であるとともに、内外商業の據點でもあつた。それら商工業に従事する人口の多かつたことが、その非農業人口の高率化をいつそう促進していたものと思われ、たまたま雍正十年、署廣東總督・鄂彌達が、粵東は海に濱し山を環らし、民は稠く土は狭い。廣州省會および佛山・龍江の各市鎮には商賈が雲集するが、本地でできる穀石は豊歳でも僅かに民食に敷りるだけで、省・鎮の商賈の需に應ずることができない。もし稍しでも敷にあうと、みな給を廣西省に仰いでいる、⁽¹¹⁾ というものがその間の事情を物語るものであらう。さらに廣東省では米穀以外の換金作物の作付歩合の多かつたことは前述のとおりである（一三三頁）。にもかかわらず廣東省は、その豊作の程度によつては、他省にまさる米價安の恩恵にあずかることができた。これまた前述のように（一三四頁）、二毛作によつて高度に地力を利用することのできたことが、この結果をもたらし居たのではないであらうか。

廣東省の中では、北江・西江・東江の下流の沖積層すなわち廣東三角洲地帯が、後年の例に照らして考えても、一

おうの産米區域であつたと思われる。この地帯は地勢が低窪で、毎年、西江水發の災禍を受けがちであつた。そこで民間ではいわゆる圍基を築いてそれを禦いでいたが、ただそれは土基であつたため餘り長持ちはしなかつたという。⁽¹²⁾ 圍基を築いて、田廬を保護していた範圍は、廣州府屬の南海・番禺・東莞・順德・新會・三水・清遠・花縣と、肇慶府屬の高要・高明・四會等の縣の沿河の地方であつた。⁽¹³⁾ ただこの三角洲地帯での産米高は、とうてい、商工業が盛んで人口の稠密な本地の需要を充たすには足りなかつた。雍正九年の文獻に、これまで廣西省に米糧の給を仰いでいた諸府として、とくに廣州・肇慶および惠州・韶州の名が擧げられているのはその爲めに違ひない。惠州・韶州二府のほか、「山多く田少なし」で知られた南雄は別として、⁽¹⁴⁾ 廣東省東境に位する潮州府もしばしば米穀、ないしは食糧の不足を懇えている。⁽¹⁵⁾ しかしこれは、廣東省が全體としてそうであつたと同じように、不作時に限つての窮迫ではなかつたかと思う。すなわち、雍正五年春には、潮州各屬の地方が人多くして田少なく、兼ねて前年被水の各縣では、冬間に米價が稍々昂まり、貧民のうちには、高州・雷州・廉

州等の府に往つて、就耕謀食するものがあつたと伝えられるのに、十年や十二年にはそれとは違つて、潮州は人烟稠集し、山が多く田が少くないのに、本處の穀石は、居民の食用に供するを除いて尙お福建省の漳州から毎歲潮州にきて告糴するものがある、小民たちは只だ目前の利を圖るばかりで、一こう豫備し蓋藏することをしなと言われているのである。また、潮の郡たる、もと産穀の區だとか、廣東省潮州府は向きに福建省の漳・泉二府の資を仰ぐところだつたという證明もある。これに反し、平時をもつてしても食糧に事缺いていたらしいのは、西南方海上に孤懸する瓊州府(海南島)である。そこでは生齒殷繁、商民が雲集していたので、該地の民食はつねに高州・雷州の兩郡から粟を輾運して接濟するに頼り、本地産米の穀石では初めから一歳の需に敷りなかつたという。

廣東省のうちでS—D數値が最も高かつたと思われるのは、前文のうちに飢民の就食先、米糧の補給元として出てくる高州・雷州および廉州の三府である。雍正前期の廣東全省の米價高の時に、これらの三府の各屬は倉穀三十餘萬石を貯えて悠然としていた。ただこれらの諸府は、その

もつとも東寄りの高州府でさえ、河渠によつて、その生産物を手輕に省城地方に搬出する利便に恵まれていなかった。必要のある場合には、同じ省内でありながらわざわざ海船を仕立てたものらしく、雍正五年、三歲しきりに饑えて民食に艱んだ潮州府が、その高州府において多量の米穀を買入れることになり、要領のよい宋肇炯という巡檢が、佛山鎮で廣鍋・棉布の屬を購入した上、それを携えて海路から目的地に向かつたことは藍鼎元の『鹿州公案』の傳えるところである。他にいろいろ理由もあつたが、この交通運輸の不便にも災いされて、高・雷・廉三府の農業的開發は一定限度以上容易に進まず、雍正七年においてそれらの三府は肇慶府とともに荒地の多いことが尤も甚しかつたと稱されている。

(f) 江南省の米穀事情

江南は本地に産するところの米が既に饒かだとか、天下の米糧は東南各省より出するもの多きに居るとか言われていたとあり、江南省は、少なくとも絶對量的には依然として天下最大の米どころの一つであつた。相對的な意味でそのS—Dの數値を下げていたのは、前述のように(一三一・一四〇

頁)、主としてはその稠密な人口——江南は地廣く人稠く、米穀を需要すること他省に倍するといわれたその人口と大量の漕糧の負擔とであつた。とくに後者(漕糧)に關しては、民國革命以來、政府に納付する貢米は銀を以つてすることになり、舊來の現米輸貢に相當する米の剩餘を生じたので、民國元年八・九月の交において運米出省章程を改正し、原則として省外移出を認めることになつたと傳えられる。

この改正章程は僅かに一週間で撤回されたが、しかしともかく民國初期には、中シナ各省中、移出の餘力を有するは江蘇・安徽・江西・湖南の四省だといわれるまでに、S-Dの數値を回復して見たように見える。本來の面目を取り返えしていただと言ふことができよう。

同じ江南省といつても、雍正時代に實際のS-D數値がより高かつたのは、例のF-Aの數値(一三三頁)の順序とは違つて安徽省ではなかつたかと思う。雍正末期に兩江(江南・江西兩省)總督の任にあつた趙弘恩が、十二年には、民間食米の每石の價格が、上江(安徽省)下江(江蘇省)の各府州縣では、いちばん高いのでも一兩一二錢を過ぎず、かつ價の一兩以内にゐる者が甚だ多く、江西の米となると每石さらに僅

かに七八九錢不等にしか値いしないといひ、翌十三年には、江寧等の府屬(江蘇省)では每石の價銀が八九錢から一兩二三錢不等に至り、安慶等の府屬(安徽省)では七八錢から一兩一二錢不等に至り、南昌等の府屬(江西省)では七八錢から八九錢不等に至つたと言つてゐる。ほほ似たものではあるが、もし江蘇省の米價が他省からの輸入米を加算しての相場だつたとすれば、安徽・江蘇兩省の米穀需給についてのゆとの違いは、この米價の開きから推察される以上に大きかつたのではないであらうか。安徽省については、たとえば廬州府や鳳陽府地方のこと——そこでは婦人の耕種に靠つて男子が遊蕩にふけり、人民が游惰で耕織につとめず、田畝の荒蕪したものが多しなどという不利な情報も傳えられてはゐるが、結局、人口が割合に少なく、さらに漕糧が少なかつたことが幸ひして、米穀の需給關係をゆるめていたものと察せられる。安徽省の産米は後述のように(一七七頁)、浙江省への補給米の一つとなつてゐた。當然、地理的にも行政的にもより近い江蘇省にもはいつていたものと見ねばならず、中村治兵衛氏がかつて乾隆以後の時期について指摘したような事態、かなりの安徽米が南京(その他の江蘇省

各地)に民食の用として入つてくるような事態は、それ以前についても十分ありえたことだと思ふ(一七八頁)。

江南省での米穀の主産地は、いうまでもなくいわゆる吳平野、すなわち太湖周辺の冲積層地を中心としたところで、江蘇省の蘇州府・松江府・大倉州から、安徽省の太平府・寧國府および廬州府にわたつていた。名だたる澤國のこととして地は多く窪下、沿江傍湖の田は夏秋の次において、江湖湖溢のために水患を免がれなかつたが、地味そのものは肥沃であつたと見られる。ただし沿海地方では稻を種えず、ただ棉花や豆を作つていたようである。

江蘇省の土俗では、中稻米が(濕蒸な季候のためでもあろうか)耐久し難い、という理由でそれを種植するものが十に一二もなく、總じて晚稻をもつて主にするのが特色であつたという。なお私は先に(一四〇頁等)、江蘇省の産米は良質だが、その最良の部分は漕白糧としては召上げられ、麥作地帯の淮徐地方では一般に麥麵にたより、それ以外でも農佃の家では二麥の春熟に頼つて接濟していたことを述べた。では、江蘇産米地帯における民間普通の主食はということになるが、幸い一二の記録はそのことに關して次のような

報告を残している。すなわちいう、蘇州・松江等の府では、米價は原もと貴賤一つではなく、米色のごときもまた高下齊しからざるものがあつた。従前糶して一兩六七錢にもなつたものは、冬春の四糶上米である。民間で買つて常食にするものとなると、いずれも糙・粳・楚秈などの類で、春間でも價格は每石一兩四五錢不等、今(十一年夏四月)は一兩三四錢に過ぎない。またいう江寧省城(南京)では現今(十三年一月)米價が、熟米で每石價銀一兩一錢五分、次熟米で每石九錢四分、糙米で每石八錢八分である。これまで民間で買食していたのは多くは次熟米や糙米であつた。今はその價格がどちらにも往年に比べると平減であり、閭閻には實に充裕の象があると。楚秈すなわち湖廣省の秈米(これは味が悪い)が江蘇省民の常食(常餐)の一つにはなつてゐることは注意されねばならぬが、これについては復たあとで觸れる機會があるであらう。(一七五・一九〇頁等)

なお、安徽省の歙縣は、米價の上では餘程特異な事情にあつたところらしい。前後四年間この省で巡撫を勤めあげた魏廷珍の報告によると、本縣ではつねに管内各地に比べて米價がずば抜けて高い。六十州縣中、每米一石價錢六錢

から七錢のものが六處。八錢から九錢のものが二十處。一兩から一兩一錢のものが十九處であるとき、歙縣のみは一兩八錢であつた。⁴⁰五年十一月十九日・六年十一月十八日等の報告では、實に每石二兩とされている。雍正帝もこれをいふかり、自分にはどうも譯がわからない。また通省が豊熟を報じながら、一邑の昂貴を坐視して調劑するところがないとは、お前らの仕事は一體になのか、自分にはさつぱり判らないとこぼしている。⁴¹安徽歙縣はいうまでもなく、明清時代を通じて各種商業、とくに鹽・當二業に絶大な勢力を振るつた徽商の本據である。⁴²その米價高もこのことと直接關係のあることであろうが、まだ十分に調査の手をのばすいとまがなかつた。

(g) 浙江省の米穀事情

浙江省ともなると、雍正帝自身が雍正四年に、浙省が戶口繁庶で食米が充分でないことは朕の深知するところだと言つてゐるのでも判るように、食糧事情が大分窮屈の度を増してくる。だいたい江蘇省と同じような原因によるものだが、とくに浙江省では、養蠶や桑・麻の植栽の盛んであつたことが、一層そこでの稲作に制限を加えていた（前文

一三一頁）。

浙江省のうちでも、「杭郡は原より蠶桑・粳稻の郷に屬する」⁴⁴といわれた、その杭州府を初めとして嘉興・湖州の二府を含むいわゆる浙西一帯の地勢窪下の區——とはいへ、嚴密には同じ杭郡でも、西部と東部とは大分様子がちがつていたけれども——には、江南省の蘇・松等の屬縣の場合と同じく多く晚稻が種えられていた。⁴⁵これに反して錢塘江上游の地方、金華・衢州・嚴州などの諸府のあるいわゆる浙東では、早稻が大槩その半ばを占めていたと言われる。低濕な浙西では水患が、土地の高めな浙東ではむしろ天旱が心配の種であつた。浙東地方のうち、金・衢・嚴および紹興の四府は、山地が少なくて水田が多かつたが、ただ寧波・台州・温州および處州等の屬は、地勢の高いところが多くて田畝はいわゆる山田を形成していた。⁴⁷後の四府のうちでも温・台等沿海一帯の潮濕の區では、官倉などでも米穀の長持ちがしない。民間には蓋藏のあるものが鮮ない。そこで温州では全く平陽・瑞安二縣の産米に頼り、台州では惟だ黃巖・太平等の諸縣のそれを持って販運接濟してもらねばならなかつた。⁴⁸しかもその台州はこの地方におけ

る漁業の中心地で、春夏の交のいわゆる漁汛ともなると、魚船が雲集してきてここで米糧を買食したという。

浙江省の産米區域はこのようにして、浙西地區・浙東平田地區および浙東山田地區と三つに分かれていたわけであるが、そのうちの最大の米どころは言うまでもなく浙西地區であつた。早種よりも收穫高が多いといわれる晩種が主であつたことも、相當そのことに影響があつたに違いない。にもかかわらずこの地區は、事實上、米穀の需給關係が浙江省内でも最も窮屈なところであつた。いうまでもなく漕白糧の收納を強いられていた結果に外ならない。浙江省では江蘇省の場合それらが、一おう蘇州（正兌米六五・五万石）・松江（二〇・三万石）・常州（二七・五萬石）の三府に偏つて負擔させられていたとは言え、まだしも他の諸府にも分擔させられて居たのとは違つて——全然、浙西地區の杭州（正兌米一〇萬石）・嘉興（二九萬石）・湖州（二一萬石）の三府のみの負擔に歸していたのである。（銀の形で徴収するいわゆる「漕項」は、さすがに他の諸府にも割り當てられていたけれども）。『浙江通志』によると、三府の政府に收納すべき米穀は、漕糧だけでも、正兌・改兌の正耗米を合算

すると年額八十六萬三千三百四十六石餘に達していた。これに白糧の九萬五千九百八十九石餘を加えると、ほとんと百萬石に近い。この三府では、「漕糧を支辨するのほか、たとえ豊年でも尙お民食に敷らない」といわれていたゆえんである。まだしも嘉興府について、食足るを除くのはかは、皆な震澤鄉鎮に「集めて糴する」といわれているのは、豊作ともなると畝當り二石餘の收穫があるといわれるその土地の膏腴さと、長年の經驗に裏打ちされた、その農業技術の高さとを頷き思わせるに足るであろう。

なお江蘇・浙江地方には颶風の來襲する比率が高く、とくに沿海地方では津浪の被害に備えて土塘・石塘を築いている所が多かつたが、それにも拘わらず、近水の塗田が何度となく風潮の打撃を被つていたのも、この地方の稻作事情についての一特色であつたと言ふことができよう。

(h) 福建省の米穀事情

中・南シナの各省のうちでも、米穀事情にいちばん恵まれていなかったのは、福建省、とくに臺灣府をのぞいたいわゆる内地の八府一州地方ではなかつたかと思う。第一、地勢的にも山がちで耕地に恵まれていない。福建省では山が

多くて田が少なく、民に蓋藏がすくなく⁵⁰とか、同省では山が多くて田が少なく、田は多くは墾^{たがや}さず、米は用に足りないとか、同じようなことが、多くの人々によつて何度も繰り返えされねばならなかつたゆえんである。數年間この地の長官(浙閩總督)を勤めていた高其倬は、この地の食糧事情とくに米穀事情を要約して、福建は自來人が稠^{ひそ}くて地が狭く食米が敷らない、そこで各府の郷僻のところでは民人が多く薯蕷を食ひ、ついにこれをもつて數月の糧にあてているとも言ひ、また、歷來閩省は、大約一歳に産するところの米が一處の食にも足りず、その勢い必ず外省に資借するとも表現している。⁵¹これらはともに、事情のとくに窮迫してゐたところの言葉である。多少は割り引きして考えねばならぬが、しかし大體としてはやはり、よく同省の食糧事情——それも常態的なその眞相をうがつたものと言うことができよう。結果として、米價の高かつたことは言うまでもない。平常でも他省に比べるとやや高目であつたが、いざ不作・輸入の杜絶となると直ぐに米價がはね上る。ひどい時には每石價銀二兩六七八九錢不等から、斗米三錢の大打を割ることもあつた。そうなると食に苦しむ「無頼の輩」は、

米舖あらしの米騒動はもとよりのこと、盛に海に出て搶劫を事としたという。⁵²その反面、米穀事情が好轉し、米價每石八錢から一兩までなどということになると、福建名物の械闘や、盜劫等の案件も、ずつと少なくなるのが習わしてあつた。⁵³

同じ福建省のなかにも、いずれは窮屈にちがいないが、多少は事情の増しな地方でもないではなかつた。延平・建寧・邵武・汀州の四府は廣く稻穀を種えて、二麥は稀少である。⁵⁴延・建等の處は原^{もと}より産米の郷にかかるなどと言われた、主として(汀州は別)閩江上游の溪谷盆地がそれである。雍正七八年に布政使をしてゐた潘體豐は、もつと詳しく次のようにいつている。

閩省の風土民情は、内地の八府一州、地土の腴瘦おのおの別にして習俗の淳澆同じからず。延・建・邵・汀の四府のごときは、小民多くは耕種をもつて業となし、習尚良樸、ただ山多くして田少なく民に蓋藏すくなし。⁵⁵依然として「山多田少」の宿命にはつきまとわれてゐたわけだが、それでもこれらの諸地、とくに延・建・邵の三府の産米は、五方雜處し兵民稠集、しかも本屬には産米の多

くない閩江下游の省城・福州住民の命の綱であり、米船によつて運搬されておつた。大雨で溪河の水が漲り、小舟があえて載運しなくなると、たちまち米船の來かたが稀少になつて、福州での米價を吊り上げる結果になつたといわれる。省城で米糧がすこぶる貴かつたときとて、延・建・邵の三府ではすこぶる賤かつたと傳えられるのも、むしろ當然のことであらう。延・建等の四府のほかでは、福州だけがまだしも産米に恵まれていたらしい。その他の四府のうち、福州・興化の二府は産米が多くなつたとせば福州府の福清縣では田少なくて園多く、番薯を種えて糧食とする有様であつたが、泉州・漳州の二府となると産米がさらに少なくなつた。海防上の軍事據點となつていた沿海の島々が、産米の稀少に悩んでいたことは言うまでもない。雍正四年夏の食糧危機の時にも、省城および延・建・邵・武・福寧等の府州ではまだ市米があつて持ち堪えられたが、泉州・漳州、興化および汀州等の府では、米價が日に昂くなり（前出、米價每石二兩五六七八九錢不等）、中でも泉州・漳州二府が最もひどかつたのである。それでなくとも泉州・漳の二府は、毎年二三月になると、倉米の平價糶賣を行わねばならぬ

所であつた。問題の四年の夏から秋にかけては、あまり樂であるはずもない福州に、二府から毎日三四萬人もの人民が就食に出かけ、また別にその福州から米を移入している。その窮迫ぶりを推察すべきであらう。

全般的にみて、耕地に恵まれなかつた福建省の住民たちは、時には北鄰りの浙江省東部の台・處・嚴・衢等の府の山内に流寓して麻を種え、また寧波・温・台等濱海の諸府に雜居しておそらく漁業に従事するとともに、時には同じく北鄰り、江西省の建昌・廣信等の府屬に田地を置買し、寄莊して錢糧を辦納していたといわれる。江西省での田地の置買は浙江省人についても見られた現象であつたが、いずれにせよこれらは、本省内部における窮屈な食糧事情の端的な反映とみられるべきものであらう。

内地の諸府州の窮狀に對して、ともかくも救いの手となつていたのは海外に孤懸する臺灣の一府である。臺灣では氣候・物産が内地と同じでなく、早稻を種えるものは少ない。菁・麻・豆・蔗を雜植し、晚稻を栽挿するのは五六月の交であつた。前述のように（一二七頁）、一麥は作らない。全然作らないではないが、ごく少なくなつた。この地の産米は從

前から、内地とくに漳・泉二府等の處の必需するところであり、定例では、およそ正・二・三・四・五等の五カ月間は毎月、臺灣から米一萬石ずつを持つてきて漳・泉に赴いて接濟していたらしい。ところが康熙の末年、朱一貴によつて指揮された民變がこの地におこると、神經質になつた清朝は、亂後、巡臺御史たちの意見——米の運出を許すと洋盜に接濟する恐れがあり、また、搬運によつて臺灣の米價が騰貴すると、治安が悪化する心配があるという意見に従い、臺灣米の過海を許さなくなつた。いわゆる米禁である。

「泉・漳の民に米ありや米なしやは顧みざる所にあり」。

これは、その米禁に對する浙閩總督・高其倬の評語だが、その米禁も、二年越しの不作に祟られた雍正四年の福建省の食糧危機に際して一ます撤廢された。

臺灣には贛戸こまつきやというものがあつた。内地でいう米行こめとやであつて、かつては（府城にではなく）沿海に居住し、産地に往來して糴糶することになつていたが、多く海運によつて米を運んだ關係じよう起載や攪裝に便利であつた。米を積んだ船は、かならず臺廈の咽喉ともいうべき澎湖を通つて厦門に向かう。風信さえ真ともであれば、大體五六日で着

くことができる。積荷の米は厦門の倉庫に入れられたり、漳・泉二府に改めて仕向けられたりしたものと見える。四年の食糧危機には、一方では西隣りの廣東省潮州の府民が紛々と厦門等の處に赴いて米の買出しを行い、他方では省内各處の人民が泉州府には毎日一萬餘人、漳州府には實に三四萬という風に買出しに赴き、そのため本地の米價がいよいよ貴くなつたと伝えられているが、これなどは當然、接濟用臺灣米の、その後の行方を物語る者でなければならぬからである。

接濟者としての臺灣府は、必ずしも強力有能ではなく、ましてや全能ではなかつた。その證據に、雍正四年の大量接濟ではさつそく臺灣府内での米價の騰貴をきたした。巡台御史の索琳が、臺灣の米價はさきには内地よりも賤やすかつた。さきごろ五月の間に、福建省城および泉・漳等の府の米價が高くなると、いずれも臺灣にむかつて採買辦運をはじめ。結局穀物を貯えこんだ家は居奇觀望ねぢくまうをするようになつて、米價がだんだん高くなつてきたと言ひ、翌年五月總督の高其倬が、臺灣はもともと産米の區であり、去年は八分の作であるのに、臺地の米價はすこぶる貴くて今にな

つても下らない、とこぼしているのがそれである。しかし、ともかく福建省は、この臺灣府があるが故に、多少ともその米穀不足を緩和することができたのである。

七 各省間における米穀の流通

私は前節で、F—A、したがってS—Dの數値の最も低い福建省については、その食糧事情の窮屈さを少しく強調しすぎたかも知れない。

事實、おなじ福建省でも、條件に恵まれたときには決して食糧に急迫してはいない。現に、雍正元年にはまだ米價が平賤で、福州府が每石九錢・一兩不等。興化・泉州・漳州等の府が一兩から一兩一錢まで不等。建寧・延平・邵武・汀州等の府は九錢・一兩不等。臺灣府は八錢・九錢不等にすぎなかつた。⁽¹⁾同年から翌二年にかけては、かえつて浙江省の米不足を救援している有様である(後述)。斗米三錢に近い四年の危機に見舞われたあとでも、たとえば七年正月には、建・延・汀・邵等四府の米價が每石九錢五六分から一兩一錢三四分とまりであつた。⁽²⁾省城・福州の地では、いつも郷試の年になると各府から受験者が雲集してくる。すると米

價がきまつて貴くなる。ところがこの年の秋にかぎつて、いつもの通り大へん平賤であつた。總督の史貽直はこれを、早稻が豐作で民間が家ごとに給し人ごとに足るがためだと理由づけている。⁽³⁾晩稻の採りいれもすんだその年の暮れには、省城および各府州縣における米の市場價格が、實に七八錢から六錢有零不等という有様であつた。⁽⁴⁾さらに總督・郝玉麟が、今歳は械闘・盜劫等の案件が少ないといつて喜んでゐた(一七〇頁)十一年は、收成が往年に比べると豊稔で米價は八錢から一兩不等にすぎなかつた。七年といひ十一年といひ、ともに西隣廣東省の——あるいはも、大豐作の年であつたことは印象的である(一六三頁)。(實は單に廣東省ばかりではなく、中・南シナ一帯が豐作であつたのである)。さすがに隣省ほどの米安には恵まれなかつたが、しかしその程度のことであれば、福建省必ずしも米穀が不足であつたとは言えないと思う。

いや米穀は確かに不足であつた。まずい物より甘い物を食いたいという平均人の欲望を問題とするかぎり、米穀はいかにも不足であつた。ただ福建省では、佃農・貧民は一季でも半年でも二麥を食ひ、番薯で口糊してくらす、と

いう非人間的犠牲の上においてこそあれ、食糧全體の需給の上では、條件さえよければ一おう、自給自足にちかい状態を現出することができたのである。人はいう、村落は切り取られてもそれ自體で生活力を持つ環節動物の一環節に似ていると。古い中國では、單に村落ばかりではない。

最高の行政單位である省分そのものまでもが、ある意味では環節動物の一環節的であつた。あらゆる集合體が、あらゆる個體と同じように、主として自己保存の本能、生きること自體への盲目的な衝動によつて導かれねばならず、またじじつ、導かれていたような當時の政治的社會的環境にあつては、これはまた當然の事態であつたと言ふべきであらう。自足への努力こそ、それらの集合體、いわば農民的な封鎖意識によつてアニメートされた集合體の、生きんがための知慧の現われであつたのである（一五三頁）。

F—Aの數値、したがつてS—Dのその最下の省分をもつてしてすら、その通りであつた。他の省分については思ひ半ばに過ぎるものがある。もちろんこう言つたところで、他のF—A數値の低い省分がみな、福建省より食糧事情が樂だつたというのではない。樂さ窮屈さの程度は似た

り寄つたりだつたかも知れない。ただ少なくとも番薯で數カ月を過ごす必要はなく、細米こすゐにもあれ、米で口に糊することのできる機會が幾分でも増して來たであらうこと、そこにこそ、F—A數値の少しでも高いことの實際的な効果が潜んでいたのである。

このようにして、もし天候などが理想どおり(?)にいき、また人間に食物に對する嗜好的な選擇などと言ふものさえなければ、天下の各省が食糧的にはほとんど自給自足ができて餘ます、税課の現銀は手にはいらぬで困つたかも知れぬが、幸か不幸か天候などの現實は決して理想どおりには行かなかつた。さらに嗜好の點からする「米穀」のみに對する需給のアンバランスはいかんともし難かつたであらう。いな、それらのどの場合をも通じて、（あるいはむしろ越えて）、各省間に存在したであろう米價の値開きは、機敏な商人たちの營利意欲を刺戟せねばならなかつた。雍正十一年夏、浙江省杭州府一帯では米價が每石一兩七八錢を唱えていた。ところが値ごろの安い臺灣の米穀を持つていくと、乍浦港おろして、脚費すなわち運賃を加算しても每石

一兩二錢上下にすぎない。⁽⁵⁾また十二年春、江蘇省の蘇州では、本地産の糙粳米が每石一兩二錢五分の相場であつたのに對し、本地人がその値ごろの故に常食としていた(前文一六七頁)湖廣の白粳米は、やや低めて每石一兩一錢五分にすぎない。⁽⁶⁾ここに見られる利輶はまさしく商人たちのつけ目である。いやしくも事態が自然放任で推移するかぎり、値ごろの平均化を求めて物資の流通が起らねばならない。雍正帝——この天子は、極端者のみを取締つて、中庸者(情と理との中を得たもの)は、あるがままにあらしめるのが政治上の要諦だという、言わば儒家的な考えから、政治的にも經濟的にも大體レッセフェールの見解を持し、とくに退糴の行爲をにくんでいた⁽⁷⁾の時代にも、中・南シナの諸省間における米穀の流通關係が、一方での自給自足的な傾向にもかかわらず、少なくとも一部ではほとんど常態化していたゆえんに外ならない。農民的な封鎖意識に對する、商人的な開放意識の奇妙な兼ねあひがここに見られる。

しかもその流通のコースは、大體一定していた。この事どもを今日もつとも手際よく傳えているのは、雍正四年秋、すなわち浙江省から福建省にかけての一帯が深刻な食糧危

機に見舞われた際、そのころ鎮海將軍の任にあつた何天培が、退糴——食糧自足への本能的な衝動のもつとも政治的『社會的な表現である、米穀持ち出しに對する妨害行爲——の禁を厳しくして民食を裕かにされんことを請うた一摺である。すなわち言う、

ひそかに査するに、天下の米糧は東南各省に産すること多きに居り、平日は客商に藉^{たよ}つて販易流通さる。たまたま荒歉の歲あらば、隣省に資藉^{ききく}するところ倍々緊要たり。たとえば福建の米は臺灣・浙江より取給し、廣東の米は廣西・江西・湖廣より取給し、しこうして江南・浙江の米は皆な江西・湖廣より取給するが如し。この數省の米にして苟しくも阻帶するなく、歲々流通して源々絶えざれば、小民歎取に遇うといえども、尙お乏食に至らざらん。(しかるに地方の豪棍あり、私自に衆に倡えて退糴し、横^{はき}いままに攔阻を行い、客商の米を買うもの、視ること私販に同じく、出境を許さず。また國戸あつて壅積し厚利を希圖す。甚しくは江西・湖廣の米、幾月も下らずして、ついに米價の騰貴するに至るあり。その間不肖の有司、人の箴囑を聴い

て公然と示もて禁ずるあり……⁽⁸⁾。

要するに、湖廣・江西・廣西および臺灣等の諸省府が第一次的な供給者群であり、福建・廣東・江南・浙江等の諸省が第一次的な需要者群である。そしてそれらの二群の間では、とくに不作の年ともなると、盛んに米穀の流通が行われたと言うのである。ほぼこれまで我れわれの検討してきた結果のとおりであつて、四川の三省をその供給者群に加えるならば、さらに間然するところが無いであらう。

各省間の米穀需給を媒介する者は、主としては言うまでもなく商人たちであつた。文獻上、客販・客商・米客などと呼ばれているものがそれである。この場合はもちろん、商人自身があらゆる危険の負擔と、自己の損益計算とにおいて米穀の流通を行う。しかし清代には、これ以外にも事實上米穀がそれによつて流通される他の形式があつた。中央および地方各省による他省に對する米穀の「買い出し」、いわゆる「採買」がそれである。⁽⁹⁾（ある省の米穀を監穀として他の省で捐納させる特殊な捐例も、結局は同じような効果を持つていたわけだが、しばしば有つたと言うのもなく、また豫定どおりに行つたというのでもないから、こ

こでは無視しておく事にしよう）。省外採買、とくに地方各省によるそれは、多くのばあい、合法的に糶賣・散販され、時として非合法的に使いこまれた倉穀・倉米を補充する必要があり、もしくは、天災などで緊急に多量の米穀を入手する必要があるとき、自省内では採買できかねる部分について行われるのが普通であつた。費用は糶賣價銀のほか、各省布政司の庫銀すなわち正項から出ることもあつたし、また例えば鹽課公費銀のような公費⁽¹⁰⁾から出ることもあつた。この目的とこの費用。となると、ルートそのものも一見、普通の客商とは違つていたかのように思われるかも知れぬが、しかし、第一、各省の外省に對する採買の場合は、もちろん官員や胥役たちを派遣することもあつたが、またしばしばこの事務を一般の商人にも委任している。⁽¹¹⁾第二、官員や胥役たちを派遣する場合にも、現地で採買する場合には通例、その地の米行・舖戸の手を通したものとと思われる。湖北按察使・王柔が、常平倉捐穀の例を遍開して米價の調節を圖るべきだと説いた奏摺のなかで、そのようにして、米穀をして必ず半ばは官にあり、半ばは民にあらしめると、鄰省採買の員は必ずしも米穀を市に求めないで、

官に問うだけで済み、市價の高昂する患いが自然に無くなるうと觀測しているようなのが、そのよい例證である。現地の官員があらかじめ捐穀などを官倉に保存し、他省の員役の來省を待つような例もないでは無かつたけれども、その場合にあつてすら、他省員役の採買はおおむね米行・舖戸を相手にしてなされておつた。かれらとても一般民と同様、倉米は市米に比べて倉氣があり、市米の新鮮で、値段もそれほどは違わない事實に目を蔽うわけにはいかなかつたからである。省外採買はもつとも普通には舟運の便の利くところに對してなされたが、その場合の用船も普通の民船が雇用された(二五八頁參照)。結局、各省の採買とはいえ、ルートとしては、一般の民間商業ルートと、何ら異なるところがなかつたのである。

私のこれからの敘述においても、いわゆる客商の興販と各省の採買とを、流通面では一おう、同列に取り扱つておく事にしたいと思う。

(a) 長江筋の米穀流通

さて、雍正期、各省間における米穀の流通には、何天培によるかぎり各種のルートがあり、少なくとも有りうる可

能性があつたわけであるが、そのうちでも最も基本的なものは、常識的にも直ちに思い當られるであろう通り、四川・湖廣(とくに湖南)および江西の三省の米穀を、江蘇・浙江の兩省に流通する長江上下のルートであつた。まず受入れ者側の江浙兩省のことから、できるだけ前節の敘述との重複を避け、各省間の流通面に焦點を合わせながら論述していくことにしよう。

江・浙二省の食糧上の背後地は、もちろん長江中流に限られていたわけではない。江蘇省が、姉妹省である安徽省からは米の(二六六頁)、また河南・山東などの諸省からは豆・麥などの供給を仰ぐことのあつた事は(二七頁)前述のとおりである。浙江省についても李衛は、浙省民間の食米となると、向來には半ばは上江(安徽省)の漕糧運出の地方、ならびに河南・湖廣兩省の客販の接濟に藉つていたと傳えている。にもかかわらず、江浙二省の、少なくとも「米穀」の上での眞の背後地は、長江上中流の諸省、直接にはとくに湖廣・江西の二省であつた。湖廣・江西の米は俱に江南に聚集する。蘇州は地狹く民稠く、豐収でもまた江西・湖廣の米を資にしている。商販は多く江西・湖廣等の處から米を買い、浙

江省に運んできて湊食する。⁽¹³⁾ 浙江省の米糧は、たとえ豊熟の年でも向^{さき}には江西・湖廣等の處の客販の接濟を藉^{たより}りにしていた。⁽²⁶⁾ ……これらが異口同音にその事實を傳えているばかりではなく、江蘇省蘇州・松江等の民間の常食するところに楚秣すなわち湖廣省の秣米のあつたこと（一六七頁）、またその建値が本地の糙粳米（これも常食米の一つ）より安かつたことは前述のとおり（一七五頁）。また雍正五年、食糧危機の直後の福建省のために、浙閩總督・高其倬が鹽課銀五萬兩を動支して江南で採買させようとしたのも、楚米と江米、すなわち湖廣米と江西米とであつた。⁽²¹⁾ 湖廣・江西兩省がいかに有力な、たとえ有力ではないまでも、いかに頼りにされていた背後地であつたかが判るであらう。

江寧省城では、民間のものが多く次熟米や糙米を買食していたという。また別の傳えによると、浙江の客商が湖廣省にきて買い入れる米は俱に熟米であつた。雍正二年の冬、湖廣總督・楊宗仁が命をうけ、布政司庫銀十萬兩で米を買い上げて、風潮害後の江浙の急場を救おうとした場合にも、商賣人の様式に照らして熟米を採辦させた。人民が米を手に入れさえすれば、直ぐにも炊爨できるようにとの配慮から

である。そしてこの時には上熟・次熟など三様の熟米を仕入れて江浙地方に運びこんだという。⁽²²⁾ 要するに穀のままで來ることは餘り無かつたように思われるのである。なお、雍正元年、北省における二麥の凶作に鑑みた雍正帝は、科臣の陳世倅らを南省に派遣して米石を採買させることにした。⁽²³⁾ この趣意を誤解する地方官のうちには、欽差の採買に備えて商販を禁止し、出境するのを許さないものも現われてきた。これに對して雍正帝は、とくに諭を下して、浙江省と江南省の蘇・松等の府は、豐年の年でさえ食を湖廣・江西等の處に仰いでいた。湖廣・江西・安慶（安徽省）等の處の米船をして直ぐに蘇州に行かせ、蘇州の米船をまつすぐに浙江に行かせるようにせよ。阻撓してはいけなと言っている。⁽²⁴⁾ たまたま、湖廣・江西・安徽等の諸省の米が、どこを大集散地として江浙地方に行き渡つたかを暗示するものと言ふことができよう。

江西省や湖廣省は、では、事實有力な、頼りになる米穀の供給者であつたであらうか。

豐作と凶作とは大分事情は違ふけれども、概していうに、それほど頼りになる供給者ではなかつた。底は浅い。

雍正二年のこと、江西省は豊作であつた。ところが江南・浙江兩省の例の風潮害で搬運者が多かつたため、省内の米價はなかなか下らなかつた。^(四)浙閩地方の食糧危機のあとを受けた雍正五年春のことである。江西省ではこれまで、米價は俱に五錢五六分から六錢一二分で、たとえ貴くともまた七錢止まりに過ぎなかつた。ところがこの時は隣省——浙江・福建・江南の諸省が搬出しすぎたので、九錢・一兩から一兩有餘の價格さえ現われ、民人は口々に昂貴の極だというに至つた。三省からは採買官員がくる。そして彼らがいよいよ數萬石の米を積荷して船出しようとする、人はみな河岸に向けて立ち上つて米船の出境を拒んだという。^(四)ついにその翌年の不作にあつては、かえつて安徽省に赴いて米石を採買し、もつて平價糶賣の用に備えざるを得なくなつたのである。^(四)

江西省に比べると、湖廣省——北南兩湖の米穀が湖北省の漢口に集められたことは前述のところ(二五九頁)——とくに湖南省はさすがに増しであつたように思えるが、それでもなお、底の淺さは蔽うべくもなかつた。あの楊宗仁は、中央からの米穀の採買をうけた湖廣省についてこう言つてい

る。楚省は地方遼濶で戸口滋繁し、しかも恒産には限りあり、民の食糧事情が艱しい(民食維艱)。まゝ殷實の家があつても、亦た僅かに、自から温飽する程度にすぎない。^(四)ここにはかなり、政治的な掛け引きの色合いが濃厚である。また楚省といつても、直接には湖北省が念頭に置かれていたのかも知れない。當時、湖廣の穀價は每石四五錢不等といつたところ。それでいて「民食維艱」は大層だけれども、しかし同じころ、湖南巡撫の魏廷珍がやはり次のような發言をしている。數量的により限定された發言である。すなわち言う、もし當地の稻米に八九分から十分の豐収があれば、十萬石を採買されても辦じ易きに屬する。しかしもし、収成が八九分に足らなければ停止した方が好さそうであると。^(四)彼のこの弱氣を事實で裏書するかのように、江西省が「昂貴の極」の米價に悩んでいたのと同じ雍正五年の夏には、湖廣省でも市賣の米價が一向に下ろうとしなかつた。(そのとき湖南省では、中米で每石八九錢から一兩二錢不等にいたり、上米は一兩三四分から一兩四錢不等まで、湖北省ではそれよりもやや高目であつた)。しかもそれは、江西・廣西・江南等の省から採買・販運するものが多かつ

たためだと伝えられている⁸⁰。要するに底の浅さを物語るものであろう。ついで、前年の自省の不作と江蘇省の豊作をうけた雍正八年には、逆縁ながら江南の米を運びこんで荆南地方を救済する羽目に立ちいたつた。この事實を伝える雲貴總督・鄂爾泰は湖廣熟すれば天下足るといわれたその湖廣の熟も、これではどうやら恃みきりにするわけにも行かないと嘆じている。尤もなことである。それにしても、供給省分としての江西省や廣西省やが、五年の場合には所を變えて需要省分として振るまつているのは印象的な事實である。それぞれ、江浙地方や廣東省やに對する飢饉移出でできた空隙の穴埋めのために外なるまい。

湖廣・江西二省の米穀供給者としての底の浅さ——それをとともかくもバックアップしていたものは、雍正前期におけるF-A 數値最高の四川省であつた。

(b) 重慶と漢口との間(上)

この事實を今日、もつとも簡單かつ明瞭に示しているのは恐らく雍正帝が、二年秋の江浙の風潮害の救援措置に關連して、

朕は知る、江浙の糧米は歷來給を湖廣に仰ぎ、湖廣は

また給を四川に仰げるを。従前商販はなはだ多きに因り、地方の有司^{かるふる}輒しく阻遏を行へり。今や四川の秋成、豐稔なり。……爾(王景灝)まさに沿途の文武官辨に諭し、江西(江浙?)・湖廣の商人の四川に赴いて米を販^かい、四川の商人の江西(?)・湖廣に往いて米を賣るものあるに遇わば、立即ちに放行して留難・阻遏するを得ざらしめよ。聞くならく、年羹堯は當日つねにかつてこの善政を舉行せりと⁸¹。

と言うものであろう。これに應えた王景灝も、ほぼ同様のことを繰りかえしている⁸²。その前年、同じく雍正帝が湖廣總督の遏糶方針をなじり、楚地のごときは本と產米の郷で、素より東南(江浙)の仰給するところであつた。それをお前が米の出境を禁じたため、四川米もまた湖廣省にやつて來ず、隣省の糧價が昂くなつたばかりでなく、本省のそれもだんだん昂くなつて來るようになったと言つている⁸³。ついで雍正五年、浙江巡撫として本地の食糧危機の切りぬけに大童となつていた李衛の言葉のうちにも、浙江省ではこれまで江楚、すなわち江西・湖廣等の省の米を藉^{たよ}りにしていたが、かの地にはもともと、四川省から販來したものがあつた。

今はすでに自から往つて購買するのだからには、江楚の客商が販い出してきた四川米は、また江楚に留めて濟用すればよいとある。⁸⁰五月九月の上諭の中にも、湖廣等の數省は向來四川省の米石を買運していたのだと見える。⁸¹同じころ赴任の途中で湖廣省を經過した雲南巡撫の朱綱は、荊・襄から常德にかけて米價を尋ねてみたところ、人々は皆「四川省が大豐作で川米がすでに湖廣省に下つて來たため、現在湖北の荊・襄の米價は每石八九錢不等で、湖南の常德府では一そう安い」といつたと傳えている。⁸²少なくとも雍正前期にあつては、四川省が、湖廣・江西等の諸省に對する後援者としての地位を確保しつづけていた事を確かめることがでさう。

米穀のこのような流通關係において、第一次的な利益を享受していたもの——それはおそらく、四川省民や湖南省民だといふよりは、むしろ、供給を四川と湖南とに仰ぎ、ために商販が駢集していたといわれる湖北省の武漢地方（前文一五九頁）、とくに大集散市場としての漢口鎮の商人たちであつたであろう。李衛によると、漢口地方が向來米を聚めることの最も多かつたのは、みな、四川省が地味の饒かな

ところに人口が少なく、産米が有り餘つて本地では穀價がひどく賤い。⁸³ために四川の民はそれを出賣して納税や生計費のたしにしようとする。⁸⁴しかも四川省から湖廣省には水路によつて輸送することが甚だ容易だからだといふ。⁸⁵その通りであつたに違ひない。四川省の門戸である夔關では、いざ秋收の後ともなると、毎日毎日、十餘隻から二十隻ぐらゐの大小の米船が相ついで湖廣に向かうのが見られた。⁸⁶これに相應する湖廣省側の荊州府鈔關は、さきには四川省に通達する外江の沙市に設けられて、川楚の商販の出入を稽查し、上にしては彝陵、下にしては郝穴に關口を設けていた。⁸⁷各省商販の貨物は、一たび漢口等の處につくと、必ず「牙行」の厄介になる。⁸⁸米穀の場合も同様である。米牙行の手をくぐつた米穀はさらに下流地方に送られていく。雍正十年の記録によると、漢口地方では、前年の十一月からその年の二月初旬までの僅々三カ月餘に、外販の米船がすでに四百餘艘もあり、そのほか鹽商の巨艘で米穀を裝運するものも數え切れぬぐらいであつた。⁸⁹商況の活潑さを感じ見るべきであらう。

もちろん良い事ばかりではない。武漢とくに漢口の人々

は、一方では何といつても四川米・湖南米によつて命の綱を制せられてはいた。例えば、五年の端境期のことだ。湖南の商米はほとんど來ない。川江（長江上流）も水かさが増して米船が峽を下ることができない。とうとう五六月の間には、武漢では每石一兩七八錢の高値を呼ぶにいたり、民間では米の買い入れようがなくて困り果てるに至つたという。

しかもその反面、米穀の仲繼ぎ利得による漢口地方の潤おいは莫大なものであつたと見られる。我れわれはこの事實の最もよい證明を、たまたま、雍正四年に始まる浙江省當局の四川米採買のうちに認めることができる。

當時浙江省は、浙閩總督・高其倬のもとに福建省と同じ長官の統治下にあつた。當然同省は、おりから食糧危機に襲われていた福建省と、その苦痛を分かち合ねばならなかつた。浙江巡撫・李衛の同年五月の奏摺を見ると、そのころ福建省では、官員を派遣して浙江省の温州等の處で米を採買させている。そのときの殊批には、浙江省の米穀で鄰封を分濟するとは、これまでは減多に耳にしたことのない事だである。よほど珍らしい現象だつたのであろう。翌五年にも福建省は、鹽課銀二萬四千兩を動用して温州の米一萬三

千餘石と穀一萬六千餘石とを買い集めた。四年度の福建省の來購について、表向きは浙地に礙げなしといつていた李衛も、内心、自省の米穀不足に氣がかりだつたのであろう。四年六月一日の奏摺では、もし浙江省の頼りとする江西・湖廣の二省が豐作なら、次ぎつぎと福建省を接濟することもできよう。しかしもし二省の米が少なくなると、浙江省では糧食不足が案じられ、有り餘つたもので福建省を協濟できるところの話でない、といつて、ここで始めて四川省への直接採買を建議して許可されたのである。その方法は、有能な官員に現銀——それも良質の好銀十萬兩を持たせ、七八月内に出發し四川地方に赴いて米を買わせる。その地の地方官に價格を稽察させ、沿途で船隻を催運しさえすれば、十月冬取の時には買い齊えられ、年の内には陸續と浙江省に運到できると言うのである。翌年閏三月の報告によると、浙江省に着いた第一回目の現物は、途中での目減り・損失分をのぞいて都合十萬五千三百餘石。諸經費や損失分を差し引いても、每石あたり約銀九錢五分で、これを客商たちが浙江省に來販する米に比べると、每石すでに賤きこと四五錢不等であつた。實に五割安なのである。李

衛が四川直接採賣の効果を謳つて、湖廣・江西兩處の民人が、江浙二省の搬運でかの地の米價が高くなるのだなどと藉口する——要するに、その搬運を理由に勝手に米價を釣り上げるのを壓えることができる、と言つてゐる事とともに、湖廣・江西の兩省、とくに前者の商人（別して漢口商人）の、米穀貿易における中間搾取がいかに激しかつたかを雄辯に物語るものであらう。

浙江省の川米採買はその後もつづいた。第二回目（雍正五年）には前年の倍額の二十萬兩で大々的に舉行しようとした。いま大金を支出しても、やがて四川人民の錢糧として納付されるわけだから、國庫の収支勘定には變りはない。それでいて、緩急に儲備あるを得るならこれに越したことはない。この李衛の考えは、⁵⁰いかにも中國官僚らしい知慧ではええましいが、しかし雍正帝はその成功を危ぶみ、その規模の縮少を命じた。結局二萬石程度を四川省で買ひ、他にいくらかを江西等の省で採買しようという事になつた。⁵⁰これさえ江西省の方は米價高で駄目になつたが、李衛はその後も第三回目以下を決行してゐる。

(c) 重慶と漢口との間（下）

しかもこの浙江省の川米採買は、他の二三の事情と組み合わせつて、今度はたまたま、四川省のもつ米穀供給者としての底の淺さを暴露させる結果となつた。まず、六年正月における巡撫・憲德の慫慂に耳を傾けることにしよう。彼はいう。

上年（五年）は川省の收成すこぶる豐足と稱す。商賈絡繹として買運者 數計すべからざるに因つて、もつて秋冬の間、米價ようやく長ずるを致せり。……入冬以來、重慶・夔州の二府、米價はなほだこれ騰貴せり。……十二月間において重慶鎮臣・任國榮の稱うを據けたるに、……今 川省の米石、外省の人の販運はなほだ多し。もし急いで籌酌をなさざれば必ず兵民俱に艱窘を受けん等の語あり。臣……萬やむを得ずして、十二月において、行して該地方官をして暫らく（糴販を）禁止するを行わしめたり。⁵⁴

いわゆる遏糴を令したのである。雍正帝もさすがに、一時的な遏糴ならこのさい止むを得ないとの態度をとつた。⁵⁴そのころ布政使の任にあつた管承澤は、當時の情勢についてより立ち入つた記録を残してゐる。⁵⁵彼によると、秋成の時

には米價が非常に賤やすかつたが、冬十二月内には、遵義・重慶・夔州・保寧等の諸府で米價が騰貴し、每石一兩七八錢から二兩以外(上)にまでのぼつた。遵義府の場合は、福建・廣東・湖廣および貴州の四省の人民の、四川に流入したものが経過買食したためである。重慶府の場合は、四川省内きつての物資の大集散地(川省總匯)——ちなみに、李衛の第一回目の採買米穀約十萬石は、十一月十五日から十二月初五日までの二十日間で、重慶府の一カ處で買足されている——のこゝとして商販が雲集したためである。夔州・保寧の二府などの場合は、産米のある地方がみな噂を聞いて利益を追い、裝して重慶にやつてきて就賣したため、もともと米を産しない地方なので、米を得るに従よしくなつた結果に外ならないという。管布政使はさらに言葉を續けてこう言つてゐる。浙江省から官員に委任して諭旨のとおりに買上げるはずの二萬石も、湖廣省が銀三萬兩でできるだけ買ひ入れたいという米も、市價が騰貴したため今だに買ひ取りが濟んでいないと。浙江省等の採買で直接米價が釣り上げられたのではなかつたとしても、それが四川省の米穀事情を窮地に追いこむ、重要な素因の一つであつたことは

否みようがあるまい。

雍正五年末の四川省の暹羅は幸い一時的ですみ、六年には浙江省からの第三回目の採買が行われた。しかし四川省の食糧事情はおいおい深刻の度を加える。とくに六・七年、西藏に對する進兵、雲南省の烏蠻・米貼祿氏に對する征討が始まる。軍需の糧秣が四川省にも負擔させられるようになって來ると、いよいよ急迫の兆候を現わしてきた。同じころ田地の清丈が行われて、隱田・匿糧をする餘地が著しく少なくなつた事も大分ひびいて來たことであらう。ついに雍正九年にいたつて四川巡撫の憲德は、川省の米價がすこぶる昂まり、また各路で軍糈を碾辦するため米を需めることが甚だ殷さかんだから、という事を理由にして、暫時のあいだ、商販らの湖廣省——要するに漢口地方に往くのを禁止されたいことを奏請して裁可するところとなつた。

しかもこの度の暹羅は、その「暫時」がするすゝになつて九一年以上も續いた。暹羅とはいへ、憲德自身の後からの辯明によると、大艘の夥販、つまり大資本を擁する米商連の商行爲と漏税不法の徒を禁じただけの話で、雲南・湖廣の二省から採買の官員が來たときには、各地方官に手配

して心おきなく採買させるようにしたし、米石を販運する小商人にも元どおり往來を許していたのだともいう。だがその程度の過糶をもつてしてすら、こんどは再轉してもう一度、江浙地方への米穀の供給者としての湖廣省が、少なくとも四川省というバックアップ者を缺く單獨の場合には、いかに頼りないものであつたかと言うことへの恰好の證明者となることができた。社會科學の場合は、自然科學のそれとは違つて、もし何々が無かつたならばという、その否定的な環境條件を、人爲的に作り出すことはほとんど不可能である。不可能ではないまでも非常に困難である。今の過糶の場合は、たまたま、その非常に困難な條件を人爲的に作り出してくれたようなものであつて、その結果はこれを、自然科學上における貴重な實驗データにも比較することができよう。

その實驗データを今日に傳へることの最も詳しいものの一つは、當時湖廣總督の任にあつた邁柱の奏摺である。また十年二月の奏摺では、湖廣省では、北南ともに連年豐作で米糧の價格は平當である。ただ鄰省への搬運が甚だ多いが、これは富商・大戸・牟利の徒が任意に私販して廣く

囤積をするためで、この結果、毎年三・四月の間には、湖廣では販出多きために價格が上り、鄰省では囤積のために更らに値ごろが昂まる。……といつて彼は、漢口地方へくる外販の米船の盛況を述べる(前文一八一頁)。……目下湖廣省では米價が漸騰の氣配をみせているが、もし端境期にでもなると、暴騰を來たすであろうことは必定だといつて、不吉な豫想を下している。當時湖廣省では、常平倉儲を充實させるために、貢生・監生の資格を代償として米穀を(この場合は)現物で納めさせる、いわゆる捐貢監事例が進行中であつた。他省と同様不成績ではあつたが、ともかくこれは米價にとつては上げ材料の一つである。十年秋の豐收で一息ついたらしい邁柱も、同年冬十二月には、また次の端境期のことを案じながらこう言つてゐる。

北南兩湖は連年豐熟、本年收穫の時には米價はなほだ平にして、每石七錢上下なりき。目今 日に漸く増加して每石一兩内外なり。……四川の米穀は販出を禁じて湖廣に到るを得ず。江浙等の省に搬運すること甚だ多く、また兼ねて本省の(貢監生の)捐を収むるに、本色の穀石をもつて上倉せしむるに縁なり。

果然、四川省の遏糶も應えていたのである。

この場合の遏柱自身は、四川省にならつて湖廣米を遏糶する、その輸出を禁止するという權道をできるだけ避け、捐納事例を翌年の出來秋まで暫停することでこの急場を切り抜ける考であつた。⁶⁰しかしそれだけでは事が濟まなかつた。同じころ湖南巡撫であつた趙弘恩は、その十二月の、日附けでいえば十數日も早くに、今歲、湖南省の各屬はともに収成があり、米價が非常に平當であつた。ところが江蘇へ米穀を商販するものが多すぎたため（さすが米とこの中心地である）長沙でも、米價がにわかに昇つて九錢から一兩不等になつた。そこで自分は揭示を出すとともに、督臣（遇柱）と湖北巡撫（王士俊）とに咨商して、暫らく江蘇販運の役を止めることにした。そこで米價はまた漸く減じてきた。同時に江蘇巡撫（喬世臣）の方にも咨文を出し、もし米穀を需めて官員を湖廣省に派遣するのであつたら、當方にある官倉の米穀を支出して售濟しようと言つてやつたと述べている。⁶¹これでは明らかに遏糶に踏み切つていたわけである。遏糶によつて米價が少し下ると、趙弘恩は、百石以内の小口ものは販運を許すとともに、督臣を経て通飭し、

捐監の穀石を停収したという。⁶²いくらか遏柱の報告と食い違ふところもあるが、ともかくこれらに依つても我々は、四川遏糶の湖廣省に及ぼした影響に只ならぬもののあつた事實——言葉を換えていえば、湖廣省の米穀供給地としての、底の浅さ（浅いとか深いとかいつても、もともと、各省分の經濟力・購買力のいかんによつて多少とも變つてくる相對的なものだが）を確かめることができよう。

四川遏糶のより直接的な——直接ではないまでも、より深刻な被害者は江蘇・浙江兩省、および江蘇を仲繼地として長江貿易ルートを頼りにしていた福建省などであつた。雍正帝としてもこれらの諸省の米價高を見過ごすわけにはいかない。一方では漕米の截留——北方に送るべき漕運米穀を途中で振りかえ留用することで事態の緩和を圖りながらも、他方では、四川遏糶に對して禁止の斷を下さざるを得なかつたゆえんである。十一年正月五日の上諭にいう、

四川省は産米の郷にして、歴來 商賈の販運し、長江より下つて以つて鄰省の用を濟す^{すく}を聽せり^{ゆゑ}。雍正九年、巡撫憲德……奏して暫らく商販の湖廣省に赴くを禁ぜんことを請えるも、これ一時權宜の計に過ぎざりしもの

み。雍正十年、四川省の收成豊稔、米價平減なるに至つては、憲徳たるもの、ただちに當に禁を開かんことを奏請すべかりしなり。しかるに今に至つてなおまた前に照らして禁遏し、もつて米穀の流通する能わず、湖廣省は四川米の益を得ざるを致せり。これ憲徳は、ただ己あるを知つて人あるを知らざるなり。……いわんや目今、江蘇・浙江には、米を需むるの州縣の湖廣省に濟すくいを望むものあり、しかも該撫（憲徳）四川米をして湖廣に赴かざらしむれば、鄰省（江蘇・浙江）は何の資藉するところぞ。即ち憲徳に傳諭して速かに米禁を弛め遏糴の戒を蹈むことなからしめよ。⁶³

鶴の一聲で四川省の米禁が弛むと、それに應じて湖南省でも禁令を弛め、江蘇省むけであらうと湖北省むけであらうとに論なく、千・百石内外のものは槩して販運を許すことにした。⁶⁴ やがて漢口地方には四川米が橋を連ねてくるようになり、そこで湖廣省の米價も平減し、江蘇・浙江の客商の搬運するものも甚だ多くなつた。⁶⁵ 事態はほぼ平常に復した。貴重な實驗は終つたのである。

(d) 漢口と蘇州との間

それにしても、四川省によつてバックアップされた湖廣省はまことに天下の大穀倉であつた。このことは、四川・遏糴開禁後一二年の實況が最も端的にこれを物語つている前にも、數量的にその盛大な穀倉ぶりを物語る文獻が出なかつたわけではない。例えば、あたかも四川の遏糴中である九年冬から十年春にかけての三カ月餘に、漢口に來る外販の米船が四百餘號もあつたと言うのがそれである二八頁。當時漕船は大體六百石から八百石積みであつた。商船の場合もそうだつたとして、平均七百石とすると、四百餘號では大體三十萬石程度である。少ないとは言えぬが、しかし、そのまゝ年に見積つても、百數十萬石を出でない。長江通いの商船は倍量は積んだとしても三百萬石には足りない。ところが十二年五月、邁柱は報告して、江蘇・浙江兩省からの官糴と商販とで四百餘萬石の多きを搬運したが、二麥が登場したので米價は平減だと言ひ、⁶⁶ ついで七月には、江浙の商販はすでに米五百萬餘石を運んだけれども、目下のところ湖廣省の米價はなお均平な方だ、⁶⁷ と餘裕のあるところを示している。年間では一體どのくらいを搬出したと言うのであろうか。⁶⁸ 大量の米穀の搬運は當然、江浙兩省の食糧

事情を緩和した。四川の解禁直後の十一年四月に、江蘇巡撫の喬世臣が、目下客米の毎日蘇州への門戶滸墅關を過ぎるものが非常に多いとか、蘇州・松江等の府では、民間常食の糙粳・楚秈等の類が、春は毎石一兩四五錢不等であつたが、今はかえつて一兩三四錢に過ぎないとか言つてゐるのがそれである。

年半ばで四五百萬石もの米―穀ではない米が長江を下る。これが年々の暹羅期以外の常態であつたかどうかは少しく疑わしい。あるいはこの年（雍正十二年）の特異な現象であつたかも知れぬが、しかし、廣西一省だけの廣東省への移出米が時に年間一二百萬石に達してゐた事實（一九三頁）から考えると、それが常態だつたという事も全然あり得なかつたわけではない。いずれにせよ、四川・湖廣兩省分のほか江西省の分まで加えると、常時、年平均五百萬石内外はおろか、七八百萬石、いな、千萬石以上もの米が東南區域に動いてゐた事はほとんど明瞭である。四川・湖廣（および江西）の諸省はやはり偉大な穀倉地帯であつたのである。

この偉大な穀倉地帯からの米穀の供給を受けて、湖北省の漢口鎮が長江上流地區で演じたような役割り——大集散

者、したがつて、最も割りのよい、中間搾取者としての役割りを長江下流地區で演じたものは蘇州であつた。蘇州の米行・牙行の商人たちであつた。いずれも前に出てきた、湖廣・江西・安慶（安徽）等の處の米船をして直ぐに蘇州に行かせよという雍正帝の言葉（一七八頁、雍正元年）、客米の毎日滸墅關を過ぎるもの、つまり蘇州に向かうものが非常に多いという喬世臣の報告（上段、十一年）などが皆その證據である。江南は本地の産するところが既に饒かなのに、湖廣の米の日々蘇州にくるものも數えきれないという毛文銓の報告や、後出の高其倬の言葉（次頁）にいたつては、その何よりの明證であらう。蘇州における天下の「堂島」は、南京聚寶門（中華門）外の兩湖碼頭財神廟内の碑文に、嘉慶十九年（一八一四）三楚會館の董事らが、湖廣米の賣渡し規定を蘇省楓鎮の例に照らして改定し、これを南門外河下の米行・牙行・商賈諸色人らに告示してその遵守かたを求めたと言われる場合の「楓鎮」であつた。この地に巢食う商人たちにとつては、儲けが總てであつた。儲けのためには何一つとしてやつてやれない事はない（一九一頁参照）。「齊行」と稱する米價の釣り上げなどは、その最も得意とするところ

ろであつたと見られる。風が吹けば旱兆だといひ、雨が降れば水徴だとデマを飛ばす。一日中にぐんぐん値が上る。

一度値が上ると、どの店もそうする。これがいわゆる齊行であつたが、江寧(南京)省城について、米糧雜貨の行販人らが動もすると直ちに収費歛錢、單を傳えて齊行し、市價を高擡させたと傳えられている以上、蘇州においても同様であつたとみて良い。規模はむしろ蘇州の方が大きかつたであろう。私はかつて當舖の商業銀行化、すなわち商品としての絲や米の典質が、浙江省乃至はそれに近い江蘇省南部では乾隆以前から普通に行われていたらしいことを指摘しておいた。まだ後年のような本格的な空盤、いわゆる買空賣空の空相場は立たなかつたかも知れぬが、しかし相當投機にちかい。しかも米での投機相場の最大の中心地は、恐らくこの蘇州楓鎮、すなわち楓橋鎮(市)であつたと思われるのである。

(e) 蘇州と浙閩との間

蘇州に集荷されたいわゆる川米・江楚米は、その一部はもちろんその地の人々、廣くは江蘇省の人々の消費にあてられた。楚秈米などといわれたものがそれである(一六七頁)。

しかしその大部分は、さらに他の諸方面に廻送されていたものと思われる。その第一は浙江省方面だが、これについてはあの、蘇州の米船は、直ぐに浙江省に行かせて阻撓してはいけなひと言ひ、雍正帝の言葉を思い出してさえもらえば、他に格別立ち入つた説明を必要としないであろう。その第二は、福建省方面であつた。福建客商の省外に出て貿易するものは、各省に馬頭をもつのが普通であつたが、そのうちでも、蘇州の南濠一帯は(福建)客商の聚集するものが尤も多く、しかも、昔からそうであつたのだと言われている。南濠は楓鎮の近くである。結局その事實は、蘇州が昔から、米穀その他の大集散地であつたことへの一つの例證に外ならない。さて蘇州の米を乍浦から海運する場合、北から吹く季節風を利用すれば、簡単に福建省につけたことは言うまでもなく、雍正四年、福建省の食糧危機の對策に腐心していた浙閩總督・高其倬のごときも、もし江西の穀を大船に積みこみ、長江を利して鎮江にくる、(運河によつて)また蘇州一帯にいたり、(さらに)海船をもつて福建の福・興・泉・漳四府にいく分には、秋間北風の起るときなら半月で到着できると計算していた。事實、その年の翌

五年には、（この場合はかなり遅目のようだが）春から夏にかけて、官員を前後二度、福建省から蘇州に派遣して米一萬一千餘石と麥九千石を買わせ、またその間商販たちが六度も蘇州に来て、二萬餘石の米——米の場合とともに、いわゆる「江西・湖廣より來蘇の米」を仕入れているのである。

重慶 \updownarrow 漢口 \updownarrow 蘇州を結ぶ米穀移動の長江ルートは、ここに至つて、波濤をしのぎながら南シナにまで延長される事になつたのである。但しこれは北風の吹く間だけのこと。南風の時に値うと福建省は、陸路、江西省にすぐりつく以外にほとんど手はなかつた。

福建省方面を第二とすると、さらに第三・第四の川米・江楚米の廻送先があつたように思われる。第三は北シナ諸省への仕向けである。『雍正大清會典』卷四十、戸部十八、漕運一、紅白兼收の項をみると、順治から雍正にかけて、江南各地に課せられていた漕米の米質は、原則としては紅米であつた。天災などで紅米が足らねば紅白米の兼收を許し、さらに足らねば秈米・粳米の湊兌を許している。問題はその秈米だが、康熙九年九月の戸部の議覆の一節には、そのことに關連して、南米漕糧にもし「本地の米」が足らなけ

れば「秈米」を以つて兌抵するがよいとあり、同じく十一年十一月の戸部の議覆の一節には、浙江巡撫が、被災の各州縣の應徴の米石は、すでに常年の米色どおりに全部を納めることはできず、「江楚の秈米」を以つて交兌せしめられたいと請うているからには、その米色を分かつたず、秈米で兌運することを准してよいはずだとある。果然、秈米とは本地の産でない江西・湖廣からの輸入米であつたのである。悪く勘ぐるなら、輸入米のかなり大きな部分が、初めから漕米へのすり變え用であつたと見られぬこともない。良質の江蘇米を少しでも多く地許の消費に残そうがためである。たとえそうまで勘ぐる必要はなかつたとしても、土宜として許されていた毎船百石以上の船員持參米のうちには少なからぬ江楚米（また川米）が含まれ、そしてそれが、北シナの各地に散布されたと見ても誤りはないであらう。

第三まではまだしも合法的な回送先であつたが、第四は明らかに非合法的なそれである。雍正四年、福建省の食糧危機に際して清朝が在來の米穀出洋の禁を弛め、臺灣から内地への輸入に限つてこれを公認するようになったことは前述のとおりである（一七二頁）。しかしその後も清朝は、中・

南シナのその他の方面については嚴重に米禁を勵行した。海島・海洋を舞臺とする反清運動者・海賊などへの接濟を恐れたからである。しかもこの需要口こそ、蘇州楓鎮等の處の姦牙たち、とくに米價安の場合の彼らの願つてもない抜け穴であつた。そうした場合、彼らは大膽にも監視の目をくぐつて米糧を持ち出し、これを海洋で賣りさばいた。そのため蘇郡沿海の州縣では民食がつねに缺少のおそれあり、内地の各屬でさえ、ために米價が高騰したというから量的にも相當な持ち出しであつたのであらう。前年秋の豐年を受けた雍正十三年正月にも、江南總督の趙弘恩は、米糧が賤^{やす}すぎるために、姦商・地棍・牙行らが動もすれば、「故智」を萌^もさんことを恐れ、米糧聚集の地について嚴重な警戒態勢を固めている。これまたその出洋販賣の規模の大きさを物語るものに外ならない。

海運を通して長江米穀ルートに連なる福建省は、繰り返えずまでもなくF—A數値の最低の省分であつた。條件に恵まれた場合は、二麥・番薯の收穫をかりてはほとんど自足に近い状態になり、それどころか、江浙の風潮害のあとを受けた雍正元年二年の間には、浙江省の寧波・象山・定

海・台州・温州および紹興等の諸府に何度かに分けて救援米を送つてゐる。また廣東省が氣候不順で播いた穀種が發芽せず、潮州府屬や南澳地方では米價が每石二兩八九錢から三兩不等にもなり、その年も亦た不作で、翌年にはついに、(デマであろうが)五兩有餘にもなつたと傳聞された雍正四・五年の間には、かえつて福建省の泉州・漳州・廈門などに向けて潮州商人の買い出し船が跡を絶たなかつた。しかしそれ以外の場合は、福建省はやはり米穀需要者的な性格のつよい省分であつた。その供給者は、主としては前述のとおり江蘇省であるか、でなければ江西省であつた。雍正四年夏のごとき、江西省の贛州府地方——福建・廣東兩省に界連するこの地方では、福建省汀州府の飢民が永定縣で穀船や行戸の糧食を搶奪したという噂は傳わつてくる。外省民の米の買い出しが多くて、價格が每石一兩四五錢にも釣り上るといふ有様。江西省民はこれに恐れをなし、ついに米穀の買い入れとその省外搬出を妨害するの舉に出た。この遏糴行爲は、直ちに雍正帝に差し止められた。そこで福建・廣東二省の商販の贛州・吉安・建昌等の三府に赴くもの引きも切らず、ためにその秋にもまた米價の値上りを來

たし、一時は每石一兩一二錢から一兩三四錢不等にいたつたという。⁸³江蘇・江西兩省のほか、まれには廣東省もが福建省の接濟に當つた。潮州について、この地の産米をあてに、毎年福建省の漳州から告糴するものと傳えられて居たのがそれである(二六五頁)。作柄次第で、去年の需要者が今年は供給者に、今年の供給者が來年は需要者になるかも知れない際とい實狀を思いやることができよう。

(f) 廣西と廣東との間

最後に廣東省であるが、この省分中とくに省城を含む廣州・惠州・潮州および肇慶の四府は、よほどの豐作の年でもない限り、やはり外省からの輸入米の接濟に頼ることが多かつた。本省では産するところの食が民食に足りない。毎に廣西・湖南よりの販運を藉りて接濟すると言われているように、⁸⁴廣西・湖南の二省が多かつたけれども、中でも主役を果たしていたものは、言うまでもなく西鄰りの廣西省であつた。西江の水運を利用できただけに、廣州省城などにとつては、同じ廣東省内の米どころ、高州・雷州・廉州などに海船を仕立てて出かけるよりは遙かに手輕であつた。雍正四年のこと、この年廣西省では倉穀を買補する

ことになつてゐた。商販はその噂を聞いて賣買行に二の足を踏む。そこでその春、廣・惠・潮・肇の四府では米價が次第に昂まつてきた。とくに廣州省城は、商販が三四日來なければ直ぐにも市價の騰貴するところ、二月には西販が來ないので省城の米價は日に増しておつた。⁸⁵三月二十八九等の日には商船の來方が非常に少なく、米價はにわかに上つて一兩八九錢から二兩にまでなる。人人は巡撫が安い官價で強制的に買上げて平糴しようとするから穀船が來ないのだといつて盛んに騒ぎ立てる。⁸⁶しかもある程度まで米價が高まると、いわゆる西販の營利意欲が刺戟される。中でも廣東省に接近した梧州府・潯州府地方には商販の搬運が相つき、四五月ごろにはかえつてそれらの地方の米價を釣り上げるにいたつた。⁸⁷二・三月間には倉斗每石七錢だつたものが、今や梧州では倍にはね上つて、一兩四錢の高値を唱える。たまりかねた窮民は、穀船を攔阻するの舉にでることになつた。⁸⁸この情勢は翌五年にも持ち越された。去歲(四年)の收成は歉薄という譯でもなかつたのに、⁸⁹廣東省の搬運者が多いために米價が騰貴したのである。⁹⁰潯州・梧州等の府では每倉石一兩二・三錢にまで上り、雍正帝をして、

これまで聞いたことのない高値だと慨歎させる⁹⁰。廣西省が湖廣省に採買の官員を出したのもこの年のことであつた⁹⁰（一七九頁）。さらに雍正十年の夏にも、廣東省の潮州・碣石等の處から來西販運するものが多かつたため、江岸の町では穀價がやや長じかけた事が伝えられている⁹⁰。

いずれにせよ、廣西省の米穀供給者としてもつ底も、決して深いという程のものではなかつたのである。ただその底の浅さを以つてしてすら、廣西省は、次のような證言を總督・鄂爾泰にさせる分には事かかなかつた。すなわち、たとえば廣東の一省ともなると、末業に務めて農作を賤しむものが多い。だから食を仰いで販賣するものが衆く、たとえ豐收でも西省（廣西省）から乞糶^{かいはね}することなおよ一二百萬石を下らない。これでは、西省の饑餘は實に東省の缺乏を資^{すけ}けるためだけのものだ⁹⁰。「たとえ豐收でも」はやや怪しく、また時には飢饉移出に終つたにもせよ、ともかく廣西省は、年額一二百萬石もの米を廣東省に供給したこともあつたのである。供給省分としての貫祿であらう。

* * *

雍正期における米穀の動きを大觀すると、當然といへば當然のことだが、F—A數値、したがつてS—D數値の高い省分から低い省分に向かつて、値ごろのある程度までの平均化を求めながら、執ように流通していたことが判る。餘り好い例ではないが、雍正四年四月に巡撫として貴州に着任した何世基は、揚州から起程してから沿途で訪聞した米價だとして、江蘇省では每石一兩一二錢、浙江省では一兩二錢、江西省では一兩、湖廣省では八九錢不等で、貴州省では省城では每石六錢、各府では四五六錢不等であつたと傳えている⁹⁰。流通圏外に取り残された貴州省の場合は暫らくおき、その他の場合には、これがその、ある程度までの平均化運動の結果を物語っているのではなかつたかと思う。しかもこの平均化は、單に短期的に年々の「流通」を通して行われたばかりではなく、さらに長期的にはF—Aの分數構成を變える、とくにその除商の極大の省分では、「移民」によつてその分母數値をより大きくするという方向においても行われていた。民國初期における四川省はすでに、漸く自給して少量の移出をなし、時に他省の補給を仰ぐといつた省分であるにすぎない¹⁰⁰。もちろん人口の耕地以上に

顕著な増加のためである。このことについて、雍正時代、廣東省から湖南・四川兩省、わけても後者への移民のうちに、無業の貧民のみならず、いわゆる業戸¹¹地主も含まれていたことは印象的である。ただし、これらの事は、別個の問題としていすれ章を改めて考察されねばならない。

〔注〕

一 産米食稻米区域——その外と内と

- ① 内山清『貿易上ヨリ見たる支那風俗ノ研究』大正四年、四二七～八頁。
- ② 農商務省『支那ノ米ニ關スル調査』大正六年、九頁。
- ③ 野田勢次郎『中支那及南支那』大正六年、東京地學協會刊、三二一頁。
- ④ 『硃批諭旨』（以下『諭旨』と略す。函數は殿板による。）第十五函、鄂昌、雍正八年十月一日、十年八月一日。
- ⑤ 『雍正上諭』（以下『上諭』と略す）、第十六冊、五年十一月八日。
- ⑥ 同上、第三函、黃炳、元年六月十九日。
- ⑦ 同上、第六函、法敏、二年七月十六日。
- ⑧ 『諭旨』第三函、黃炳、二年十月一日。
- ⑨ たとえば同上、第七函、蔡珽、二十枚裏、日附なし、「今河南小米。截二十萬石……」。
- ⑩ 同上、第四函、石文焯、元年九月二日。

- ⑪ 同上、第十函、田文鏡、九年七月六日。
- ⑫ 『上諭』第十四冊、五年五月十七日。
- ⑬ 同上、第四函、福敏、三年八月二十九日。
- ⑭ 同上、" 四年十月十日。
- ⑮ 同上、第十八函、尹繼善、八年十一月二十四日。
- ⑯ 『上諭』第二十八冊、九年三月十三日。また『諭旨』第十一函鄂彌達、十一年五月十日には、「臣擬。於粵東省城。設立米局三處……其赴局零買者。用銀用錢。聽隨民便。仍不許買至一斗以外……」とある。

- ⑰ 『諭旨』第二函、陳時夏、五年六月四日。
- ⑱ 同上、第十五函、張廣泗、七年九月十六日。
- ⑲ 同上、" 七年八月六日。
- ⑳ 同上、第十二函、魏廷珍、五年十一月十九日。
- ㉑ 同上、第十八函、石麟十一年七月十一日。
- ㉒ 『安徽通志』卷八十五、食貨志、物産、安慶府の條。
- ㉓ 『諭旨』第六函、張元懷、九年七月二十四日。
- ㉔ 同上、第十八函、石麟、八年四月八日。
- ㉕ 兵士にはかりではなく、だれにも倉米が嫌われていたことについては、第七節、注⑮参照。
- ㉖ 『諭旨』第十六函、史貽直、十一年十一月二日。
- ㉗ 同上、第一函、伊都立、三年十一月二十四日。
- ㉘ 同上、第十八函、石麟、九年十一月五日。
- ㉙ 同上、第十四函、高其倬、四年六月十九日。
- ㉚ 同上、第十八函、尹繼善、八年十二月二十四日。

- ③¹ アワをいわぬが、あるいは稷がそれに當るか。
- ③² 『諭旨』第十七函、邁柱、十一年八月二十九日。
- ③³ 『上諭』第十八冊、六年四月十九日。
- ③⁴ 『諭旨』第十七函、邁柱、十三年閏四月十三日。
- ③⁵ 上掲③⁴の文獻その他。
- ③⁶ 『諭旨』第十七函、邁柱、十三年七月十五日、硃批。
- ③⁷ 同上、" 六年五月二十二日。
- ③⁸ 同上、第十二函、魏廷珍、二年閏四月十九日。
- ③⁹ 同上、第二函、布蘭泰、四年四月二十六日。
- ④⁰ 同上、第十七函、邁柱、八年五月十一日。
- ④¹ 同上、第二函、裴律度、元年六月二十日。
- ④² 同上、" 四年七月三日。その他、二年六月二十四日、三年六月二十日。
- ④³ 同上、第二函、布蘭泰、六年四月十八日。
- ④⁴ 同上、第六函、汪澐、四年五月二十五日。
- ④⁵ 同上、第十六函、程元章、四十四枚裏、日附なし。
- ④⁶ 同上、第十函、喬世臣、十年閏五月一日。
- ④⁷ たとえば、同上、第一函、范時繹、六年三月十七日、「於江・常・蘇・松各府屬地方。歷見隨處。麥苗悉皆長發」。
- ④⁸ 同上、第十八函、趙弘恩、十三年五月八日。
- ④⁹ 同上、第十函、喬世臣、十一年四月十五日。
- ⑤⁰ 同上、第十一函、慶元、一枚裏、日附なし。
- ⑤¹ 同上、第十五函、岳濟、十二年八月八日による。
- ⑤² 同上、第十二函、魏廷珍、五年十一月十九日。

- ⑤³ 同上、第十七函、郝玉麟、十一年六月二十七日、その他。
- ⑤⁴ 同上、" 十年閏五月二十四日。
- ⑤⁵ 同上、第十七函、高其倬、四年六月十九日。
- ⑤⁶ 注⑤⁴に同じ。また、第十六函、趙國麟、十年五月二十五日。
- ⑤⁷ 同上、第七函、王士俊、七年三月三日。
- ⑤⁸ 同上、" 八年四月十一日。なお、第十六函、楊永斌、十年五月二十七日、硃批には「其(廣東省)高亢之區不宜禾稻者。則令樹藝豆麥。亦可以資食用。至附城陸地及山麓偏坡。雖不能播種糧食。尚可栽植樹木。今俱閒棄」という土地利用法を打ちだしている。
- ⑤⁹ 同上、第五函、沈廷正、五年十月三日。また同上、第一函、孔毓珣、六年九月十一日。
- ⑥⁰ 同上、第十四函、高其倬、四年七月十八日、「閩人食麥不多」。
- ⑥¹ 同上、" 四年九月二日、「閩人。雖亦食麥。然不甚嗜之」。
- ⑥² 同上、第八函、尙濬、九枚裏、日附なし。三年ころ。
- ⑥³ 同上、第十四函、高其倬、四年六月十九日。
- ⑥⁴ 同上、第四函、朱綱、六年七月十六日。
- ⑥⁵ 同上、第一函、孔毓珣、六年九月十一日。

二 産食米区域内での米穀の需給関係(上)

- ① 小竹文夫「清代の耕地開墾」『近代支那經濟史研究』一七一頁。

- ② 同上、二三七頁。

- ③ 『諭旨』第十一函、憲德、五年十一月六日。

- ④ 同上、" 八年八月六日。
- ⑤ 『雍正大清會典』卷二十六、戶部四、田土總數の項。
- ⑥ 福建布政司の田土面積を『會典』には三十萬五千二百七十六頃六十四畝二分零と傳え、湖南布政司のそれと一畝の違いもない。明らかに誤りである。ここでは『皇朝文獻通考』卷四、田賦考四にみえる乾隆十八年度の數字によつた。なお同年の湖南省の民田は三十一萬二千餘頃である。
- ⑦ 農商務省『支那ノ米ニ關スル調査』五頁。
- ⑧ 『諭旨』第六函、王國棟、十四枚裏、日附なし。
- ⑨ 同上、第十六函、程元章、七十四枚表、日附なし、十年・十一年頃。
- ⑩ 『浙江通志』卷七十八、積貯、中。「杭嘉湖三府。本地又多種桑麻」(李衛)。
- ⑪ 野田勢次郎『中支那及南支那』三二五頁。ただし他の文獻、たとえば『支那ノ米ニ關スル調査』(六頁)では、浙江、二六〇萬石。江蘇、二一〇〇萬石。安徽、三四〇〇萬石。江西、三七〇〇萬石。湖北、三一〇〇萬石。湖南、四四〇〇萬石。四川、三三〇〇萬石。計二三三〇〇萬石というような推定數を示している。
- ⑫ 『雍正會典』卷三十、戶部八、戶口總數。『皇朝通考』卷十八、戶口考一。
- ⑬ 小竹文夫「清代における人口」『近代支那經濟史研究』二六三頁、所引、康熙上諭。
- ⑭ 『四川通志』卷六十四、食貨、戶口、乾隆元年川省編審人口

の條。

- ⑮ 小竹文夫、前掲書、二六五頁。
- ⑯ 同上、二六四頁。
- ⑰ 『上諭』第十三冊、五年二月二十八日、第十五冊、五年七月十日。なお、別に「閩粵小民。只知種植果木。圖取末利。不思稼穡爲本。種稻以蓄米糧。著地方大員。留心勸導。欽此」というものと同じ心證から出ている(『諭旨』第五函、官達、五年四月十二日所引の上諭)。
- ⑱ 同上、第十三冊、五年三月三日。ただし二毛作がより廣く行われていたとする有力な見方もある(加藤繁『支那經濟史考證』下、とくに「支那に於ける占城稻栽培の發達に就いて」、同上、六七〇～三頁)。いずれにせよ、廣東省が多毛作について、最も有利な氣候條件に恵まれていたことについては問題がない。なお、明瞭に二毛作ができないといわれている例に貴州がある(『諭旨』第十五函、張廣泗、七年十一月二十六日)。
- ⑲ 『諭旨』第七函、王士俊、六年十月八日。
- ⑳ 同上、第十七函、鄂彌達、九年十月二十三日。
- ㉑ 同上、第一函、孔毓珣、四年五月二十八日。
- ㉒ 野田勢次郎『中支那及南支那』三二四頁。
- ㉓ 『諭旨』第十八函、趙弘恩、七年八月二十四日。「四川田地。多有隱墾」。
- ㉔ 『上諭』第十七冊、六年二月二十三日。
- ㉕ 『皇朝文獻通考』卷四、田賦考には、乾隆十八年の四川の民田を、四十五萬九千四百十六頃有奇とし、『乾隆會典則例』卷三

十三、戸部、戸口下には、同年の四川の戸数を七十五萬七百八十五戸とする。『皇朝通考』卷十九、戸口考に、「四川人丁百三十六萬八千四百九十六」とするものは、むしろ人口とみるべきである。『四川通志』卷六十四、食貨、戸口にみえる乾隆元年の統計では、四川省五道の戸もしくは丁が、新舊戸計約六十一萬、流寓戸計約四萬、合わせて約六十五萬戸（丁）であつたから。

②⑤『諭旨』第十一函、憲德、八年八月六日。一部既引。

②⑦同上、第十五函、鄂昌、十二年五月十八日。

②⑧同上、第十六函、楊紱、十三年六月八日によると、そのときにも、約四千頃（四十萬一千一百四十餘畝）の墾荒・墾熟田が届出られている。雍正八年以後、乾隆十八年までの間には、田土數・人丁數ともに多少増加があつたのであらう。

三 産食米区域内での米の需給關係(中)

①小竹文夫『近代支那經濟史研究』一五八頁。

②『諭旨』第十六函、趙國麟、九年三月十九日。なお、同上、第二函、毛文銓、四年五月四日の條の硃批には、「計閩省存留新收米穀。有三十五萬餘石。」といつている。『上諭』第十四冊、五年五月二十四日の條にも同じ數字がみえる。九年の數字との開きは、もし額數に變更があつたのでなければ、四年の數字には、次法にいう「民米」と「屯米」とを含んでいたであらう。

③同上、第十七函、郝玉麟、七年十二月二十七日。なお、同上、第七函、王士俊、七年四月二十日の條には「粵東通省。額徵民屯糧米三十二萬八千五百餘石。儘數支放兵糧」とある。二十四萬八千石が民（糧）米で、のこりが屯（糧）米であらう。なお、補注3をも參照のこと。

④同上、第七函、邁柱、七年四月二十一日。

⑤注③に引く王士俊の奏摺を見よ。

⑥同上、第十七函、郝玉麟、七年十二月二十七日。

⑦同上、第二函、陳時夏、五年一月十日。

⑧同上、第十七函、邁柱、十二年七月八日。

⑨同上、第十八函、石麟、九年十一月二日。また八年四月八日。

⑩同上、第七函、王士俊、十年四月三日。

⑪同上、第十六函、程元章五十枚表、日附なし。

⑫例えば『上諭』第二十七冊、八年八月十日。「向來。錫免錢糧。額徵漕米。不在所蠲之內」。

⑬『雍正會典』卷三十六、戸部十四、蠲恤二、豁免下、康熙四十六年・五十六年上諭。『乾隆會典則例』卷四十二、戸部、漕運二、漕糧蠲緩、乾隆二年題准。なお、後にいう漕米の一部折納の直接的な目的については、例えば「江南通省漕運。又概行折徵一半。留米既多。則價值自平」とか『諭旨』第十六函、程元章、九十七枚表、日附なし、十一年か、「將漕糧。半本半折。江省得以米多價賤。日食充裕」などであるによつてこれを知ることができる（同上、第十八函、趙弘恩、十二年三月十五日）。

⑭『雍正會典』卷四十、戸部十八、漕運、永折米の條を參照。なお「漕項」という費目がある。いちおう「漕項銀亦辦漕之需」と限定的に説明されているが（前注所引の『乾隆會典則例』乾隆二年題准）、しかしより廣くは、永折米をも含めた、廣い意味での折漕銀兩のことであつたようにも見える。

⑮『諭旨』第六函、王國棟、百二十九枚表、日附なし、九年か。

⑯同上、第二函、陳時夏、元年十一月十三日。

- ①⑦ 同上、第十二函、王世琛、四枚表、日附なし。四年か。
- ①⑧ 『上諭』第二十冊、六年十月四日。
- ①⑨ たとえば『乾隆會典則例』卷四十三、戸部、漕運三、参照。
- ②⑩ 『諭旨』第十一函、慶元、二十一枚裏、日附なし、には「各省糧船。陸續過關者。已五千二百三十七隻。惟湖南尚兩幫。未經到淮」とある。また乾隆十八年の實運船数は五千四百八十八船であつた（『會典則例』卷四十二、戸部、漕運二）。
- ②⑪ 清鍾琦『皇朝瑣屑錄』卷二十九、漕運。
- ②⑫ 野田勢次郎『中支那及南支那』三三四頁。
- ②⑬ 『上諭』第二十冊、六年十月四日。凶年にはこの制限がゆるめられた。
- ②⑭ 同上、二十九冊、九年十一月十一日の條所引、浙江總督・李衛の奏摺。
- ②⑮ 同上、第二十七冊、八年八月一九日。在來、賑濟の場合「大口毎月給口糧一斗。小口毎月六升。」であつたものを、それでは不足だとして「大口毎月米一斗五升。小口照大口減半。」せしめたという。
- ②⑯ 農商務省『支那米ニ關スル調査』九一〇頁。
- ②⑰ 『諭旨』第十四函、高其倬、四年六月十九日。
- ②⑱ 『上諭』第二冊、元年十一月十一日。
- ②⑲ 『諭旨』第十六函、程元章、七十四枚表、日附なし。
- ③⑰ 同上、第十一函、謝旻、九年一月二十四日。
- ③⑱ 同上、第四函、韓良輔、二年閏四月十七日。

四 産食米区域内での米穀の需給關係(下)

- ① 『諭旨』第四函、福敏、四年十二月四日。また『上諭』第十

三冊、五年一月十七日。

② 例えば、同上、第三函、黃國材、元年九月十一日。第十二函萬際瑞、六年四月二十一日。第十三函、李衛、五年閏三月一日等の硃批。とくに李衛に對する硃批。

③ 『湖北通志』卷四十八、經政六、倉儲の條による。省により、地方によつても常平倉の別名には異同が多い。

④ 『清國行政法』第四卷、一六二頁、備考。

⑤ 『諭旨』第十五函、劉廷琛、二年四月二十八日。

⑥ 同上、第三函、李紱、二年七月二十五日。また、同人、四年一月十日、計廣西原捐穀一百一十七萬八千二百五十石。每石收銀一兩一錢」とい、第三函、黃國材、三年九月一日に、廣西省に關して、「自康熙五十三年夏季起。至五十五年夏季止。共計捐過穀一百一十七萬八千二百五十石。」といっている。これが李紱のいわゆる一百十餘萬石の確數であり、第十五函、郭拱、六年三月十九日、金拱、七年十一月七日の條にみえる「一百五十二三萬餘石」の數字は、常平倉穀を含めたもの。本節注⑮。

⑦ 同上、第十二函、王世琛、三枚表、日附なし、四年頃。

⑧ 『清國行政法』第四卷、一六〇頁。

⑨ 『諭旨』第十五函、李玉鏞、八年七月二十一日、また第十六函、趙國麟、九年三月十九日に所引の李玉鏞奏。

⑩ 同上、第十八函、黃廷桂、九年六月二十二日。

⑪ 同上、第十一函、王柔、八十六枚表裏、日附なし。十二年頃。

⑫ 同上、第三函、李紱、二年七月二十五日の條、「聞開捐之初。實由（廣西省）四府任事之官。欲專其利。非實爲備荒計也」による。

- ⑬『湖北通志』卷四十八、經政六、倉儲。
- ⑭米での積貯がいかん困難であり、したがって米での積貯高がいかん少なかったかは、『雍正會典』卷三十九、戶部十七、蠲恤五、積貯の項に、『(雍正三年)……遵旨議定。江安・閬・浙・湖廣・江西・四川・廣東・廣西・雲南・貴州十省內。除安徽、但有稻穀、原無存貯米石、及浙江・福建倉米有限、無容改易。其湖南・湖北・四川・江西四省存貯米石。皆在五萬石內外。……』とあるによつて明らかである。
- ⑮『諭旨』第十五函、金鉷、七年十一月七日。一百五十三萬餘石。郭鉷、六年三月十九日、百五十二萬餘石、その内譯は、捐穀分貯七十九萬八千石、常平倉穀四十四萬三千石、その他二十九萬三千石。
- ⑯『諭旨』第十函、田文鏡、七年十二月八日。
- ⑰同上、〃 〃 〃 七年一月十九日。
- ⑱同上、第二函、裴律度、二年九月二十八日。
- ⑲同上、第六函、常德壽、三年四月三日。
- ⑳同上、第十七函、邁柱、四年十二月十八日。
- ㉑同上、第五函、張坦麟、六年十二月三日。
- ㉒同上、第十一函、謝晏、七年十二月六日。
- ㉓『上諭』第八冊、三年十二月十七日。
- ㉔同上、第二十五冊、八年一月九日。
- ㉕『諭旨』第十七函、邁柱、十二年九月十五日。
- ㉖前項の文獻には、『貯穀一百一十四萬三千餘石』にすぐ續けて、『北南社倉貯穀四十五萬四千餘石』といつてゐる。
- ㉗『諭旨』第十八函、黃廷桂、九年六月二十二日。
- ㉘同上、第七函、管承澤、五年九月九日。
- ㉙前項の文獻に同じ。
- ㉚『諭旨』第十五函、鄂昌、十二年四月十三日。
- ㉛同上、第十四函、高其倬、四年六月十九日。
- ㉜『上諭』第十冊、四年七月一日、所引の黃國材の奏稱。
- ㉝『諭旨』第二函、楊文乾、五年八月二十八日。
- ㉞同上、第十四函、高其倬、五年七月十日。
- ㉟同上、第五函、沈廷正、五年四月十六日。
- ㊱『上諭』第十四冊、五年六月六日。
- ㊲『乾隆會典則例』卷四十、戶部、積貯、常平額外積貯の項によると、乾隆十三年に設けられた臺灣倉の定額は四十萬石であつた。
- ㊳捐積常平等倉穀と官民捐積監穀とを全然別物とみる見方もなりたつかも知れぬが、ここでは一應同じものとみておく。
- ㊴『上諭』第十四冊、五年六月六日による。
- ㊵『諭旨』第五函、官達、五年四月十二日。
- ㊶同上、〃 〃 〃 五年五月二十四日。また、第五函、常賽、十八枚裏。日附なし。
- ㊷同上、第七函、王士俊、六年十月八日。
- ㊸同上、第十六函、楊永斌、十年四月一日。
- ㊹同上、第五函、常賽、五年二月十日。また第四函、傅泰、七年五月二十四日。また第十六函、楊永斌、十一年十一月九日、等。不成績で、七年二月までに、二萬四千九百餘石しか集まらなかつたことは、第二文獻にみえる。この數字は、五年の倉穀數と六年のそれとの差額にやや近い。

- ④5 同上、第十六函、査郎阿、七年十月五日。
- ④6 同上、第十六函、史貽直、十年八月十七日。
- ④7 同上、第十函、田文鏡、八年四月二十七日。
- ④8 例えば、同上、第十七函、邁柱、九年四月一日、十一年四月十一日等。第十六函、史貽直、十一年十一月一日。漢水・丹水の水道を利用したものである。
- ④9 『諭旨』第十六函、法敏、四十六枚表、日附なし。
- ⑤0 同上、第十四函、高其倬、五年二月十日。
- ⑤1 同上、第十二函、舒喜、九年八月二十九日、直隸的事例。
- ⑤2 同上、第十函、田文鏡、五年六月二十日。また第十六函、査郎阿、七年十月五日。
- ⑤3 『上諭』第六冊、三年二月十七日。
- ⑤4 『諭旨』第十六函、高斌、八年三月一日。「奉文以米易穀。已歴三載。」
- ⑤5 同上、第二函、楊文乾、四年二月十二日。また第五函、十八枚裏、常賚、日附なきも前者と同一事についての記録。
- ⑤6 同上、第十二函、王世琛、三枚表、日附なし、の殊批。
- ⑤7 同上、第六函、汪澂、四年五月二十五日。
- ⑤8 同上、" 四年六月十六日。
- ⑤9 同上、第一函、孔毓珣、四年二月十二日、五年九月二十九日。
- ⑥0 同上、第十四函、高其倬、五年七月十日。
- ⑥1 同上、" 四年七月十八日。
- ⑥2 同上第二函、裴律度、二年九月二十八日。
- ⑥3 同上、第十七函、邁柱、四年十二月十八日。
- ⑥4 同上、第四函、朱綱、五年十二月六日。

五 中・南シナ諸省の米穀事情(上)

- ⑥5 同上、第五函、法敏、五年五月十一日の殊批。
- ⑥6 同上、第二函、陳時夏、五年六月四日。
- ⑥7 同上、第四函、福敏、五年二月二十日。
- ⑥8 同上、第四函、韓良輔、五年八月十九日。
- ⑥9 同上、第十六函、高斌、八年三月一日。
- ① 野田勢次郎『中支那及南支那』三二六頁。
- ② 『諭旨』第七函、佛喜、四年十一月二十六日。
- ③ 野田勢次郎『中支那及南支那』三二四～五頁。
- ④ 清初以来の四川事情は『諭旨』第五函、法敏、四年四月二十六日による。
- ⑤ 同上、第十一函、憲德、五年六月二十四日。
- ⑥ 同上、第五函、呂耀曾、七年二月十六日。
- ⑦ たとえば、同上、第四函、馬會伯、五年四月十八日。
- ⑧ 『上諭』第十七冊、六年二月二十三日。また『諭旨』第一函、石禮哈、六年一月八日。
- ⑨ 同上、第二十六冊、八年四月六日。
- ⑩ 『諭旨』第十五函、鄂昌、十二年五月十八日。
- ⑪ 同上、第七函、王士俊、七年三月三日。
- ⑫ 『諭旨』第十一函、憲德、八年三月二十日の條所引の馬維翰の報告による。
- ⑬ 注⑤参照。また『諭旨』第十八函、趙弘恩、七年八月二十四日によると、「今查出各省流民。已有七千二百餘戸。恐將來有不敢安插之慮。」とある。當然入籍はしていなかったであろう。
- ⑭ 同上、第十一函、憲德、五年十一月六日。

⑮ たとえば、同上、第十八函、趙弘恩、七年十一月七日に「臣聞。四川墊江萬縣。七月初間。百姓不容丈量。扯旗聚衆。約千餘人。係因丈量之臣。過於急遽。不善勸諭之所致也……臣風聞之事。恐未確實……」とある。

⑯ 同上、第十七函、鄂彌達、十一年十月四日。

⑰ 同上、第十八函、黃廷桂、九年六月二十二日。また、第五函、法敏、四年四月二十六日。

⑱ 同上、第十八函、黃廷桂・鄂昌、十二年九月二日。

⑲ 同上、第十五函、鄂昌、十二年四月十三日。

⑳ 同上、第十八函、黃廷桂、九年六月二十二日。

㉑ 同上、第五函、沈延正、九年二月九日。

㉒ 同上、第十三函、李衛、五年五月十一日。

㉓ 同上、第四函、福敏、四年十二月四日。

㉔ たとえば、同上、第九函、鄂爾泰、八年四月二十日。また同上、第十七函、邁柱、十二年九月十五日の硃批。「湖廣熟天下足」という語は、早くは明末にできたとと思われる『地圖綜要』に見えるという（加藤繁『支那經濟史考證』下、六五七頁注）。

㉕ 同上、第十二函、魏廷珍、元年十一月二十五日。および、第十七函、邁柱、六年三月十一日。

㉖ 農商務省『支那ノ米ニ關スル調査』一九五頁。

㉗ 例えば『諭旨』第十六函、吳應芬、十二枚表、日附なし。「晚稻。湖田甚好。其山田被旱之處。恐收成不無歉薄。」

㉘ 農商務省『支那ノ米ニ關スル調査』一五六頁。

㉙ 湖廣省の堤垸については『諭旨』第六函、王國棟、四十枚、日附なし、（中に雍正五年七月十三日の上諭を含む）を参照。

この種の土地利用が宋代に初まるらしいことは、ごく最近に入手した重田徳氏の「清初における湖南米市場の一考察」『東洋文化研究所紀要』第十冊、四八二頁、註⑩で知ることができた。なお、時日の關係で十分にこの論文を検討し、利用しえなかつたことを遺憾とする。

③⑦ 『諭旨』第二函、布蘭泰。五年七月十四日。

③⑧ 同上、第四函、朱綱、二年九月五日。

③⑨ 同上、第二函、布蘭泰、五年五月十六日による。

③⑩ 同上、第六函、王國棟、六十九枚表、日附なし。五十六年ころ。

③⑪ 同上、第十二函、魏廷珍、元年九月六日。

③⑫ 同上、第十一函、王柔、六十六枚裏、日附なし。十一年ころ。

③⑬ 本節、注②⑤所見の邁柱、六年三月十一日。

③⑭ 『上諭』第二冊、元年六月三十日。

③⑮ 前文、第三節注③⑩所引の謝旻の奏摺。

③⑯ 『諭旨』第九函、鄂爾泰、五年三月十二日。

③⑰ 同上、第十一函、謝旻、八年十月十七日。

③⑱ 流民のこととは、別個の問題として考究さるべきである。

③⑲ 『諭旨』第十一函、謝旻、八年十二月四日。

③⑳ 『上諭』第十三冊、五年三月三日。

④① 農商務省『支那ノ米ニ關スル調査』一三八〜一四四頁。

④② 九江關は順治二年に設けられ、康熙十二年に湖口に移されたが、雍正年間にいたってまた、九江に復歸したのである。例えば『諭旨』第五函、張坦麟、六年十二月三日、また、第六函、

王國棟、六十九枚表、日附なし、五年ごろ、などを参照。

⑭『諭旨』第二函、裴律度、四年七月三日。第六函、汪瀝、四年八月一日。

⑮『上諭』第二十二册、七年九月三十日。

⑯『諭旨』第一函、孔毓珣、元年九月二十八日。

⑰同上、第四函、韓良輔、二年閏四月十七日。

⑱同上、第十七函、鄂彌達、十一年三月十二日。

⑲同上、第九函、鄂爾泰、八年一月三日。

⑳同上、第十五函、金鉉、七年十一月七日。

㉑『皇清奏議』卷三十、鄂彌達、「請豫備倉穀以利民生疏」雍正十年。

㉒『諭旨』第十五函、金鉉、十二年九月十九日。

六 中・南シナ諸省の米穀事情(下)

①『諭旨』第七函、王士俊、七年三月三日。また「其地(廣東)爲各省及外洋往來貿易之處。商賈之多甲天下。所產之米有限。

不敷所食。所以米價不時昂貴。民常有乏食之虞也」というものも同じ意味である(第六函、楊爾德、五年六月十七日)。

②『上諭』第十三册、五年二月八日に所引の楊文乾の奏。『諭旨』第十七函、鄂彌達、十三年三月十五日條にも、ある人の條陳内稱すとして「粵東一年所收之穀。不足供本省半年之食。」とある。

③『諭旨』第十七函、鄂彌達、十三年三月十五日。

④同上、第二函、楊文乾、六年五月二十四日。

⑤同上、第四函、傅泰、七年六月四日、硃批。

⑥同上、 " " 七年九月十九日、硃批。

⑦同上、 " " 七年十二月二十七日。

⑧同上、第十七函、鄂彌達、十一年十一月十五日。

⑨同上、 " " 九年二月十日。

⑩同上、第十六函、楊永斌、十年五月二十七日。

⑪『皇清奏議』卷三十、鄂彌達「請豫備倉穀以利民生疏」

⑫『諭旨』第二函、楊文乾、四年十二月十八日。

⑬同上、第四函、傅泰、七年十二月二十七日。

⑭同上、第七函、王士俊、九年一月十二日。

⑮同上、 " " 六年十月八日。

⑯例えば、同上、第八函、尙灝、九枚表、日附なし。三年か。

⑰同上、第二函、楊文乾、五年三月十二日。

⑱同上、第十七函、鄂彌達、十二年四月八日による。また、同上、十年一月十六日。

⑲藍鼎元『鹿州公案』下「西穀船戶」、および『諭旨』第十四函、高其倬、四年六月十九日。

⑳同上、第十七函、鄂彌達、十二年四月八日。

㉑同上、第二函、楊文乾、四年十二月十八日。

㉒同上、第七函、王士俊、九年一月十二日。

㉓本節、注⑮の第一のものに同じ。

㉔『諭旨』第七函、王士俊、七年三月三日。

㉕同上、第二函、毛文銓、四年五月十四日。

㉖同上、第三函、何天培、四年七月二十日。

㉗『江南通志』卷八十五、食貨志、積貯。

㉘農商務省『支那ノ米ニ關スル調査』七二頁。

㉙野田勢次郎『中支那及南支那』三二五頁。

- ②⑩『諭旨』第十八函、趙弘恩、十二年十二月二十日。
 ③①同上、" " 十三年五月十二日。
 ③②同上、" " 十二年十月十二日、また、第十六函、程元章、二十一枚表、日附なし。八年頃。
 ③③中村治兵衛「清代湖廣米流通の一面」『社會經濟史學』第十八卷、第三號（一九五二）五六頁。
 ③④野田勢次郎『中支那及南支那』三二五頁による。
 ③⑤『諭旨』第一函、范時繹、五年十月十八日。
 ③⑥同上、第四函、張楷、三年六月八日。
 ③⑦同上、第十一函、喬世臣、十年七月二十一日。
 ③⑧同上、" " 十一年四月十五日。
 ③⑨同上、第十八函、趙弘恩、十三年一月十二日。
 ④⑩同上、第十三函、魏廷珍、七年六月三十日。その他。
 ④⑪同上、" " 六年十一月十八日、殊批。
 ④⑫安部健夫「清代に於ける典當業の趨勢」『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』一二頁。藤井宏「新安商人の研究」『東洋學報』第三十六卷、一〇四號。
 ④⑬同上、第十三函、李衛、四年六月一日、殊批。
 ④⑭同上、" " 五年三月二十四日、殊批。
 ④⑮雍正『浙江通志』卷一百一、物産一、杭州府の條には「杭郡。自錢塘以西諸山縣皆山田。自仁（和）及海（塩）皆平地田。」とある。
 ④⑯『諭旨』第十三函、李衛、六年七月六日、八年七月二十五日。ただし、前注④⑮所引の『通志』の文の續きには、「大抵早種多。而晚種少。早種所收薄於晚種。故會城之米。大半取給四方。」
 といっている。
 ④⑰前注以下のところ、文献、前注のものに同じ。
 ④⑱『諭旨』第十三函、李衛、九年六月十九日。
 ④⑲同上、第十六函、程元章、六十九枚表、日附なし。十一年頃。
 ⑤⑰注④⑮所引『浙江通志』參照。
 ⑤⑱『浙江通志』卷八十一、漕運中。
 ⑤⑲第二節注⑨參照。
 ⑤⑳『浙江通志』一百一卷、物産一、嘉興府の條による。その一節にいう。「其土原屬膏腴。而治田亦得良法。」と。
 ⑤㉑『諭旨』第四函、劉世明、十年一月二十六日。
 ⑤㉒同上、第二函、毛文銓、三年十一月十九日。
 ⑤㉓同上、第十四函、高其倬、四年六月十九日。
 ⑤㉔同上、" " 四年九月二日。
 ⑤㉕同上、第八函、吳陞、四年五月二十日。
 ⑤㉖福建省の例としては、例えば『諭旨』第二函、毛文銓、四年五月十四日。第十四函、高其倬、四年六月十九日。沈延正、四年九月二十九日。第二函、裴律度、四年六月四日などを參照。また重田、前掲論文『紀要』四七四〇八頁の「搶米風潮」を見よ。
 ⑥⑰『諭旨』第十三函、李衛四年六月一日。
 ⑥⑱同上、第十七函、郝玉麟、十一年九月二日。
 ⑥㉑同上、第十六函、趙國麟、十年五月二十五日。
 ⑥㉒同上、第十五函、潘體豐、八年三月四日の日附を含む。
 ⑥㉓同上、第二函、毛文銓、四年二月四日。
 ⑥㉔同上、第十五函、潘體豐、九枚裏十枚表、日附なし。八九年

頃。

⑥⑥ 同上、第十四函、高其倬、五年七月十日。

⑥⑦ 同上、第十六函、史貽直、七年八月二日、および本節、注⑦の二文獻によつて推定。

⑥⑧ 同上、第四函、朱綱、六年七月十六日。

⑥⑨ 同上、第十六函、史貽直、七年八月二日。

⑦⑩ 同上、第十七函、郝玉麟、十一年八月四日。

⑦⑪ 同上、第二函、毛文銓、四年五月十四日。第八函、吳陞、四年五月二十日。

⑦⑫ 同上、第十四函、高其倬、四年十二月二十日。

⑦⑬ 本節、注⑦の第一文獻に同じ。

⑦⑭ 『諭旨』第十四函、高其倬、四年七月二十六日。

⑦⑮ 同上、第六函、甘國奎、二年七月二十四日。なおこれがいわゆる「棚民」である。棚民については別個に考察されねばならぬ。史料は多いが、たとえば第十三函、李衛、五年四月十一日、五年十月十三日。第二函、裴律度、元年四月二十一日。第五函、張垣麟、六年十二月六日など参照。

⑦⑯ 同上、第十三函、李衛、四年十二月二日。

⑦⑰ 同上、第六函、李衛、十三枚表、日附なし。七年頃。

⑦⑱ 同上、第十五函、禪濟布、二年六月十五日。

⑦⑲ 同上、第二函、毛文銓、四年二月四日。

⑧① 同上、第十四函、高其倬、四年七月二十六日。なお、この日附の奏摺には「臺灣地廣。民間所出三米。一年豐收。足供四五年之用」といつて臺灣の米の豊かさをたたえている。

⑧② 同上、第五函、常賚、五年十一月十七日。

⑧③ 同上、第十四函、高其倬、四年九月二日。

⑧④ 同上、第十七函、郝玉麟、十一年五月一日。

⑧⑤ 同上、" 十一年三月二日。厦門と臺灣との

關係は、同上、十年五月七日、また第四函、朱綱、六年八月一日にも見える。

⑧⑥ 同上、第二函、毛文銓、四年五月四日。

⑧⑦ 同上、第八函、吳陞、四年五月二十日。

⑧⑧ 同上、第五函、索琳、四年七月六日(?)。

⑧⑨ 同上、第十四函、高其倬、五年二月十日。また同上、四年十一月二十八日参照。

七 各省間における米穀の流通

① 『諭旨』第三函、黃國材、元年五月十四日。

② 同上、第五函、劉世明、七年一月二十五日。

③ 同上、第十六函、史貽直、七年閏七月二十四日。

④ 同上、" 七年十二月二十四日。

⑤ 同上、第十七函、郝玉麟、十一年五月一日。

⑥ 同上、第十八函、趙弘恩、十二年三月十五日。

⑦ 例えば、同上、第一函、楊宗仁、元年十月十六日、その他に例證が多い。

⑧ 同上、第三函、何天培、四年七月二十日。

⑨ 例えば、北省での二麥の凶作のために引きおこされた、雍正元年八月の、兵科掌印給事中陳世倌の湖南省における採買、(同上、第十二函、魏廷珍、元年九月六日等)。元年冬、科臣繆沅の江西省における六萬石餘の採買(同上、第二函、裴律度、元年十二月十二日)。二年四月ごろの、太常寺少卿于廣の湖廣

省における米十萬石の採買(同上、第十一函、慶元、十一枚表、日附なし)。

⑩ 例えば、同上、第五函、常養、五年二月十日。第四函、傳泰、七年二月二十四日。第十六函、楊永斌、十一年十一月九日など参照。

⑪ 同上、第十三函、李衛、六年十一月二十二日。公費・公項については本號、岩見宏氏論文参照。

⑫ 『諭旨』第二函、陳時夏、五年四月十一日には、福建省から二次にわたつて官員が蘇州にきて米石を採買したほか、六次にわたつて、督撫の咨文をもつた商販が來蘇して江廣の米を接買したことを傳えている。官廳が招商採買する例の一つとみるべきであろう。本文一九〇頁参照。

⑬ 同上、第十一函、王柔、八十六枚裏、日附なし。十二年頃。そのほか、第十二函、魏廷珍、二年閏四月十九日にみえる、中央から科臣陳世倌を湖南に遣した場合の例をみよ。

⑭ 同上、第十七函、邁柱、十二年九月十五日。

⑮ 同上、第十四函、高其倬、五年四月四日、また、第十六函、高斌、八年三月一日にも、「新穀既登。則民間不樂買此陳米。求糶甚難」といつて、倉米出糶の困難を懇えている。

⑯ 同上、第十三函、李衛、九年四月二日。

⑰ 『浙江通志』卷七十七、積貯上。

⑱ 『諭旨』第二函、陳時夏、五年四月十一日。

⑲ 同上、第十三函、李衛、四年六月一日。

⑳ 同上、第十六函、程元章、六十五枚表、日附なし。十一年頃。

㉑ 同上、第十四函、高其倬、五年七月十日。

㉒ 同上、第一函、楊宗仁、二年十月二十日。

㉓ 本節、注⑨参照。

㉔ 『上諭』第三冊、元年十月二十六日。

㉕ 同上、第二函、裴律度、二年九月二十八日。

㉖ 同上、第十七函、邁柱、五年三月十九日、五年七月八日等。また、江西省南部の吉安・建昌・贛州の三府には、四年七八月に、陸路からする福建・廣東二省の買出しが多かった(同上、第二函、裴律度、四年六月四日、四年七月三日、同上第六函、汪澹、四年八月一日)。

㉗ 同上、第六函、李蘭、三枚裏、日附なし。硃批、「今歲。江西收成。爲最下」。

㉘ 同上、" " 六枚裏。

㉙ 同上、第一函、楊宗仁、二年四月十三日。

㉚ 同上、第十二函、魏廷珍、元年十一月二十五日。

㉛ 同上、第四函、福敏、五年四月二十一日。

㉜ 同上、第九函、鄂爾泰、八年四月二十日。

㉝ 同上、第四函、王景澎、二年八月二十日。

㉞ 同上、" " 二年十一月二日。

㉟ 同上、第一函、楊宗仁、元年十月十六日、硃批。

㊱ 同上、第十三函、李衛、五年五月十一日。

㊲ 『上諭』第十五冊、五年九月三日。

㊳ 『諭旨』第四函、朱綱、五年九月二十六日。

㊴ 同上、第十三函、李衛、四年六月一日。

㊵ 同上、第四函、王景澎、二年十一月二日。

㊶ 同上、第十八函、趙弘恩、九年三月七日。

④② 同上、第五函、法敏、三年九月六日。これは姦牙が光棍と串通して商人の貨物を誘騙することを論じたものだが、邁柱も別に「楚省銜途。巨鎮甚多。商賈雲集。乃有一種土棍・牙行。候客商主於其家。窺伺所帶資本。或勾通本地匪類。或督率本家雇工子弟。深夜將客住間房。挖洞入室。竊取銀兩・貨物。俵分而散……」といつて、その惡らつ振りをなじつてゐる（第十七函、邁柱、六年十月二十日）。

④③ 同上、第十七函、邁柱、十年二月二十四日。

④④ 同上、" 六年三月十一日。

④⑤ 同上、第十三函、李衛、四年五月十日。

④⑥ 同上、第十四函、高其倬、五年七月十日。

④⑦ 同上、第十三函、李衛、四年六月一日。

④⑧ 前注に同じ。

④⑨ 『諭旨』、" 五年五月十一日に所引の同知・谷確らの報告。

⑤① 注④⑦に同じ。

⑤② 同上、第十三函、李衛、五年五月十一日。

⑤③ 同上、" 五年十二月三日。

⑤④ 同上、第七函、任國榮、五年十二月十三日に「臣看得。重

（重慶）郡兵民聚處。戶口實繁。今見浙楚二省。買米差員。接踵而至。外販又運往下江。絡繹不絕。」とあるものに同じ。

⑤⑤ 同上、第十一函、憲德、六年一月二十二日。

⑤⑥ 同上、第五函、管承澤、六年二月六日。

⑤⑦ 同上、第十三函、李衛、五年五月十一日。

⑤⑧ 『上諭』第三十一冊、十一年一月五日と、『諭旨』第十一函、

憲德、十一年二月七日とによる。上者は「米價稍昂」とし、後者には「米價頗昂」とする。頗は稍と同じような意味にも使われる語であるが、ここでは「すこぶる」の意にとり、しかもこの方を採用しておく。

⑤⑨ 上注にみえる憲德の奏摺。

⑥① 『諭旨』第十七函邁柱、十年二月二十四日。

⑥② 同上、" 十年十二月七日。また、十一年十一月九日の條にもみえる。

⑥③ 同上、第十八函、趙弘恩、十年十二月四日、また第十一函、喬世臣、十一年二月十三日。後者によると、湖廣省から米を陝西省に送つたことも、過糴にいたつた理由の一つに算えられて

いる。第四節、注④④参照。

⑥④ 同上、第十八函、趙弘恩、十一年二月十日。

⑥⑤ 『上諭』第三十一冊、十一年一月五日。

⑥⑥ 本節、注⑥②に同じ。

⑥⑦ 『諭旨』第十七函、邁柱、十一年五月六日。

⑥⑧ 同上、" 十二年五月十五日。

⑥⑨ 同上、" 十二年七月八日。

⑥⑩ 同上、" 十二年九月十五日によると、湖北布

政使李世倬からまた過糴を要望する聲が出てゐる。採用されなかつたが、盛んな米穀の搬出には、さすがの湖廣省も弱つていたのであらう。

⑥⑪ 同上、第十一函、喬世臣、十一年四月十五日。

⑥⑫ 同上、第二函、毛文銓、四年五月十四日。

⑥⑬ 中村治兵衛「清代湖廣米流通の一面」『社會經濟史學』第十

八卷、第三號（一九五二）、五四頁による。

⑦② 『諭旨』第十七函、鄂彌達、十一年五月十日。但し廣東の例、廣東に關しては、同上、第二函、楊文乾、四年十二月十八日、硃批中にも、「設負販小人輩。探知爾意欲求平糶。但齊行長價。數日即可遂其願矣。以有盡之食糧。何能應無厭之懇求。」とある。『諭旨』や『上諭』には、他にも二三「齊行」の記事がある。

⑦③ 同上、第十八函、趙弘恩、十二年三月二十六日。

⑦④ 安部健夫「清代における典當業の趨勢」『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』六頁。

⑦⑤ 同上、第二函、何天培、元年五月二十四日。

⑦⑥ 同上、第二函、毛文銓、四年五月十四日。

⑦⑦ 同上、第十四函、高其倬、四年七月十八日。

⑦⑧ 同上、第二函、陳時夏、五年四月十一日。

⑦⑨ 本節、注⑦⑥に同じ。

⑧① 『浙江通志』卷八十一、漕運中。

⑧① とくに『諭旨』第十四函、高其倬、四年十一月二十八日。また、米禁のさいの漁船の食米については、第二函、楊琳、元年七月二十六日参照。

⑧② 同上、第十八函、趙弘恩、十三年一月二十四日。

⑧③ 同上、第三函、黃國材、元年九月十一日、元年十一月九日、二年三月二十六日、二年十一月二十六日。

⑧④ 同上、第一函、孔毓珣、四年四月二十二日。第十七函、鄂彌達、十二年四月八日には「雍正四五年間。湖郡偶歉。石米竟至三四兩不等。」という。

⑧⑤ 同上、第二函、毛文銓、五年四月四日。

⑧⑥ 同上、" 四年五月四日、四年五月十四日。

⑧⑦ 同上、第二函、裴律度、四年六月四日。

⑧⑧ 同上、第二函、毛文銓、四年五月十四日。

⑧⑨ 同上、第二函、裴律度、四年七月三日。同上、第六函、汪澹、四年八月一日。

⑨① 同上、第十七函、鄂彌達、十二年四月八日。

⑨② 同上、第二函、楊文乾、四年七月二十六日。

⑨③ 同上、" 四年二月十二日。

⑨④ 同上、第一函、孔毓珣、四年四月二十二日。

⑨⑤ 同上、第六函、汪澹、四年五月二十五日、同上、第六函、甘汝來、四年七月三日。

⑨⑥ 同上、第四函、韓良輔、五年四月八日。

⑨⑦ 同上、第六函、甘汝來、五年六月二十四日硃批。

⑨⑧ 同上、第十五函、金拱、十年四月十六日。

⑨⑨ 同上、第九函、鄂爾泰、八年四月二十日。

⑩① 同上、第四函、何世基、四年四月八日。

(100) 野田勢次郎『中支那及南支那』三二五頁。

補注1 飯米には主として粳（粳）米・秈米が用いられたのに對し、酒造用には糯米が用いられた。酒造用米の食用米に對する比率は、民國初期の調査によると、四川省については約七％に相當していたといわれ（『支那ノ米ニ關スル調査』九頁）、湖南省については四十分の一位に相當する、すなわち約二・五％に相當していたといわれる（同上、一六一頁）。いずれにせよ、酒造用米の消費は、雍正時代にあつても量的にみて大したものではなかつたのであろう。

補注2

雍正時代の廣東省についても、例えば「粵東耕種禾稻。較之別省更早。是以有清明得雨十分收之鄉諺」とか（『諭旨』第二函、楊文乾、六年三月二日）、「粵東天氣溫和。農家播種甚早。二三月間即係青黃不接之際。故每歲米價。入春必貴」などといわれていた（同上、第七函、王士俊、七年三月三日）。

補注3

清代文獻のうちには時おり「民屯糧米」「民屯米石」などの言葉を見出す。「粵東通省額徵民屯糧米三十二萬八千五百餘石。儘數支放兵糧」（『諭旨』第七函、王士俊、七年四月二十日）。「粵東額徵民屯糧米。原以支放兵糧」（同上、王士俊、七年十一月十日）。「其額徵民屯米石。現今州縣收支。悉皆本色」（同上、第十七函、郝玉麟、七年十二月二十七日）。「粵東一省、徵收民屯糧米。支應本省兵食」（同上、第十六函、楊永斌、十年七月十日）などがそれである。この場合の民屯糧米とは、たとえば藍鼎元『鹿州公案』卷上「五營兵食」の條に、

潮陽一縣。歲徵民米・軍屯米一萬一千餘石。配給海門・達濠・潮陽・惠來・潮州城守五營兵食。無有存者。

とある民米と屯米とのことで、要するに「凡成造漕船。例于州縣民地徵十之七。衛所軍地徵十之三。給備料價。其有不敷。於江寧各衛屯米。每石協濟銀一錢……」という場合の（『皇朝文獻通考』卷四十三、國用考、漕運、漕船）、民地・民田、軍地・軍田からの徵收米の意に外ならない。しかもこの種の民米（屯米）こそ、いわゆる存留糧の實體をなすものであつたのである。

補注4

江南の蘇州・松江二府、浙江の嘉興・湖州二府の賦税が全國各地の中でも特に重かつたのは、前明の初め、張士誠がこの地方を根據にして、前後十年にもわたつて、頑強に洪武帝に對抗した結

果だといわれる。すなわち洪武帝は、士誠の平定後、その抵抗に對する腹いせとして、この地方の富民の田を籍して官田とし、しかもこれまでの高率な私租を按じて税額としたが、この非道な苛政を清朝がそのまま襲いついたためであつたと言われるのである（『諭旨』第十三函、李衛、四年十一月某日、『上諭』第十六冊、五年十月二十七日、明范濂『雲間據目抄』卷四、記賦役等）。しかもこの點において江浙二省の地は、輕賦をもつて聞え、「升合の輕微な錢糧を納めるだけ」とか（本文一四五頁）、「四川州縣。錢糧甚少」などといわれた四川省と著しい對照をなす（『上諭』第十六冊、五年十月二十七日）。

補注5

穀（もみこめ）と米との量的な關係については、こんなことがいわれている。「稻穀の場合は粒が大で殻が厚いから、每穀一石で米五斗を碾ければ好穀に屬し、粟穀の場合は、粒が細かくて殻が薄いから、新穀一石から米を碾くこと六斗餘に至るものがあり、その倉穀の存貯して日久しいものは、米に碾くと糠粃がやや多く、五斗六七升に至る者は好穀に屬する」と（『諭旨』第十函、田文鏡、七年七月四日）。嚴密にいうとこのように、品種により、場合によつていろいろ違つていたわけであるが、しかし法定の換算率としては、單に米（稻米・粟米）のみならず、麥や豆についても、一律に實一對穀二ということになつていた（同上、第五函、法敏、五年五月十一日）。なお田文鏡が、一米に對する二穀のうちには損耗分も含まれており、實際には米一石をとるには穀一石六七斗でよいという意味のことを言っているのは（同上、第十函、九年十月二十六日）、とくに「粟米」についての發言なのであろう。

補注6

米船・糧艘が鹽斤を密運し、鹽船がとくにその回空の際の壓船用として米穀を積載することは、普通に行われていたことによ

うである。前者の一例としては「川省米。船往來帶私鹽及違禁之物」といわれたものを『上諭』第十五冊、五年九月三日、後者の例の著しいものとしては、雍正八年に「淮商の湖廣米三十萬を運んで沿途に售ることを准した」ことを指摘することができる（王慶雲『熙朝紀政』卷六、紀鄰穀協濟）。湖廣は、その一部が川鹽・淮鹽并銷の地であつたほかは、淮鹽の行銷區域であつたのである。

補注7 長江を上下する船舶の動きは、水位の高下と風信のいかんによつて著しい影響を受けた。長江上流についての本文所見のものほか、たとえば「毎年六七八三個月。江水泛漲。上下客船稀少。貨稅不及春冬二季」とか（『諭旨』第四函、馬會伯、五年四月十八日）、「今年秋中。江水平順。未曾漲溢。每年商船。冬春乘江涸始下者。今秋先到者甚多」とか（第十二函、魏廷珍、七年十月二十五日）、「長江挽運。原屬艱險。夏季南風。不能前進」などと言われている通りである（第四函、謝賜履、二年閏四月四日）。なおついでながら、海運のみならず、江運・河運をも支配したいわゆる季節風の吹き方は、舊曆的にこれを表現すれば、まずその年の「八月の末に」北風が起り初める（第十三函、李衛、五年一月十七日）。「霜降（九月中氣）以後」になると、運河というなら、西北風が多くなつて、南船が北に來られなくなる（第十函、田文鏡、六年十月二十七日）。年が明けて「立春（正月節氣）以後」には漸く南風がでる（第十三函、李衛、五年一月十七日）。「入夏（立夏（四月中氣）以來、運河の地方では東南風が競い（前出、田文鏡）、「夏至（五月中氣）の後」になると南風が盛んに發する（前出、李衛、また四年六月一日）。「春夏、南風盛んに發する」といわれていたゆえんのものに外ならない（第十七函、鄂彌達、十二年十月八日）。だから例えば江

浙から福建に物資を海運しようと思えば、おそくとも「冬末春初、北風多有の時に趁じて開行運閩」せねばならなかつたのである（第十四函、高其倬、四年十一月二十八日、四年十二月二十日）。

補注8 船隻の米の積載量は船種・船型によつてまちまちである。漕船の場合は、元來は每船、正耗米五百石と土宜（土產物）六十石とを載運することになつていたが、雍正七年にはその土宜を増して百石とし、八年にはさらにこれを百二十石とした。（乾隆末にはこれが計二百石にまでなる）。計六百石前後が表向きに積載量となつていたわけである。千石積み改装してはという議論（實現せず）を出した鄂爾泰の言葉に、「糧艘舊式。船身雖廣闊長大。而每船所裝額米不過六百石」というものがそれである（『諭旨』第八函、二年七月二十四日）。しかし實際は米その他の貨物をもつと餘分に積み込むのが普通であつた（同上）。李衛が、百十餘隻の漕船では八・九萬石の漕糧が運べる（『諭旨』第十函、李衛、四年十一月二十日？）、つまり每船七・八万石は積めると考えているのは、むしろその實際的な積載量にちかい。商船ともなると、今度は無理にも積載しようとする傾向が強くなる。例えば乾隆五十年の上諭に、「幫船（漕船）每隻運米。不過五百餘石。商販船隻。載米至千百石者。其船尚不及漕艘之半」という通りである（『光緒大清會典事例』卷二百二、戶部、漕運。揚子江を上下する商船・民船の米の積載量は、一般的にみて、每船千石には達してゐたのではなかつたかと思う。魏廷珍が民船一百四十五號を雇つて十萬石の湖南米を運び出せる、つまり每船約七百石は積めると計算するとき（『諭旨』第十二函、魏廷珍、元年十二月二十日）、彼の念頭を去來した計算基準は、民船の常例的なそれではなくて、要するに漕船の實際的な積載量にしか過ぎな

り繁華なところだという事實の認定の上に立つていたものであろう。二つの違つた見方のうち、どちらが正しく、どちらが間違つているのか急には判定がつかない。あるいはどちらも正しく、一見互いに違ふように見えるのは、時世の前後による語義の變遷を反映して、たに過ぎないのかも知れない。いずれにせよ、市と鎮とは極めて密接な關係にある概念だつたのであり、ある地が確實に楓橋市と呼ばれたものである以上、その地がまた、いつの時に楓橋鎮と呼ばれたことがあつたと見ても恐らく誤りはないであらう。楓橋鎮が楓橋と省略形でいわれることは、潞墅（許市）關をしばしば潞關といふのと一例であつて、むしろ有り易いことに屬する。

楓橋あるいは楓鎮は、蘇州府城の西北部にある閶門の正西七里の地點にあつた。いわゆる閶門外一帯の地——北寄り虎邱から西寄り楓橋におよぶ一圓の地域は、宋元以來、とくに明代以來、城内のどこにも増した繁華をもつて知られていた。この地域が大蘇州の商業地區でもあり、娛樂地區でもあつたのである。さらには工業區域としても異常な活況を呈し、とりわけ絹絲布工業の盛んであつたことは、たとえば「閶關外一帯。地方遼闊。各匠數盈萬餘」とか（『諭旨』第十三函、李衛、七年十二月二日）、「蘇州閶門外一帯。充包頭者共有三百四十餘人。設立踰坊四百五十餘處……」などと傳えられてゐるとおりである（李衛、八年七月某日）。中でも虎邱と前後山塘とは、一面、江寧の秦淮河、揚州の天寧門外平山堂に勝るとも劣らない「醉郷」として著聞すると同時に（清錢泳『履園叢話』卷七、醉郷）、他面「貨物もまた阜く、乃ち入蘇の間道なり」といわれる商業上の要地でもあつた（清顧炎武『天下郡國利病書』第四冊、蘇州府上、長洲縣、郊聚）。しかもこの間道に對する「入蘇の

正道」として「商賈の駢集」するところとなつていたものこそ、問題の楓橋に外ならない（同上參照）。明末のことである。倭警急を告げるにおよんで、蘇州府城閶門外の要地を城郭を築いて防護しようという議論が現われてきた。このさい、その外城壁に包含さるべき地域の西端はやはりこの楓橋であつた。外城壁はできなかつたけれども、この挿話はよく蘇州に對する楓橋の重要さを物語つていよう（『利病書』第五冊、蘇州府下、閶西築城論（劉鳳））。清代雍正期前後にもまだ、閶門外一帯の繁榮が続いていたことは、たまたま李衛らの奏疏のうちに、「蘇州城外煙火百萬戶。除楓橋千總。並無別員彈壓」とあることから明白である（『諭旨』第十三函、李衛、八年七月某日）。上下塘・南北潞・前後山塘・楓橋などを含むこの地區には、實に數百萬の大口がひしめき合つていたものと見える。（なお蘇州の西北二十五里にある潞墅關も時には「閶門外要衝。莫若潞墅」などいつて、閶門外の一部と見なされている（『利病書』第四冊、蘇州府上、長洲縣、郊聚）。百萬戶のうちには、少しく遠目ながらも、あるいはこの地の戸數も含まれていたのかも知れない）。ゆらい蘇州は巨商大賈の町として知られている。ことに、例えば浙省の鹽商あり（『諭旨』第十三函、李衛、六年八月二十四日）、湖州出身の洋商あり（同上、李衛、六年九月二十五日）、福建の客商あり（同上、第三函、何天培、元年五月二十四日）で、他省出身の巨商が多くこの地に本據を構えていたことは特徴的だが、これらも概して閶門外、とくに後述のような特定の諸地區におつたものと思われるのである。

楓橋は要するに、潞墅關と相呼應しながら、蘇州城内への正道の門戸となつていた所である。そしてその楓橋と蘇州、というよりは、

「京省商賈の集まる所の處」といわれたその城外・月城地區や（『蘇州府志』卷十九、鄉都）、「客商の聚集もつとも多し」といわれた同じ城外の南潞地區（上出『諭旨』何天培）など總じて蘇州の商人街との機能的な關係は、「廣東省城。洋商舶賣雲集。而一應貨物。俱在南海縣屬之佛山鎮貿易。該鎮綿延十餘里。煙戶十餘萬。五方雜處」といわれる場合の（『諭旨』第十六函、楊永斌、十一年三月四日）、佛山鎮と廣州との關係に似て、しかもそれを何層倍か大げさにしたものと考えておけば間違ひはあるまい。楓橋がもし鎮であつたとするなら、それは、いわゆる四大鎮（河南朱仙・江西景德・廣東佛山・湖北漢口）をもしのぐ大鎮であつたわけである。

楓橋における最も活潑な取り引き貨物は、『蘇州府志』卷十九、鄉都、吳縣、市の條に、

在閶門西七里。地與長邑（長洲縣）合治。爲水陸孔道。販賣所集（清顧祖禹『讀史方輿紀要』卷二十四、南直六、蘇州府、楓橋の條には「今爲水陸孔道。商民錯聚於此」とする）。有豆市・米市。有千總駐防。

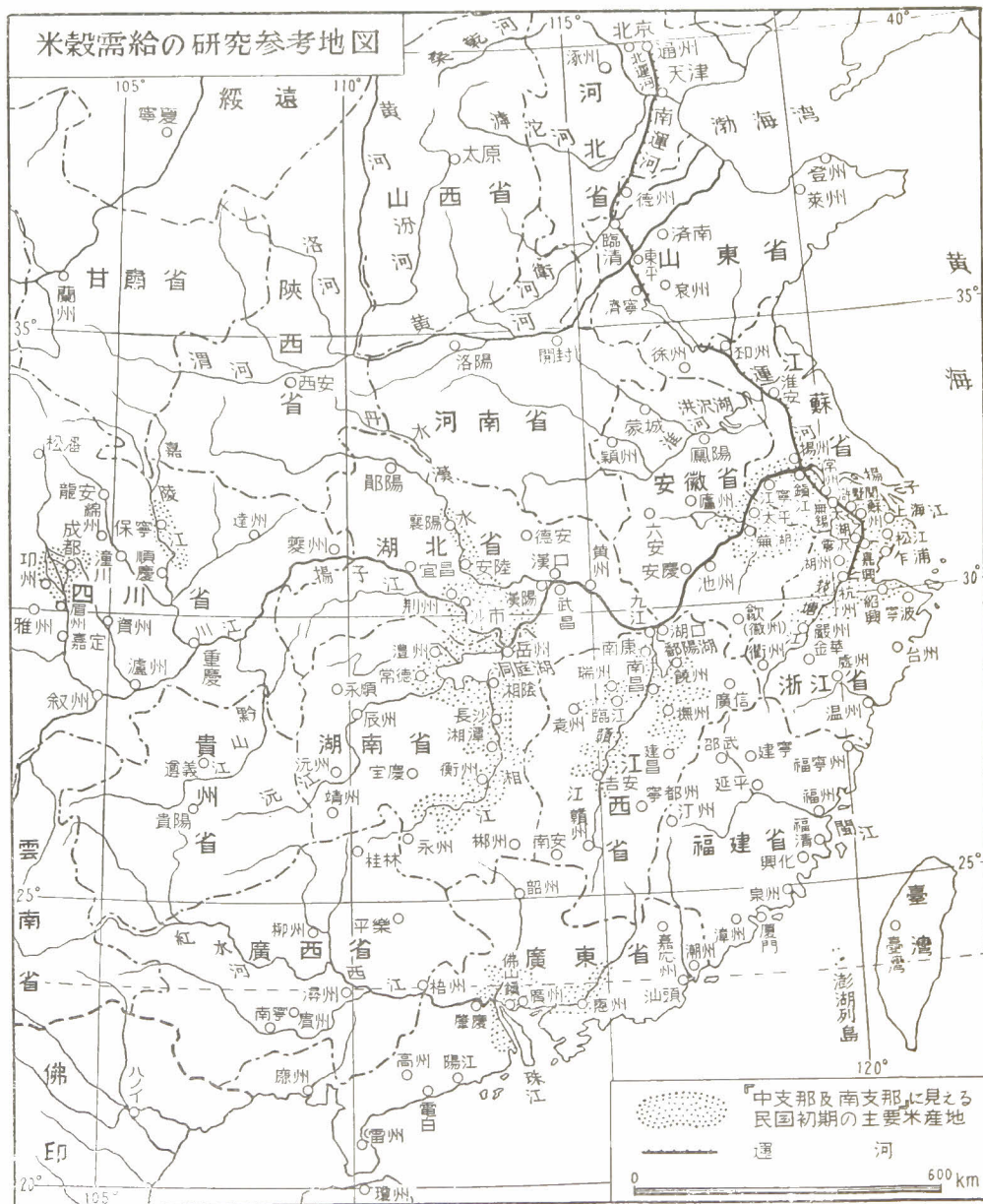
とあるのから察すると、豆と米とであつたように思われる。米については本文所引の諸例のほか、明代についても例えば『利病書』第五冊、蘇州府下、三吳の水利に關する記事の中に、「且如商賈從長沙販米。經年累月。涉歷風濤。只是欲得米。故不辭艱苦。今在平河載土。近處撈泥。得一船即是一船之米。得萬船即是萬船之米」といつている。湖南米の活潑な移入ぶりをしのばせるに足る。豆については、安徽蕪湖關に關係してではあるが、雍正期の同關の「頼むところの者は、湖廣の豆船の紛集して以つて課税を益す」にあつたといわれる（『諭旨』第十二函、魏廷珍、五年十一月十九日）。當然、

江蘇にも湖廣の豆船が來たはずである。また江南の貨船が、返り荷として青白二豆を多く山東省から移入したことも際立つた事實である（同上、第十五函、岳濟、十二年八月八日）。これらの米や豆のおそらく當時の中國における最大の集散地として賑わつていたのが、蘇州の楓橋市（鎮）であつたと思われるのである。

現在の楓橋は見る影もない一寒村にすぎない。いな蘇州自体が經濟的には過去の都會で、はやく民國初期にあつても、「蘇州ニ於ケル商業區域ハ狹隘ニシテ宏壯ナル經營ヲ施行スルニ不便ナリ……本港ノ勢力範圍ハ當地附近四鄉、八鎮及常熟・無錫・常州・丹陽地方ニ過キス」などと觀測されていた（大正十年、外務省通商局『蘇杭事情』九頁）。蘇州とくに楓橋に對する打撃の第一彈は、千八百四十年代、五港開放の結果として引きおこされた上海市場の據頭とその隆盛とである。このためある程度まで市場としての繁榮を奪われたところに、さらに打撃の第二彈としての太平天國の亂による破壊がつづいた。煙火百萬戸を誇つた閶門外の繁華街も一時は跡方もなくなり、その回復の力も、ついにその西邊の楓橋までは及ばなかつた。「米・麥・大豆・小豆・菜種等ノ產地並取引中心地ニシテ此等ノ問屋多ク、實ニ雜糧ノ集散地トシテハ江南第一ト認メラル」といわれる近時の無錫の繁榮は（同上、二頁）、正しくかつての楓橋市の遺構をついでのと見てよい。ついで蘇州は、杭州などとは違つて第一・第二の革命の戰亂によつても少なからぬ打撃をうけた（同上、六二頁）。楓橋豆米市場の繁榮も完全に過去の語り草となり、上海および無錫がこれに代つてしまつた。

「語り草」とはいえ、語り繼がれているならまだしもなのである。楓鎮・楓橋市のことは、今まではすつかり忘却の淵に追いやられて

米穀需給の研究参考地図



いたかのように見える。しかもこの鎮市の正体を明らかにすることは、近世中國商業史の究明にとつての、必要にして缺くべからざる前提條件の一つをなす。無錫↓上海市場がもし、商業史的にみて近代ないしは現代中國を象徵するものだとするなら、蘇州楓橋市場こそは、確かに宋代以來の近世中國を象徵するものだと言うことができるからである。明清時代の經濟史料に精通する、それもできることなら若手の歴史家の手によつて、一日もはや、この楓橋市の市場機構などについての詳しい研究の試みられることを希望してやまない。史料の關係で、あるいは絶望的なまでに困難な仕事であるかも知れないけれども。

補注 10 諸外國のうちで、米穀の對華持ちこみ國として中國と最も密接な關係をもつていたと思われるのは暹羅である。朝鮮からも貢米の事實がないではなかつたが、これは毎年百石（のち減じて四十石）、それも宮廷内の祭祀の用に供するに過ぎなかつた（『上諭』第十七冊、六年二月三日）。暹羅の米については、王慶雲『熙朝紀政』卷八、「紀海舶米糧」の條に

（康熙）六十一年。暹羅國人言。地饒稻米。一石直銀二三錢。諭令販運三十萬石於閩・粵・寧波。免其稅。雍正二年。米至粵。得旨。暹羅國王不憚險遠。進獻稻種果樹。恭順可嘉。令地方照時價發賣。特免壓船貨（蘇木・鉛錫・海參・烏木等の貨をいう）稅。其後至各省。免米稅如例。時以閩浙產米不敷。弛南洋之禁。令民得往貿易。

といい、またその「紀米糧稅」の條には（康熙）六十年……時屢免暹羅海舶米穀之稅」といつている。雍正期前後の清朝が、外米、とくに暹羅米の輸入に積極的な關心を示していたことは明らかであろう。ただし、大海船百艘分にも相當する三十萬石といった大量の米穀が、それも、ある一年の中に輸入してきたかどうかはすこぶる疑わしい。問題の雍正二年の十月二十八日の上諭に、「此次已到之米。與該國現經發運續到者。皆照粵省一体遵行。嗣後。且令暫停。俟有需米之處。候朕降旨遵行」とあるところから考えると、三十萬石計畫は、少なくともその後は一應沙止みになつたのであらう（『雍正上諭』）。また事實、暹羅米船の消息はその後それほど史料の上に現れてこない。わずかに雍正六年春、暹羅國某船主のこと（『諭旨』第二函、楊文乾、六年三月二日）、六年秋國王の命を受け厦門を目ざしてきた同國船主陳宇のこと、七年秋、廣東省を目ざしてきた同國船主李萬受らのことが見受けられるにすぎない（同上、第八函、施廷專、六年九月二十二日、七年三月三日、七年八月十二日）。これらはいずれも、目的地以外に飄流もしくは灣泊して中國官憲の保護を受けた例ばかりである。これら以外に、まともに目的地に達して正常な交易をいとなみ、特に記録に上らなかつたものもあつたかも知れぬが、それにしても暹羅米船の來航は、多くとも一年に一、二艘ぐらいて、その積載量も合わせて五六千石程度を出なかつたのではないであらうか。

to those of the gentry. When he tried to use resources of the local gentry for the construction of embankment along the Yellow River, the local scholars rose in protest against his policy, resulting in examination boycott, because they were largely sons of landlords and represented the interest of the local gentry class.

The Supply and Demand of the Staple Food in the Reign of Emperor Yung-chêng

Takeo Abe

In the Yung-chêng period of the Ch'ing dynasty the staple food was millet in north China, while that in middle and south China it was rice. All over China wheat and barley were also cultivated, and the area of wheat and barley cultivation was proportionate to that of rice, i.e., where rice was grown more, wheat and barley were raised less, and vice versa. It seems that the quotient of the cultivated area divided by the population indicates the general situation of the supply and demand of the staple food in each province. And Ssu-chuan 四川, Hu-nan 湖南, Kuang-tung 廣東 and some other provinces had probably enough, while such provinces as Fu-chien 福建 and Chě-chiang 浙江 were in a straitened state. Grain requisitions in various forms seem to have aggravated the unbalanced supply and demand relations. Shortage of the staple food in these poor provinces was to a certain extent covered by the cultivation of wheat and barley, but the rest was imported from the rich provinces, and the main route of rice transportation was that connecting Han-k'ou-chên 漢口鎮 in Hu-pei 湖北 with Fêng-chiao-chên 楓橋鎮 in Chiang-su 江蘇.